椎屋形遺跡
第1遺跡
第2遺跡
椎屋形原遺跡
椎屋形の上

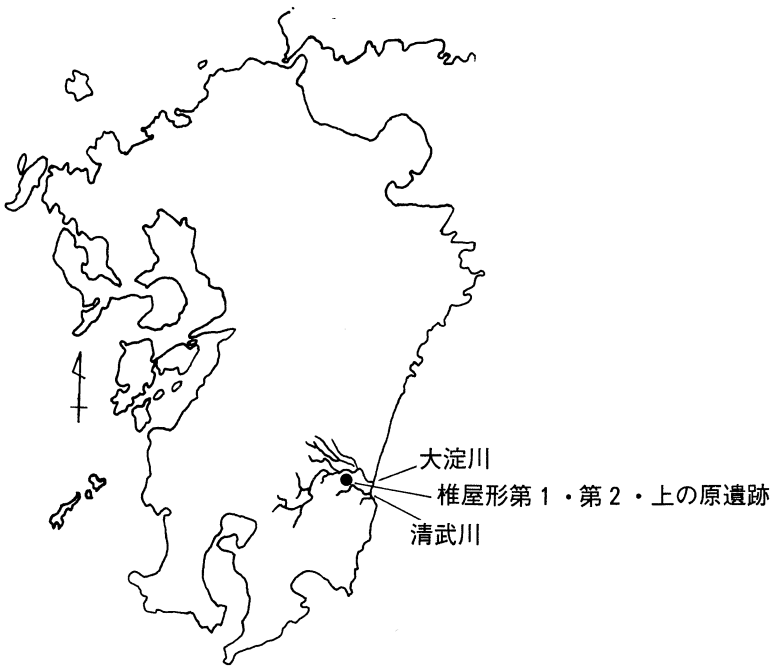
県営農地保全整備事業時屋地区に
伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

1996

宮崎市教育委員会

椎屋形第1遺跡
椎屋形第2遺跡
上の原遺跡

県営農地保全整備事業時屋地区に
伴う埋蔵文化財発掘調査報告書



１９９６

宮崎市教育委員会

序

宮崎市は、第２次宮崎市総合計画（昭和６１年度から平成１２年度）の中で、「活力とうるおいのみちた文化の香り豊かなまち・・・みやざき・・・」を目標とする都市像としております。その都市像を構成する基本目標の１つとして「活力と魅力にみちたまち」を掲げ、ほ場整備、用排水路整備、農道整備、農地防災等の農業生産基盤の整備を実施しているところであります。

これらの整備の一環として、平成元年度から、宮崎市と清武町にまたがる時屋地区において、県営農地保全整備事業が行われておりますが、この地区内には埋蔵文化財の包蔵地が数多く存在しています。これらの埋蔵文化財の取扱いについては、十分協議を重ね、文化財保護に対するご理解とご協力をお願いしているところでありますが、工事により止むを得ず消滅するこれらの埋蔵文化財については、事前に記録保存が必要となり、平成３年度から５年度にかけて「椎屋形第１遺跡」「椎屋形第２遺跡」「上の原遺跡」の発掘調査を実施いたしました。

本書は、これらの発掘調査記録であります。調査の結果、旧石器時代、縄文時代草創期・早期、弥生時代中期～後期の遺構と遺物が多数確認され、当地の歴史を解明する上で重要な資料を得ることができました。

本書が、地域歴史の正しい認識と理解、文化財保護思想の普及の一助となり、さらに学術研究の資料としてご活用いただければ幸いに存じます。

最後になりましたが、発掘調査に際しましては、地元の方々をはじめ、関係者の皆様には一方ならぬご尽力を賜りました。皆様に対し、心より厚く御礼申し上げます。

平成８年３月

宮崎市教育委員会

教育長　稲　倉　宗　知

例　　言

1　本書は、宮崎県中部農林振興局が宮崎市大字細江～宮崎郡清武町大字船引に計画した県営農地保全整備事業時屋地区のほ場整備に伴う事前調査として、宮崎市教育委員会が実施した椎屋形第１遺跡・椎屋形第２遺跡・上の原遺跡の発掘調査報告書である。

2　本書に使用した位置図は、国土地理院発行の２万５千分の１図をもとに作成し、周辺地形図等は中部農林振興局作成の千分の１図をもとに作成した。また、掲載した遺構図等は各調査員が発掘作業員及び県文化課職員の協力を得て主に実測し、一部測量業者等に委託したものについても各調査員が訂正加筆し補正している。

3　遺物・図面等の整理は、宮崎市歴史文化館及び宮崎県総合博物館埋蔵文化財センターで行い、掲載した図面等の作成は、各調査員が整理補助員等の協力を得てこれを行った。

4　各遺跡におけるテフラ分析等自然科学分析は、有限会社　古環境研究所に委託した。

5　本書に使用した方位は主に磁北（M.N.）であり、位置図など一部は座標北（G.N.）である。また、本書では、掘立柱建物跡をＳＢ、竪穴住居跡等をＳＡ、土坑をＳＣ、周溝状遺構をＳＬ、集石遺構をＳＩと表示している。土器の色調や土層については、農林省農林水産技術会議事務局監修「新版標準土色帖」に準拠した。石材同定は、主に宍戸　章氏の御教示による。

6　本書に使用した写真は、航空写真を株式会社　スカイサーベイに委託したほかは、各調査員が撮影した。

7　本書の執筆は各調査員が分担して行い、編集は共同で行った。文責は、本文目次に明記している。

8　遺物・図面等は、宮崎市歴史文化館で保管する予定である。

本　文　目　次

第Ⅰ章　はじめに ……（菅付）……1
　第1節　調査に至る経緯 ……1
　第2節　調査の組織 ……1
　第3節　遺跡の位置と環境 ……2

第Ⅱ章　椎屋形第1遺跡の調査 ……（菅付）……4
　第1節　調査区の設定と調査の概要 ……4
　第2節　調査の記録 ……4
　　1　層序 ……4
　　2　A地区の調査 ……7
　　1　縄文時代の遺構と遺物 ……7
　　（1）　草創期 ……7
　　（2）　早期 ……8
　　2　弥生時代の遺構と遺物 ……23
　　（1）　掘立柱建物跡（SB） ……23
　　（2）　竪穴住居跡等（SA） ……29
　　（3）　周溝状遺構（SL） ……42
　　（4）　土坑（SC） ……42
　　（5）　出土土器 ……48
　　3　B地区の調査 ……54
　　1　縄文時代の遺構と遺物 ……54
　　（1）　早期 ……56
　　4　自然科学分析調査の結果 ……59
　第3節　まとめ ……63

第Ⅲ章　椎屋形第2遺跡の調査 ……（重山）……79
　第1節　調査区の設定と調査の概要 ……79
　第2節　調査の記録 ……79
　　1　層序 ……79
　　2　縄文時代早期の遺構と遺物 ……82
　　1　土坑 ……82
　　2　炉穴 ……90
　　3　集石遺構 ……98
　　3　自然科学分析調査の結果 ……136

第３節　まとめ ……145
第Ⅳ章　上の原遺跡の調査 ……（重山）……155
第１節　調査区の設定と調査の概要 ……155
第２節　調査の記録 ……155
1　層序 ……155
2　旧石器時代 ……161
3　縄文時代 ……161
1　草創期 ……161
2　早期 ……161
4　自然科学分析調査の結果 …… 173
第３節　まとめ …… 181

挿　図　目　次

第１図　時屋地区遺跡位置図 …… 3
第２図　椎屋形第１遺跡調査区及びグリッド設定図 …… 5
第３図　椎屋形第１遺跡基本土層柱状図及びＡ地区土層断面図 …… 6
第４図　椎屋形第１遺跡Ａ地区　草創期調査区 …… 9・10
第５図　椎屋形第１遺跡Ａ地区　草創期遺物平面分布・垂直分布図 …… 9・10
第６図　椎屋形第１遺跡Ａ地区　主要草創期土器平面・垂直分布図 ……11・12
第７図　椎屋形第１遺跡Ａ地区　草創期土器実測図（１） ……13
第８図　椎屋形第１遺跡Ａ地区　草創期土器実測図（２） ……14
第９図　椎屋形第１遺跡Ａ地区　草創期土器実測図（３） ……15
第10図　椎屋形第１遺跡Ａ地区　主要草創期石器平面・垂直分布図 ……19・20
第11図　椎屋形第１遺跡Ａ地区　草創期石器実測図（１） ……21
第12図　椎屋形第１遺跡Ａ地区　草創期石器実測図（２） ……22
第13図　椎屋形第１遺跡Ａ地区及び西側工事区出土早期土器実測図 ……22
第14図　椎屋形第１遺跡Ａ地区　弥生時代遺構分布図 ……24
第15図　椎屋形第１遺跡Ａ地区　ＳＢ１～２実測図 ……26
第16図　椎屋形第１遺跡Ａ地区　ＳＢ３～４実測図 ……27
第17図　椎屋形第１遺跡Ａ地区　ＳＢ５～６及びＳＢ６周辺出土土器実測図 …28
第18図　椎屋形第１遺跡Ａ地区　ＳＡ１～２実測図 ……30
第19図　椎屋形第１遺跡Ａ地区　ＳＡ１出土土器実測図 ……31
第20図　椎屋形第１遺跡Ａ地区　ＳＡ３実測図 ……32
第21図　椎屋形第１遺跡Ａ地区　ＳＡ１～４出土土器実測図 ……33

第22図　椎屋形第１遺跡Ａ地区　ＳＡ４～６・14実測図 …… 34
第23図　椎屋形第１遺跡Ａ地区　ＳＡ５、６・14、７出土土器実測図 …… 36
第24図　椎屋形第１遺跡Ａ地区　ＳＡ７～９実測図 …… 37
第25図　椎屋形第１遺跡Ａ地区　ＳＡ10～12実測図 …… 38
第26図　椎屋形第１遺跡Ａ地区　ＳＡ８～11出土土器実測図 …… 40
第27図　椎屋形第１遺跡Ａ地区　ＳＡ13、17実測図 …… 41
第28図　椎屋形第１遺跡Ａ地区　ＳＡ15・16・18・19実測図 …… 43
第29図　椎屋形第１遺跡Ａ地区　ＳＡ11～13、15～17出土土器実測図 …… 44
第30図　椎屋形第１遺跡Ａ地区　ＳＡ19、ＳＬ１、ＳＣ２出土土器実測図 …… 45
第31図　椎屋形第１遺跡Ａ地区　ＳＬ１、ＳＣ１実測図 …… 45
第32図　椎屋形第１遺跡Ａ地区　ＳＣ２実測図 …… 46
第33図　椎屋形第１遺跡Ａ地区　ＳＣ２土器片利用部位状況図 …… 47
第34図　椎屋形第１遺跡Ａ地区　住居跡出土石器実測図 …… 51
第35図　椎屋形第１遺跡Ａ地区　住居跡出土石器・鉄器実測図 …… 52
第36図　椎屋形第１遺跡Ｂ地区　縄文時代早期遺構分布図 …… 55
第37図　椎屋形第１遺跡Ｂ地区　早期土器実測図 …… 57
第38図　椎屋形第２遺跡　周辺地形図 …… 80
第39図　椎屋形第２遺跡　基本土層図 …… 81
第40図　椎屋形第２遺跡　土坑・炉穴分布図 …… 83･84
第41図　椎屋形第２遺跡　土坑実測図（１） …… 85
第42図　椎屋形第２遺跡　土坑実測図（２） …… 87
第43図　椎屋形第２遺跡　土坑実測図（３） …… 88
第44図　椎屋形第２遺跡　土坑実測図（４） …… 89
第45図　椎屋形第２遺跡　炉穴実測図（１） …… 91
第46図　椎屋形第２遺跡　炉穴実測図（２） …… 94
第47図　椎屋形第２遺跡　土坑内出土遺物実測図（１） …… 96
第48図　椎屋形第２遺跡　土坑内出土遺物実測図（２） …… 97
第49図　椎屋形第２遺跡　炉穴内出土遺物実測図（１） …… 99
第50図　椎屋形第２遺跡　炉穴内出土遺物実測図（２） …… 100
第51図　椎屋形第２遺跡　炉穴内出土遺物実測図（３） …… 101
第52図　椎屋形第２遺跡　炉穴内出土遺物実測図（４） …… 102
第53図　椎屋形第２遺跡　炉穴内出土遺物実測図（５） …… 103
第54図　椎屋形第２遺跡　集石遺構分布図 …… 107･108
第55図　椎屋形第２遺跡　集石遺構実測図（１） …… 109
第56図　椎屋形第２遺跡　集石遺構実測図（２） …… 110
第57図　椎屋形第２遺跡　集石遺構実測図（３） …… 111

第58図　椎屋形第２遺跡　集石遺構実測図（４）…… 112
第59図　椎屋形第２遺跡　集石遺構実測図（５）…… 113
第60図　椎屋形第２遺跡　集石遺構実測図（６）…… 114
第61図　椎屋形第２遺跡　集石遺構実測図（７）…… 115
第62図　椎屋形第２遺跡　集石遺構実測図（８）…… 116
第63図　椎屋形第２遺跡　集石遺構内出土遺物実測図（１）…… 117
第64図　椎屋形第２遺跡　集石遺構内出土遺物実測図（２）…… 118
第65図　椎屋形第２遺跡　包含層出土遺物実測図（１）…… 121
第66図　椎屋形第２遺跡　包含層出土遺物実測図（２）…… 122
第67図　椎屋形第２遺跡　包含層出土遺物実測図（３）…… 123
第68図　椎屋形第２遺跡　包含層出土遺物実測図（４）…… 124
第69図　椎屋形第２遺跡　包含層出土遺物実測図（５）…… 125
第70図　椎屋形第２遺跡　包含層出土遺物実測図（６）…… 126
第71図　椎屋形第２遺跡　包含層出土遺物実測図（７）…… 127
第72図　椎屋形第２遺跡　石器実測図（１）…… 130
第73図　椎屋形第２遺跡　石器実測図（２）…… 131
第74図　椎屋形第２遺跡　石器実測図（３）…… 132
第75図　椎屋形第２遺跡　石器実測図（４）…… 133
第76図　椎屋形第２遺跡　石器実測図（５）…… 134
第77図　上の原遺跡　周辺地形図 …… 156
第78図　上の原遺跡　基本土層図 …… 157
第79図　上の原遺跡　Ｃ区・Ｄ区土層断面図 …… 157
第80図　上の原遺跡　Ａ区北側・Ｄ区グリッド配置及び遺構配置図 …… 158
第81図　上の原遺跡　Ａ区南側グリッド配置図 …… 159
第82図　上の原遺跡　Ｂ区グリッド配置及び遺構配置図 …… 160
第83図　上の原遺跡　集石遺構実測図 …… 161
第84図　上の原遺跡　Ｂ区遺物分布図 ……162
第85図　上の原遺跡　Ｃ区遺物分布図 ……163
第86図　上の原遺跡　Ｄ区遺物分布図 …… 163
第87図　上の原遺跡　旧石器時代遺物実測図（１）…… 164
第88図　上の原遺跡　旧石器時代遺物実測図（２）…… 165
第89図　上の原遺跡　縄文時代草創期遺物実測図 …… 166
第90図　上の原遺跡　縄文時代早期遺物実測図（１）…… 167
第91図　上の原遺跡　縄文時代早期遺物実測図（２）…… 168
第92図　上の原遺跡　縄文時代石器実測図（１）…… 169
第93図　上の原遺跡　縄文時代石器実測図（２）…… 170

表　目　次

表１　椎屋形第１遺跡Ａ地区　縄文時代草創期土器観察表（１）…… 16
表２　椎屋形第１遺跡Ａ地区　縄文時代草創期土器観察表（２）…… 17
表３　椎屋形第１遺跡Ａ地区　縄文時代草創期石器計測表 …… 18
表４　椎屋形第１遺跡Ａ地区　縄文時代早期石器計測表 …… 23
表５　椎屋形第１遺跡Ａ地区　弥生時代遺構一覧表 …… 25
表６　椎屋形第１遺跡Ａ地区　弥生土器観察表（１）…… 49
表７　椎屋形第１遺跡Ａ地区　弥生土器観察表（２）…… 50
表８　椎屋形第１遺跡Ａ地区　弥生時代石器計測表 …… 53
表９　椎屋形第１遺跡Ｂ地区　集石遺構一覧表 …… 56
表10　椎屋形第１遺跡Ｂ地区　縄文時代早期土器観察表 …… 58
表11　椎屋形第２遺跡　土坑内出土遺物観察表 …… 103
表12　椎屋形第２遺跡　炉穴内出土遺物観察表（１）…… 104
表13　椎屋形第２遺跡　炉穴内出土遺物観察表（２）…… 105
表14　椎屋形第２遺跡　集石遺構一覧表（１）…… 119
表15　椎屋形第２遺跡　集石遺構一覧表（２）…… 120
表16　椎屋形第２遺跡　集石遺構内出土遺物観察表 …… 120
表17　椎屋形第２遺跡　包含層出土遺物観察表（１）…… 127
表18　椎屋形第２遺跡　包含層出土遺物観察表（２）…… 128
表19　椎屋形第２遺跡　包含層出土遺物観察表（３）…… 129
表20　椎屋形第２遺跡　石器計測表（１）…… 135
表21　椎屋形第２遺跡　石器計測表（２）…… 136
表22　上の原遺跡　土器観察表（１）…… 171
表23　上の原遺跡　土器観察表（２）…… 172
表24　上の原遺跡　石器計測表（１）…… 172
表25　上の原遺跡　石器計測表（２）…… 173
表26　報告書抄録 …… 185

図　版　目　次

図版１　椎屋形第１遺跡Ａ地区　ＳＡ17出土種実 …… 65
図版２　椎屋形第１遺跡Ａ地区 …… 66
図版３　椎屋形第１遺跡Ａ地区 …… 67
図版４　椎屋形第１遺跡Ａ地区 …… 68
図版５　椎屋形第１遺跡Ａ地区及びＢ地区 …… 69
図版６　椎屋形第１遺跡Ｂ地区 …… 70
図版７　椎屋形第１遺跡Ａ地区　縄文時代草創期土器（１） …… 71
図版８　椎屋形第１遺跡Ａ地区　縄文時代草創期土器（２） …… 72
図版９　椎屋形第１遺跡Ａ地区　縄文時代草創期石器 …… 73
図版10　椎屋形第１遺跡Ａ地区　縄文時代早期土器・石器及び弥生土器（１） …… 74
図版11　椎屋形第１遺跡Ａ地区　弥生土器（２） …… 75
図版12　椎屋形第１遺跡Ａ地区　弥生土器（３） …… 76
図版13　椎屋形第１遺跡Ａ地区　弥生土器（４）及び石器（１） …… 77
図版14　椎屋形第１遺跡Ａ地区　弥生時代石器（２）
及びＢ地区縄文時代早期出土遺物 ……78
図版15　椎屋形第２遺跡 …… 147
図版16　椎屋形第２遺跡 …… 148
図版17　椎屋形第２遺跡 …… 149
図版18　椎屋形第２遺跡 …… 150
図版19　椎屋形第２遺跡　炉穴出土遺物 …… 151
図版20　椎屋形第２遺跡　炉穴出土遺物・集石出土遺物・包含層出土遺物 …… 152
図版21　椎屋形第２遺跡　包含層出土遺物　石器 …… 153
図版22　椎屋形第２遺跡　石器 …… 154
図版23　上の原遺跡遺構等 …… 183
図版24　上の原遺跡　出土遺物 …… 184

第Ⅰ章　はじめに

第１節　調査に至る経緯

県営農地保全整備（特殊農地保全整備）事業時屋地区は、宮崎市から清武町にまたがる約60haの広大な地区を対象に、県中部農林振興局が平成元年に採択、実施中の事業である。事業内容は、南九州特有のシラス台地でのほ場整備及び畑地潅漑、道・排水路の設置が中心となっている。

文化財の取扱いに関しては、事業採択の平成元年10月に中部農林振興局長名で県教育委員会文化課に文化財の所在の有無について照会があり、同課では同年12月に地区内に12カ所の遺物散布地が存在することを回答している。その後、平成３年１月には県文化課により椎屋形地区の東半部分の確認調査が実施され、協議の結果、切土部分については事前に発掘調査を行い記録保存の措置をとることとなった。文化財保護法第57条の３の工事の通知は同年８月29日付で提出され、同９月13日付で発掘調査の指示がなされている。宮崎県の場合、県営ほ場整備事業に伴う発掘調査は原則として市町村教育委員会が調査主体となって実施している。そこで、県文化課と宮崎市教育委員会文化振興課とで協議を行ったが、市文化振興課が当時多大な量の発掘調査を多く抱えていたことから、宮崎市教育委員会が調査主体となり、県文化課から調査員を派遣して調査を実施することとなった。

ほ場整備事業は、椎屋形地区の東半部分が平成３年度に、西半部分が平成４年度に、谷を越えて東側の上の原地区が平成５年度に実施され、これら宮崎市内部分のほ場整備に伴う発掘調査は、同様の理由で宮崎市が調査主体となり県の派遣職員が調査を実施するという体制で行われた。

なお、平成６年度以降は、遺跡が宮崎市と清武町とにまたがることから、両市町と県とで協議を重ねた結果、県教育委員会が調査主体となり発掘調査を実施している。

宮崎市内部分の発掘調査は、中部農林振興局と設計を担当した宮崎県土地改良事業団体連合会等を含め、いくたびか遺跡の保護と調査面積の減のための調整をはかった結果、椎屋形地区の東半部分の椎屋形第１遺跡が平成３年10月31日より平成４年２月10日まで延64日約4,500㎡を調査、西半部分の椎屋形第２遺跡が平成４年10月15日より平成５年２月12日まで約4,500㎡を調査、上の原地区の上の原遺跡が平成５年６月14日より平成５年９月14日まで延46日約4,200㎡を調査して終了した。この間、地元土地改良区には、作付けの調整や休耕措置等多大な御協力をいただいた。

第２節　調査の組織

調査の組織は、次のとおりである。

調査依頼　宮崎県中部農林振興局

局　　長　中山康行（平成３～４年度）、長友士郎（平成５年度）

調査主体　宮崎市教育委員会

教　育　長　柚木崎　敏（平成３～５年度）

教育局長　河野　　喬（平成３～４年度）、伊豆凱夫（平成５年度）

文化振興課長　瀬戸口　遵（平成３～５年度）

同 課 長 補 佐　森本雍子（平成３～４年度）、白坂昊士（平成５年度）
調査総括　文化財係主幹　野間重孝（平成３～４年度）
文 化 財 係 長　井手上仁悟（平成５年度）
庶務担当　同　主　事　井上治美（平成３～５年度）
調査担当　宮崎県教育委員会
文化課主任主事　菅付和樹（平成３年度）
同　主　事　長友（現　重山）郁子（平成４～５年度）
調整担当　同　主　査　面高哲郎（平成３年度）
同　主　査　石川悦雄（平成４年度）
同　主　査　菅付和樹（平成５年度）
調査協力　時屋土地改良区理事長 [redacted] ほか同土地改良区の皆さん、宮崎県農業開発公社

第３節　遺跡の位置と環境（第１図）

宮崎平野の南西部には、鰐塚山系から延びる丘陵地帯と浸食の進んだシラス（入戸火砕流）台地が展開している。これらシラス台地の近くには、大淀川をはじめ清武川、加江田川など日向灘へ注ぐ大小河川があり、また、台地縁辺の崖や浸食小谷には所々に湧水点があるなど、台地の上は遺跡の立地上都合がよい。

時屋地区遺跡は、これらシラス台地のうち、清武川に臨む左岸台地上の椎屋形地区と上の原地区に位置する遺跡の総称である。このうち、椎屋形地区の台地は北側が丘陵地帯へと続き、その南東斜面側に椎屋形第１遺跡Ａ地区が、谷を隔てた南側の小舌状台地にＢ地区がそれぞれ立地している。同遺跡の西側には、圃場整備工事中に確認できた縄文時代早期の遺跡が続き、その西端に椎屋形第２遺跡が立地している。また、同第１遺跡の東側、小河川を隔てた上の原地区の台地は、北側に丘陵地帯を負い南東方向へと広がる広大な台地となっており、西端部の上の原遺跡をはじめ上の原第１遺跡（縄文時代・弥生時代・古墳時代の遺物散布地）、同第２遺跡（縄文時代・弥生時代の遺物散布地）、白ケ野遺跡（縄文時代・弥生時代・古墳時代・中世の遺物散布地）など十数カ所の遺跡が点々と存在している。この台地は、台地上にも湧水点が見られ、規模の大きい遺跡も見られる。平成６年度に県教育委員会が発掘調査を実施した上の原第２・第３遺跡は、縄文時代後期の竪穴住居跡群や土坑群、古墳時代前期の竪穴住居跡群、中世～近世の掘立柱建物跡群など多量の遺物とともに多くの遺構が検出されている。

第1図　時屋地区遺跡位置図

1　椎屋形第1遺跡　　2　椎屋形第2遺跡　　3上の原遺跡

第Ⅱ章　椎屋形第１遺跡の調査

第１節　調査区の設定と調査の概要（第２図）

椎屋形第１遺跡は、当初の分布調査の際、北側の畑地で弥生土器が数点表面採集されたほか、南側の谷を隔てた畑地では、焼石が散乱しているのが確認された。その後の試掘調査では、遺構が検出されず、また、ゴボウ栽培のためのトレンチャーという機械による深耕が進んでいたこともあって、遺跡としては残存状況の悪い小規模のものと判断されていた。また、この遺跡の発掘調査は、時屋地区圃場整備事業の初年度でもあり、次期作付けと工事との兼ね合いから調査期間を３カ月間に限定されて発掘調査に着手した。遺跡の所在地は、宮崎市大字細江字椎屋形4938ほかである。

調査は、便宜上、北側の畑地をＡ地区、南側の畑地をＢ地区として、地形に合わせてそれぞれ南北方向を北からＡ～Ｆ、東西方向を西から１～13とグリッド設定した。そして、Ａ地区から開始したが、表土を除去してみると、思いがけず畑地の南側を中心に弥生時代の竪穴住居跡など多数の遺構が検出されたため、これに期間の多くをとられることになってしまった。

Ｂ地区は、調査期間の関係から途中で並行して行うことにした。また、その間、Ａ地区の調査中に北側の農道下で縄文時代草創期の隆帯文土器が出土しているのを発見、弥生時代の竪穴住居跡等から縄文時代早期の遺物も確認されていたが、とりあえずＢ地区の調査を切り上げて残されたわずかな期間を草創期層の調査に費やした。

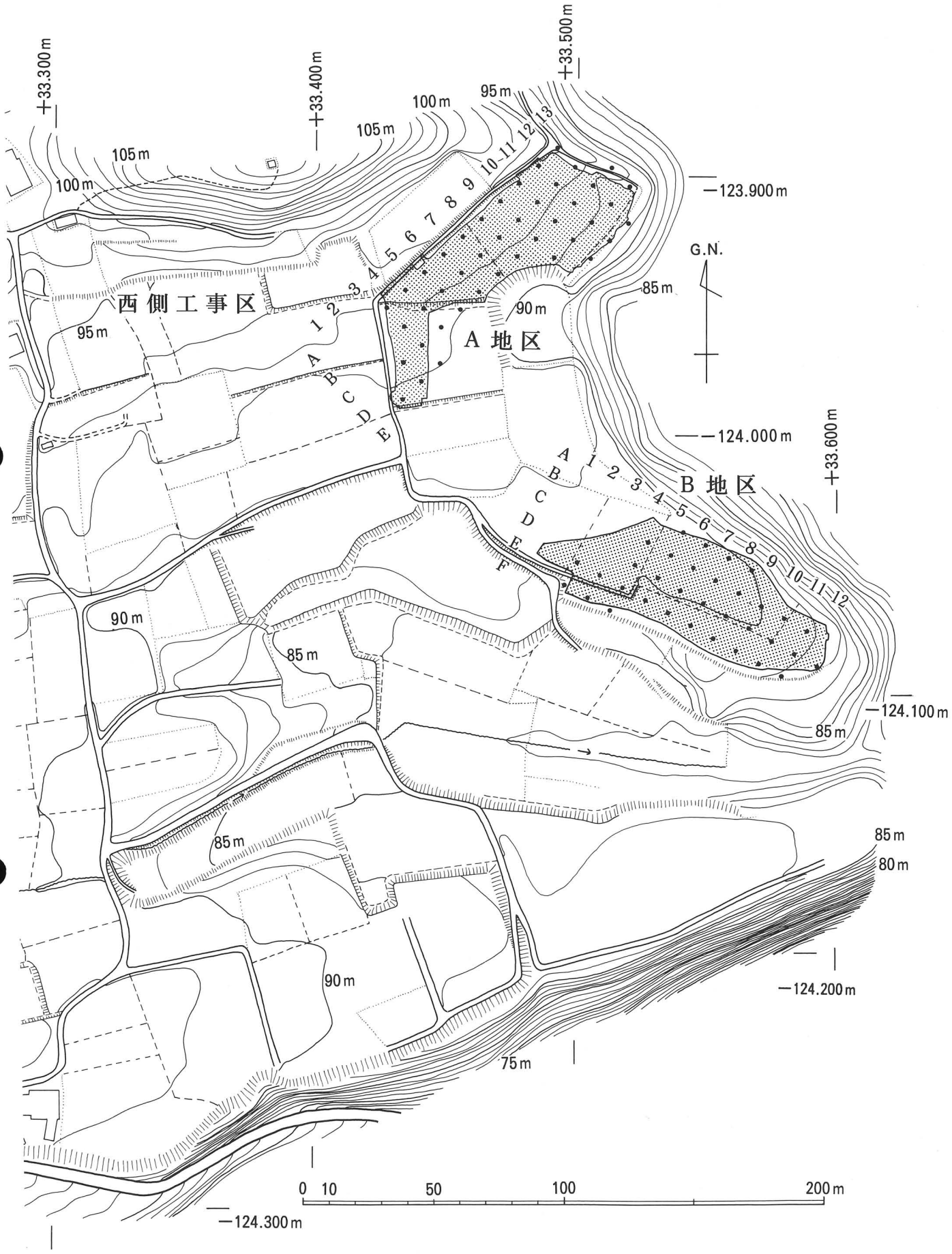
調査の結果、Ａ地区では、縄文時代草創期の隆帯文・爪形文土器、打製石鏃などの遺物と集石遺構２基（未調査）、早期の前平式土器・打製石鏃ほかの遺物と集石遺構１基（未調査）、弥生時代中期末～後期初頭頃の竪穴住居跡19軒・同時期と思われる掘立柱建物跡６棟・周溝状遺構１基・土坑２基が発見された。土坑のうち１基は、大甕片を再利用した箱式石棺状の施設を２段掘りの土坑に納めたもので、墓と考えられるものである。また、Ｂ地区では、かなりトレンチャーによって破壊されていたが、縄文時代早期の集石遺構が17基と該期の遺物が確認された。

第２節　調査の記録

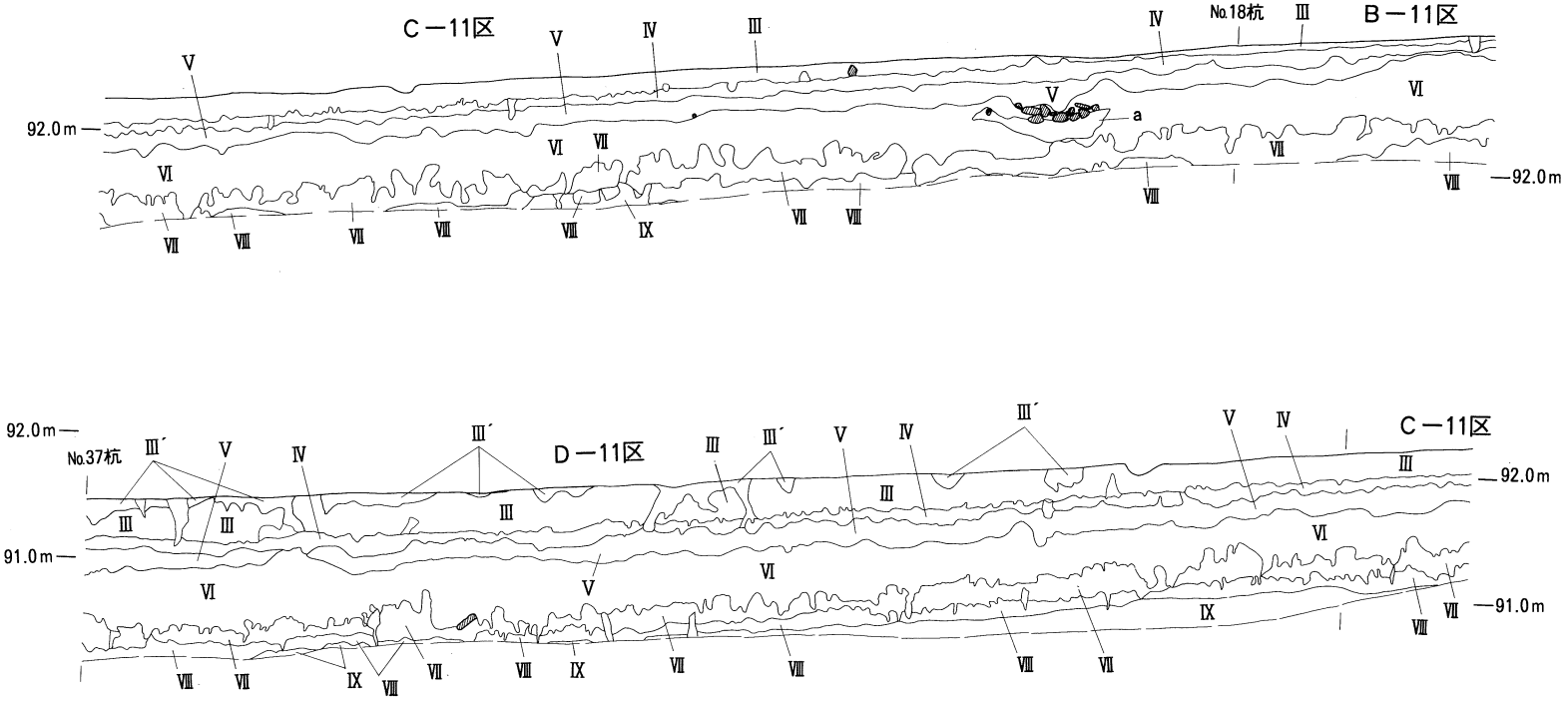
１　層序（第３図）

椎屋形第１遺跡での基本的な層序は、第３図のとおりである。このうち、Ⅳ層が縄文時代早期包含層、Ⅵ層が縄文時代草創期包含層である。また、Ⅴ層のパミス（黄色・橙色軽石）は、後述のテフラ検出分析結果より、霧島火山新燃岳起源の霧島－瀬田尾軽石（約9,000年前）の可能性があるとされ、Ⅷ層・Ⅶ層の黄色パミス（橙色・黄色軽石）は、霧島火山韓国岳起源の霧島－小林軽石（約1.6～1.55万年前より新しく約1.0～1.1万年前の薩摩テフラよりも古い）の可能性が考えられている。

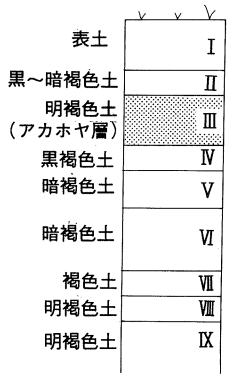
なお、今回、基本層序の再検討を行ったため、後述の分析結果報告と層順に齟齬が生じた。分析結果のⅤ層が今回報告のⅦ層に相当し、Ⅳ層目の草創期層がⅥ層に、Ⅱ層目の瀬田尾軽石を含む層がⅤ層に相当する。



第2図　椎屋形第1遺跡調査区及びグリッド設定図



I　表土
II　黒色シルト質土
III　明褐色砂質土（アカホヤ火山灰層）調査区の北側は耕作により削平、南側は残存状況良好。黒褐色の粒状の土が斑点状に混入している。最下部は１～３㎜大の黄褐色のパミスや砂粒となる。堆積は均一ではなく、比較的でこぼこしているが、面としての広がりはある。
III´　暗褐色砂質土（アカホヤの風化土）アカホヤの粒や黒色の粒状の土が混入する。
IV　黒褐色シルト質土　きめ細かく固く締まっている。暗褐色土やアカホヤ層下部のパミスが混入している。パミスは上部ほど多く見られる。少量の炭化物粒や焼礫等も含まれる。
V　暗褐色砂質土　VI層にIV層の黒褐色土が漸移的に混入する漸移層。パミスや炭化物粒を少量含んでいる。きめ細かい。
VI　暗褐色砂質土　V層よりやや明るい。暗褐色土に褐色土が丸いブロック状にまんべんなく見られる。パミスや炭化物はV層よりずっと少なく、ごく微量。きめ細かい。
VII　褐色砂質土　VI層との境目は凹凸が著しく、IV層より固く締まっている。白色の小砂粒や黄色パミス（霧島小林軽石）をポツポツとまんべんなく含む。炭化物も少量見られる。きめ細かい。
VIII　明褐色砂質土　VII層と一体のものと思われるが、土色は明るい。同じく固く締まり、白色砂粒や黄色パミスをまんべんなく含む。微量の炭化物が見られる。ざらついた感じの砂質土である。
IX　明褐色シルト質土　粘性が強く柔らかい。VIII層と同じ白色砂粒と黄色パミスを含むが、ごく微量である。微量の炭化物も含む。
a　黒褐色砂質土　パミスや炭化物を微量含む。



基本土層柱状図

第３図　椎屋形第１遺跡　基本土層柱状図及びＡ地区土層断面図（No.18～29～37杭）

2　A地区の調査

1　縄文時代の遺構と遺物

A地区では縄文時代草創期と早期の遺物が確認されているが、前述のとおり弥生時代の遺構の調査に時間を取られた結果、草創期包含層については約200㎡のみの調査、早期包含層については殆ど未調査のままとなってしまった。遺憾ではあるが、分かり得た範囲で報告する。

（1）草創期（第4図）

A地区北端の耕作により削平された箇所より隆帯文土器が発見された。そこで、わずか9日間ではあったが、草創期層の調査を実施した。調査は、発見箇所から傾斜に沿って南側を中心に、比較的出土量が少なくなる範囲までの包含層を約200㎡掘り広げるにとどまった。遺物の収集が中心になり、途中検出された集石遺構2基はその位置を記録したのみである（第6図平面図中のアミがけ部分）。ただ、土層断面確認トレンチ内で検出した1基は、第3図中に断面が記してある。下のａ層は集石遺構の土坑部分と見られ、径が1.1m、深さ17cm、集石部分の径は約0.9m、厚さ15cmを測る。土坑埋土中には炭化物が含まれる。

包含層は草創期単純層である。調査範囲の南端で早期の前平式土器の胴部片と思われる条痕文土器が出土したが、これは早期層の残存部分での出土である。遺物は、調査区の中央にやや纏まりがあるものの、ほぼ全面から出土している（第5図）。調査区外にも広がることは間違いない。地形的に傾斜地であるため、遺物も北から南へと傾斜して堆積している。遺物の垂直分布を第5～6・10図に掲載したので参照されたい。

遺物のうち土器は、その多くが無文の胴部片である。有文部分は殆ど口縁部周辺に限られており、わずかに1点底部片に二枚貝の押圧文が見られた（第9図63）。また、口縁部でも無文の土器片も見られた。有文口縁部は、少量の明らかな隆帯をもつ土器と多くの爪形文土器とが見られる。同一個体や無文部分を除く主なものを第7～9図に図示した。特徴等は表1～2を参照されたい。また、そのうちの主な土器の水平・垂直分布を第6図に掲載した。図中の記号の違いは、土器の文様の特徴などで簡単な形態分類を行って表したものである。

▲は、第7図1～4の粘土紐指押さえによる爪先圧痕が見られるいわゆる県南部串間市の西ノ園遺跡で出土したタイプの土器（Ⅰ類）。

△は、5の無文の三角隆帯をつける土器（Ⅱ類）。

□は、8～10の粘土紐を指先で挟みながら押さえつけて三角隆帯をつくる土器（爪先圧痕はわずかに見られるのみ。Ⅳａ類）。

■は11～18（17も同様か）の近接した隆帯上に爪形文（爪先圧痕文）が見られる土器（□と同じく摘まんでいるが、より爪先圧痕が意識的に見られる。Ⅳｂ類）。

●は、19～35の爪先圧痕を文様（爪形文）として施文する土器で、19～24は粘土帯を薄く貼り付けた上に施文したと思われるもの、25～35は粘土のたるみや貼り付けた痕跡と思われる浅い窪み、若干の肥厚などが見られる土器である（Ⅴａ類）。

○は、36～45の器面にそのまま爪形文が施されたと考えられる土器である（Ⅴｂ類）。41は口唇部にわずかに筋状の窪みが見られたが、粘土帯貼り付けかどうか不明であったためここに入れた。

このほか、6～7は隆帯に棒状工具痕が見られるⅢ類、46～47はⅤb類、48～50は口唇部に太めの刻みをもつⅤc類、51～52は無文口縁部のⅥ類とし、底部は、比較的角張った平底の56～57・63をⅦa類、丸っこい平底の58～62をⅦb類と分類する。これらの土器のうちⅣ・Ⅴ類は宮崎市南部の堂地西遺跡B区で類似のものが出土している。

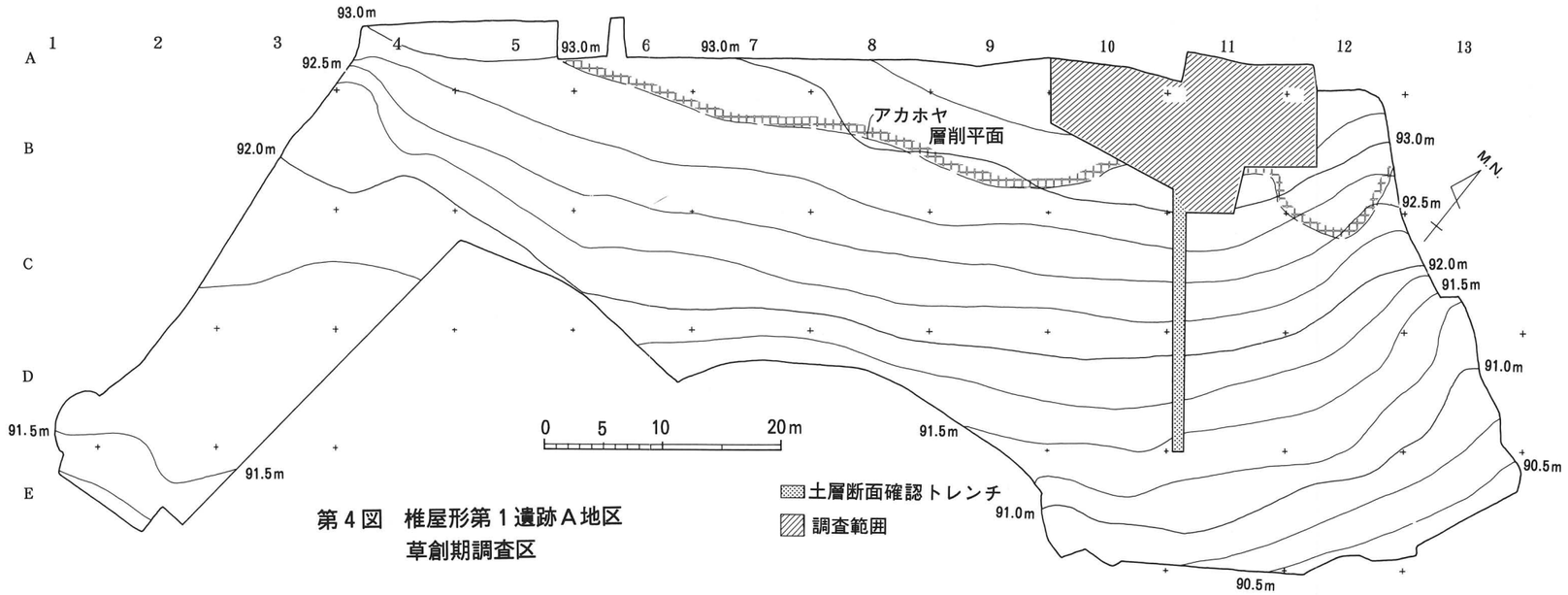
以上、大きく隆帯文と爪形文の土器があるが、垂直分布図からは層位的に分かれるような状況はつかめない。これらの器形はバケツ状の深鉢形と考えられ、底部は早期初頭の前平式系土器の角張ったはっきりした平底と違いやや丸みのある平底となる。また、34・54～55のように焼成後の穿孔が見られる土器片もあるが、前平式系土器などに見られるという楕円形の穿孔とは異なる円い穿孔である。

石器では、用途不明のシラス起源の溶結凝灰岩や焼石、黒曜石のチップが多く見られた中、表3に示すような石器が出土した。磨石状の表面が磨れた石器は見られるが、明らかに石皿と呼べるものは出土していない。また、打製石鏃の数の多さが注目される。流通品としての黒曜石では、比較的気泡の多いものが多く見られ、早期以降よく出土する大分姫島産の白っぽい黒曜石は1点も出土していない。このほか、早期以降、通常は、丸いツルツルの磨石として流通する県北産の尾鈴山酸性岩類は、ここでは打ち欠いたスクレイパー状の製品として出土した。このほかの石材は、周辺でも手に入りやすい砂岩等が多い。このうち、主なものを図化した（第11～12図）。また、その水平分布と垂直分布を図示する（第10図）。土器同様に北から南へと傾斜した堆積状況を表している。図中、打製石鏃は■で示した。

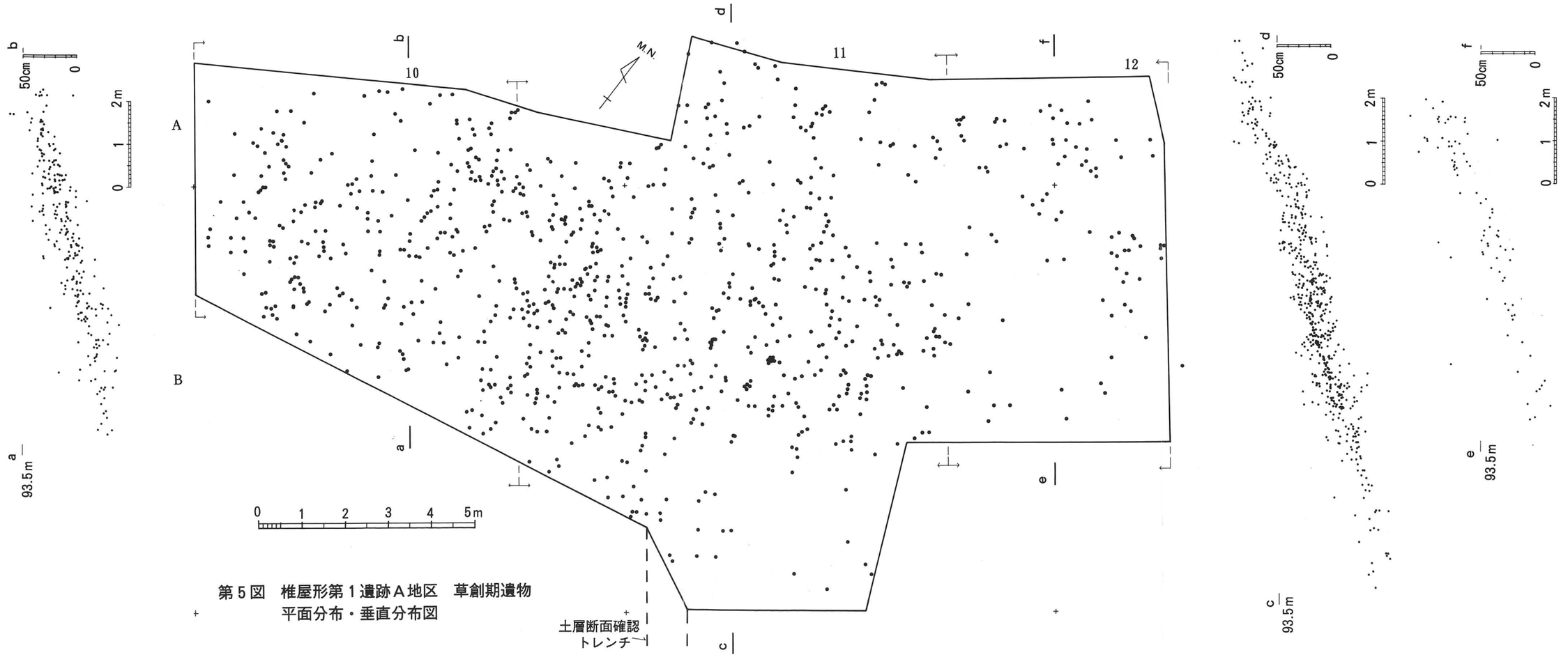
（2）早期

A地区では、草創期の調査区の南端上層と弥生時代の遺構埋土から早期の遺物が出土している。早期の遺構は、前述のとおり集石遺構が1基、草創期調査区の北西端部上層から検出されている。しかし、調査期間の関係で範囲を記録するにとどめたのみである。このように早期包含層については未調査であるが、このA地区の西側で圃場整備の工事が進行する中、掘削された法面及びその下で早期の土器片を採集した（第2図参照）。A地区に隣接する地区でもあり、A地区出土の土器と併せて図化し説明する。

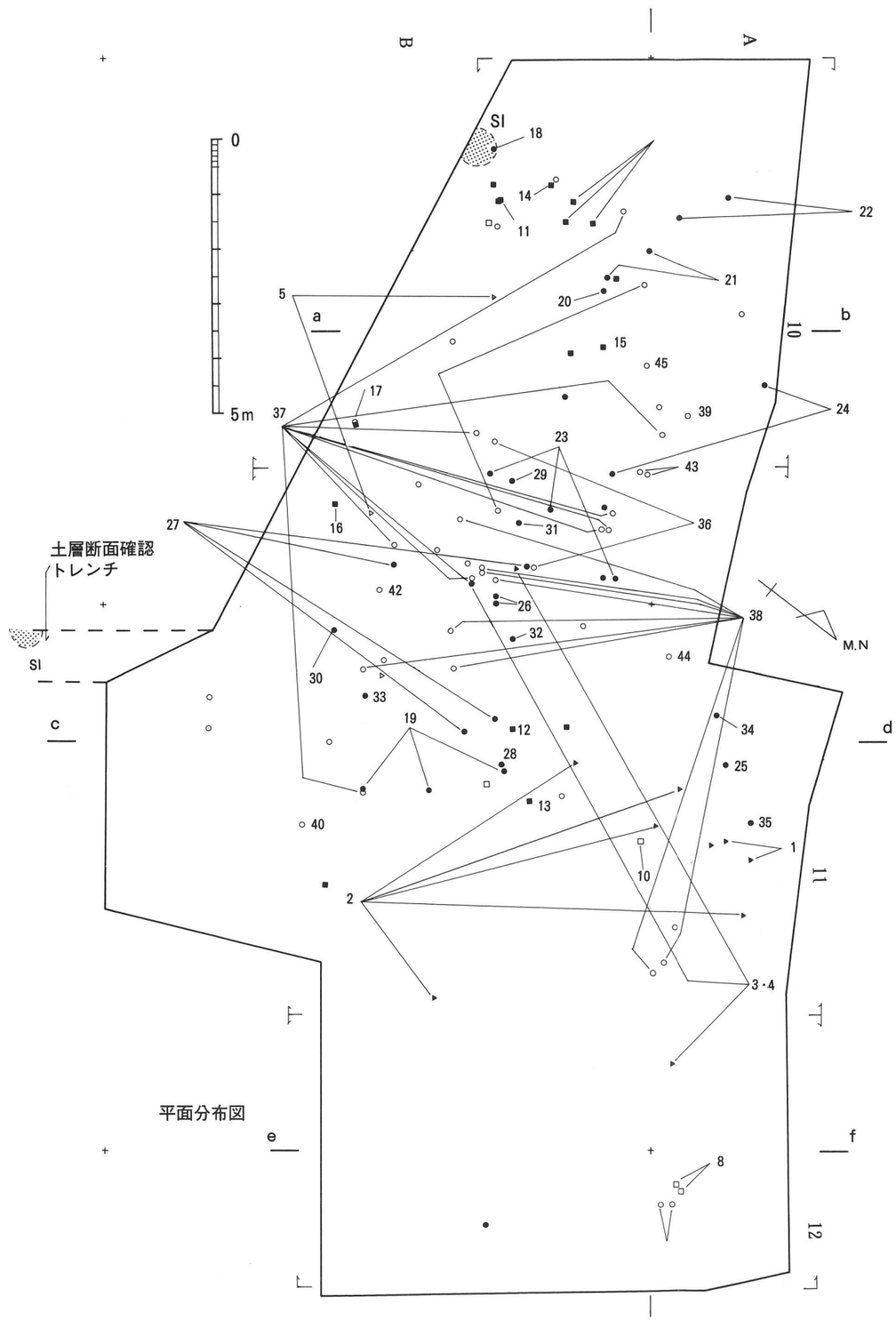
第13図1～4は、斜方向の粗い貝殻条痕文が施された前平式土器の胴部片で、草創期の調査区から出土した土器である。内面調整は、2がナデ、ほかは縦方向のヘラミガキである。2は、上部に焼成後穿孔が見られ、外面浅黄橙色、内面にぶい黄橙色を呈する。1は内外面淡黄色、3～4は外面淡黄色、内面は灰色または灰白色を呈する。5～6は、弥生時代の遺構埋土中より出土したもので、5は塞ノ神式土器の口縁部、6は平栫式土器の胴部片と考えられる。5は、口唇部に浅い押圧刻み、外面に3条の沈線文を施す。内外面ともナデ調整で、にぶい黄橙色を呈する。SA7出土。6の外面は上に刺突列点文、その下は結節縄文が見られる。内面縦ナデ、内外面とも橙色を呈する。7～16は、西側の工事区で採集したもので、16を除きいずれも外面に粗い貝殻条痕文を施した前平式土器と考えられる土器片である。口縁端部の文様は、いずれも貝殻腹縁によると思われる押引文（8）、短い条痕文（7・11・12）、連続刺突文（9・10）である。ただ、7はクシ状の施文具と言った方がふさわしいかもしれない。口唇部の調整は、11がヘラミガキ、そのほかはナデもしくは丁寧なナデである。内面調整は、7・9・11～13・15がヘラミガキ、8・10・14が丁寧なナデである。丁寧なナデの中には、ヘラミガキの単位が分からず、摩耗して光沢も失われたものを含んでいる可能性がある。色調は、それぞれ7が内外面ともにぶい黄橙、8は外面にぶい橙、内面にぶい黄橙、9は内外面とも橙、10は外面灰黄褐色、内面にぶい黄橙、11は外

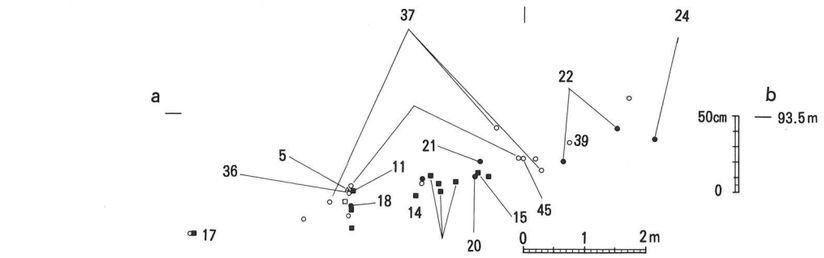


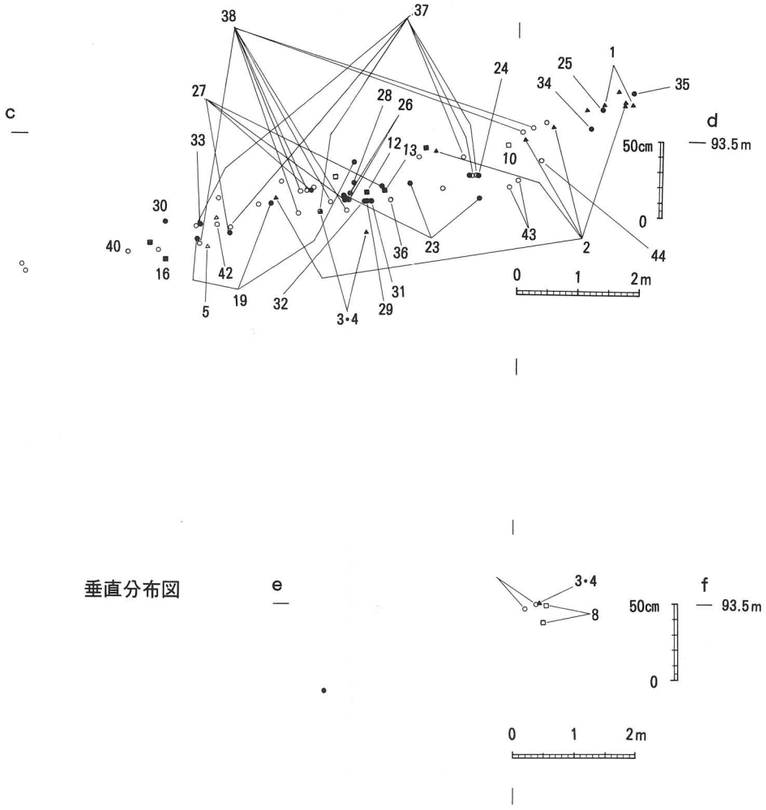
第4図　椎屋形第1遺跡A地区
草創期調査区



第5図　椎屋形第1遺跡A地区　草創期遺物
平面分布・垂直分布図

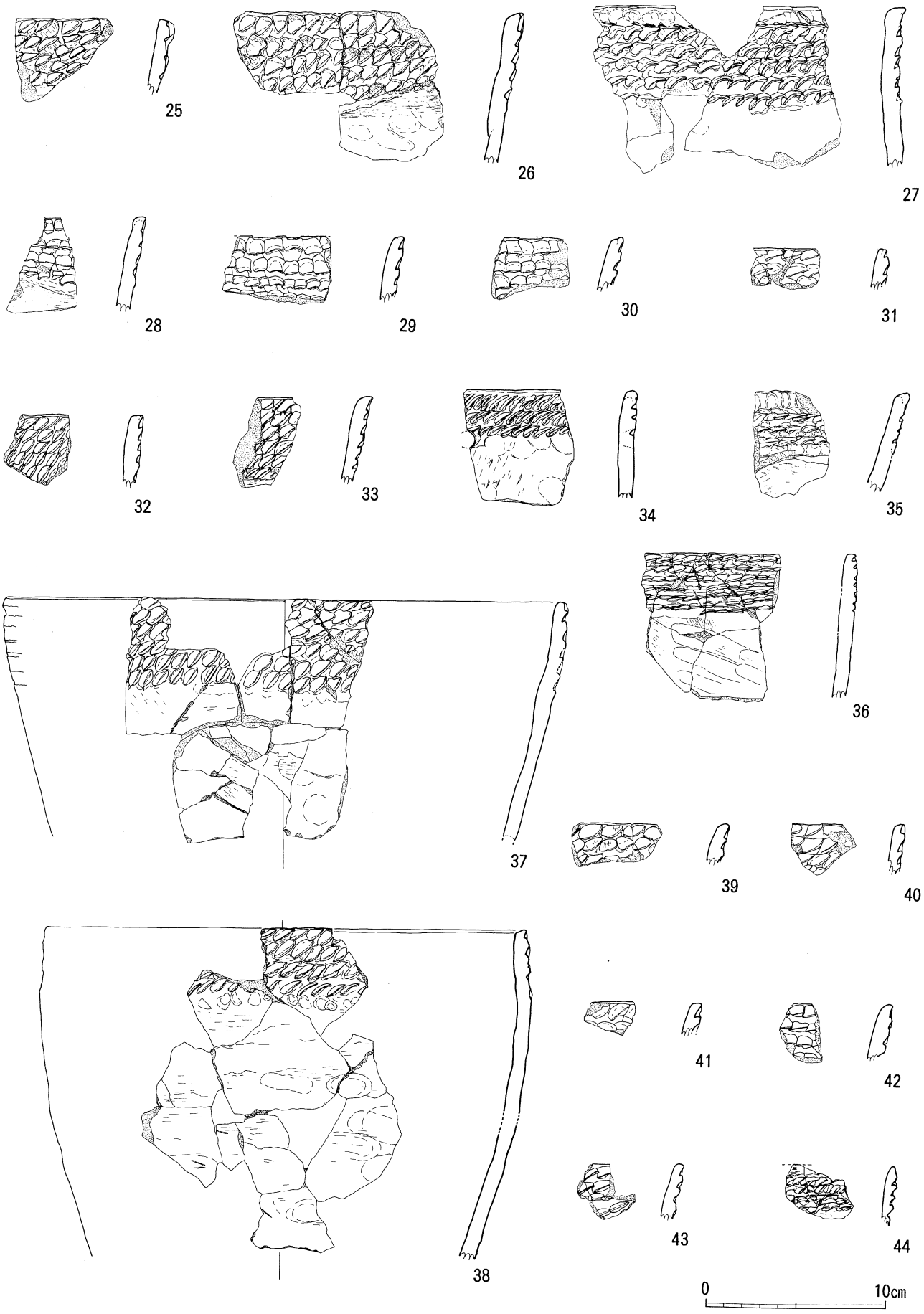




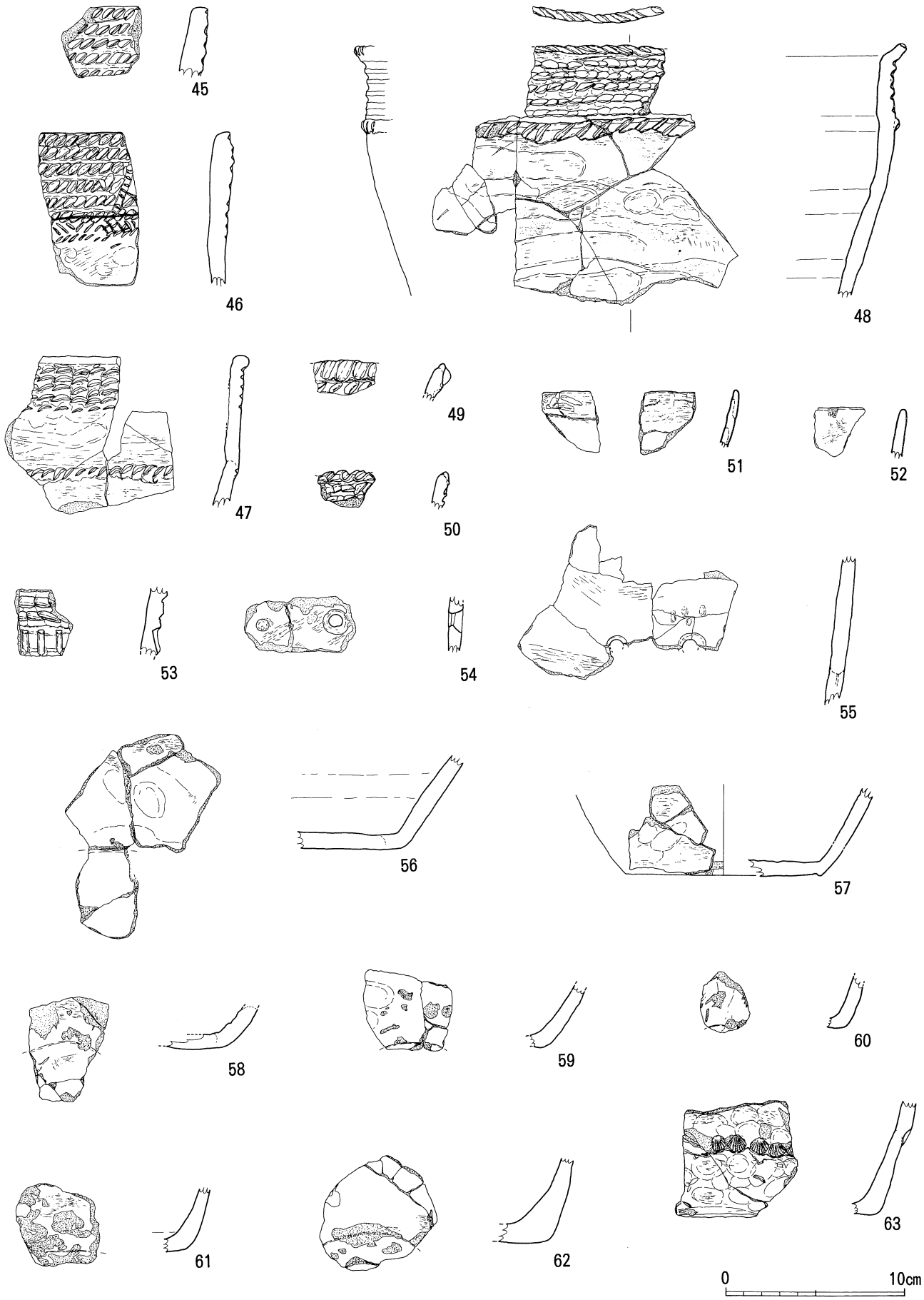


第６図　椎屋形第１遺跡Ａ地区　主要草創期土器平面・垂直分布図　（番号は、第７～９図中の遺物番号）

第７図　椎屋形第１遺跡Ａ地区　草創期土器実測図（１）



第８図　椎屋形第１遺跡Ａ地区　草創期土器実測図（２）



第９図　椎屋形第１遺跡Ａ地区　草創期土器実測図（３）

表１　椎屋形第１遺跡Ａ地区　縄文時代草創期土器観察表（１）

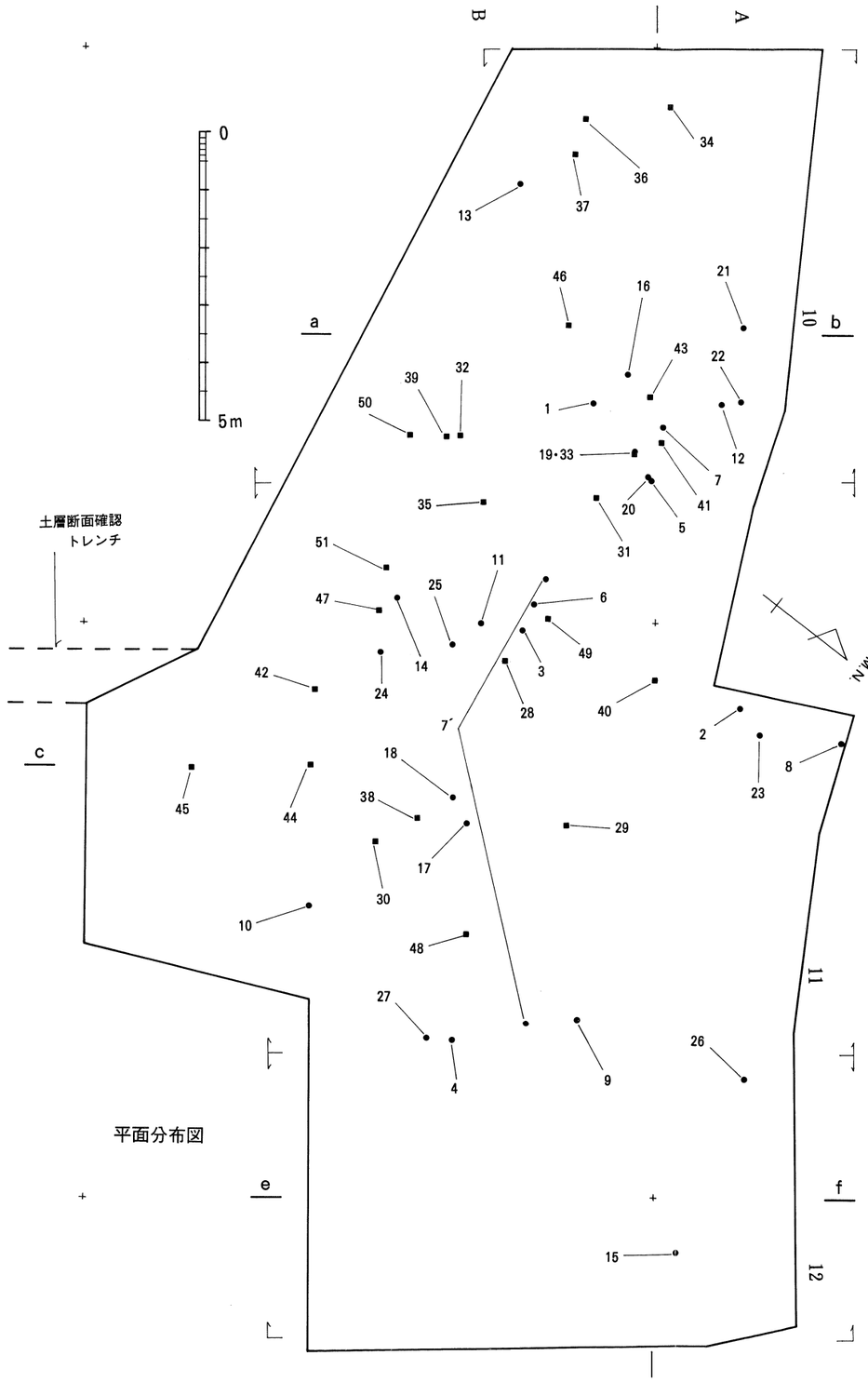
図番号	文　　様	調　　整	色　調		胎土の特徴	備　　考
			外器面	内器面		
1	口縁端部の肥厚帯に棒状工具による押圧刻み。その下に薄く粘土帯を貼付け押さえている。押さえた間の高い部分に爪先状の圧痕文が見られる。	外器面は斜方向の粗いナデ（擦痕や指頭痕状の浅い窪みが見られる）内器面は横ナデ。	橙	にぶい黄橙	1㎜以下の褐色・白色・黒色の鉱物粒を含む。	外器面に薄くススが付着。内面下部には炭化物付着。
2	口縁部に薄く粘土帯を貼付しその上に指頭によると思われる連続押圧。粘土帯上には爪先状の圧痕胴部には爪先の圧痕状の浅い窪みが見られる。	外器面は横又は斜め内面は横方向のナデ。内面口縁部付近に指頭痕状の窪みが見られる。	橙	にぶい黄橙	1㎜以下の淡黄色及び白色不透明な鉱物粒を含む。	最下部は粘土帯の接合部で剥離している。
3	口縁端部とその下に薄く粘土帯を貼付し端部は棒状工具により押圧刻み。下部は指頭によると思われる押圧で爪先状の圧痕が見られる。	外器面はナデ、内器面は横ナデ。	褐	にぶい黄褐	1㎜以下の淡黄色や白色及び半透明な鉱物粒を含む。	
4	口縁端部とその下に薄く粘土帯を貼付し端部は棒状工具により押圧刻み。下部は指先によると思われる上～下方向への押圧で爪先状の圧痕が残る。	外器面は粗いナデ、内器面は横又は斜めのナデで指頭痕と思われる浅い窪みが見られる。	褐	にぶい黄褐	1㎜以下の淡黄色及び白色半透明や不透明な鉱物粒を含む。	3と同一個体か。
5	口縁部に３条の貼付突帯文	内外面とも横ナデ。	橙	にぶい黄橙	1㎜以下の白色や赤褐色、黒色及び透明や半透明の鉱物粒を含む。	
6	口縁部直下に貼付突帯文。その上部側に断面円形の棒状工具による刺突文。	内外面とも横ナデ。	にぶい橙	にぶい黄橙	1㎜以下の淡黄色、白色及び透明な鉱物粒を含む。	
7	口唇部に棒状工具による斜めの押圧刻み。口縁直下に貼付突帯を施し斜方向の爪先状圧痕とそれに交差する棒状工具による押圧刻み。	内外面とも横ナデ。	橙	にぶい橙	1㎜以下の白色、黒色、灰色半透明及び透明な鉱物粒を含む。	外器面に薄くスス付着。
8	口縁部に摘まみながら押さえたと思われる１条の隆帯文。隆帯下部には指頭状の圧痕、上部には爪先状の浅い圧痕文が見られる。	内外面とも横ナデ。内器面には指頭圧痕状の浅い窪みが多く見られる。	にぶい黄橙	にぶい黄橙	1㎜以下の白色、黒色の岩片や透明な鉱物粒及び軽石等を含む。	外器面口縁部にスス付着。
9	口縁部に指頭により摘まんで押さえたと考えられる断面三角形の隆帯文。口縁端部の肥厚部分の下と隆帯上に指頭圧痕と思われる浅い窪みが残る。	内外面とも横ナデ。	浅黄橙	浅黄橙	1㎜以下の白色、黒色、透明な鉱物粒を含む。	外器面に少しスス付着。接合面で剥離。
10	口縁部直下の２条の隆帯の両側を指頭により右から左方向へと摘まみながらの押さえ。口縁端部肥厚部の下に爪先状の圧痕がわずかに見られる。	内外面とも横ナデ。	にぶい黄橙	にぶい黄橙	1㎜以下の白色、黒色、透明な鉱物粒を含む。	口縁端部にヘラ状工具による刻みが１カ所。
11	口縁端部に間隔の広い押圧刻み（ヘラ状工具）。その下の２条の貼付け隆帯は親指と人差し指で摘まんだと思われ、爪先状の圧痕が見られる。	内外面とも横ナデ。	にぶい橙	にぶい褐	1㎜以下の白色、黒色、透明な鉱物粒を含む。	
12	２条の貼付隆帯の両側に指先で摘まんだような爪先状の圧痕文。	内外面とも横ナデ。内器面には指頭圧痕状の浅い窪みが見られる。	橙	にぶい褐	1㎜以下の白色、黒色、透明な鉱物粒を含む。	外器面に少量のスス付着。
13	貼付隆帯の両側に爪先による羽状の圧痕文。指先で摘まんだものと考えられる。	内外面とも横ナデ。	にぶい黄褐	にぶい褐	1㎜以下の白色、黒色、透明な鉱物粒を含む。	
14	口縁端部直下に縦方向の連続爪先圧痕文。その下に２条の貼付隆帯文。隆帯上は両側に爪先による羽状の圧痕文。指先での摘まみと考えられる。	内外面とも横ナデ。ともに指頭圧痕状の浅い窪みが多く見られる。	黒褐	暗灰黄	1㎜以下の白色、半透明の鉱物粒を含む。	
15	口唇部に浅い押圧刻み（爪先か）。その下に２条の接した隆帯文。隆帯上は両側を指先により摘まみ、上側は爪先圧痕が顕著である。	内外面とも横ナデ。外器面には指頭圧痕と思われる浅い窪みが見られる。	黄橙	橙	1㎜以下の（乳）白・黒色、透明な鉱物粒、３㎜の赤褐色岩片を含む。	
16	口唇部は棒状の工具による押圧刻み。下には断面三角形の３条の隆帯を貼付け上側にのみ爪先の圧痕文。圧痕は２条の隆帯に跨って見られる。	内外面とも横ナデ。	にぶい褐	にぶい褐	1㎜以下の白色、黒色、透明な鉱物粒及び軽石等を含む。	外器面にスス付着。最下部の隆帯は圧痕が羽状。
17	口唇部付近に摘まみによると思われるごく浅い羽状の圧痕文。その下に隆帯文が剥離した痕跡が見られる。	内外面とも横ナデ。	橙	橙	1㎜以下の白色、黒色、透明な鉱物粒を含む。	口縁端部付近に薄くスス付着。
18	近接し重なるように貼付された３条の粘土帯に爪先による羽状の圧痕文。破片の口唇部両側に押圧刻みの一部と見られる箇所がある。	内外面とも横ナデ。	橙	橙	1㎜以下の白・黒色、透明な鉱物粒、４～２㎜大の褐色岩片を含む。	
19	粘土帯貼付けによると思われる肥厚部に左上から施文した３列の爪形文。	内外面とも横ナデ。内器面に指頭痕状の、外器面には指ナデ状の浅い窪みが見られる。	にぶい黄橙	にぶい黄橙	1㎜以下の白色、黒色、透明な鉱物粒を含む。	外器面にスス付着。
20	口縁部に薄く粘土帯を貼付けその上に左上から施文した２列の爪形文。	内外面とも横ナデ。	にぶい褐	明褐	1㎜以下の白色、黒色、透明な鉱物粒を含む。	外器面にスス付着。
21	貼付けと考えられる低い粘土帯に左上方から施文した爪形文が２列。粘土帯の下は強い１条の横ナデで凹線文状になる。	内外面とも横ナデ。内器面には指頭痕状の浅い窪みが見られる。	にぶい橙	橙	1㎜以下の白・黒色、透明な鉱物粒、３～５㎜の赤褐色岩片を含む。	外器面にスス付着。
22	口唇部に爪先を押引きした様な浅い押圧刻み。口縁部は薄く粘土帯を貼付け文様帯を作り、その上に左上からの３列の爪形文。	内外面とも横ナデで指頭圧痕状の浅い窪みが見られる。口縁端部は指押さえ状の圧痕。	にぶい黄	にぶい黄褐	1㎜以下の透明、白色、黒色の鉱物粒を含む。	下端部は粘土紐の接合痕が見られる。
23	口縁端部に突起。文様帯は薄く粘土を貼付けていると思われ、その上に５列の左上からの爪形文。５列目は途中で文様が途切れ浅い爪先圧痕のみ。	内外面とも横ナデ。内器面には指頭痕状の浅い窪みが見られる。	淡黄	淡黄	1㎜以下の白・黒色、半透明の鉱物粒、茶褐・黒色の岩片を含む。	
24	粘土帯貼付け（口唇部は貼付けが顕著）の文様帯に左上から４列の爪形文。	内外面とも斜め又は横方向のナデ。	明褐	橙	1㎜以下の白・黒色、半透明の鉱物粒、茶褐色の岩片や軽石を含む。	外器面にスス付着。
25	薄く粘土を貼付けたと考えられる文様帯に左上方からの４列の爪形文。文様の起点と終点にあたり、下２列は文様の位置が合わない。	内外面とも横ナデ。内器面には指頭痕状の浅い窪みが見られる。	灰黄褐	浅黄橙	1㎜以下の透明、白色、黒色の鉱物粒を含む。	
26	薄く粘土を貼付けたと思われる文様帯に左上方から施文した５列の爪形文。左側に施文の起点と終点と思われる部分が見られ、文様が若干乱れている。	内外面とも横ナデ。内器面上部には指頭圧痕状の浅い窪みが多数見られる。	にぶい黄橙	明黄褐	1㎜以下の透明、白色、黒色の鉱物粒や白色の岩片等を含む。	
27	粘土帯貼付けの有無は不明。文様帯上端に爪先の圧痕が見られる。爪形文は５列。左上方からの施文と思われる。	内外面とも横ナデ。内器面上半には指頭圧痕状の浅い窪みが多数見られる。	橙	明赤褐	微細な透明、白・黒色の多量の鉱物粒、少量の灰・赤褐色岩片含む。	
28	上方から施文したと考えられる４列の爪形文。文様帯の下に粘土の肥厚した部分が見られ、粘土帯を貼付けて施文した可能性がある。	内外面とも横ナデ。内器面には指頭圧痕と思われる浅い窪みが見られる。	にぶい橙	浅黄	1㎜以下の白色、透明、黒色の鉱物粒を含む。	
29	上方やや左よりから施文したと考えられる４列の爪形文。口唇部に粘土帯を貼付けた様な筋状の窪みが見られる。	内外面とも横ナデ。内器面には指頭圧痕と思われる浅い窪みが見られる。	にぶい褐	にぶい橙	1㎜以下の透明、白色、黒色の鉱物粒及び微量の軽石を含む。	
30	上方やや左よりから施文したと考えられる４列の爪形文。口唇部に粘土帯を貼付けた様な筋状の窪みが見られる。	外面ナデ。内面は横ナデ。	にぶい橙	にぶい橙	1㎜以下の透明、白色、黒色の鉱物粒及び微量の茶褐色岩片を含む。	外器面の一部にスス付着。29と同一個体の可能性。
31	左上方から施文した３列の爪形文。口唇部に粘土帯貼付け痕と思われる筋状の窪みが見られる。	外面ナデ。内面横ナデ。	にぶい褐	にぶい褐	1㎜以下の透明、白色、黒色の鉱物粒を含む。	口唇部付近にスス付着。
32	左上方から施文した６列の爪形文。口唇部に粘土帯貼付けと思われる筋状の窪みが見られる。	外面ナデ。内面横ナデ。	にぶい赤褐	にぶい橙	1㎜以下の透明、白色、黒色の鉱物粒を含む。	外器面一面にスス付着。

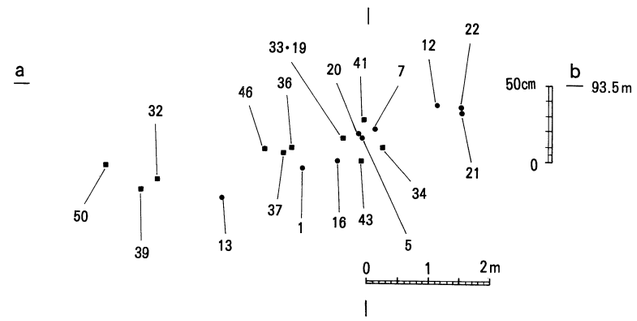
表２　椎屋形第１遺跡Ａ地区　縄文時代草創期土器観察表（２）

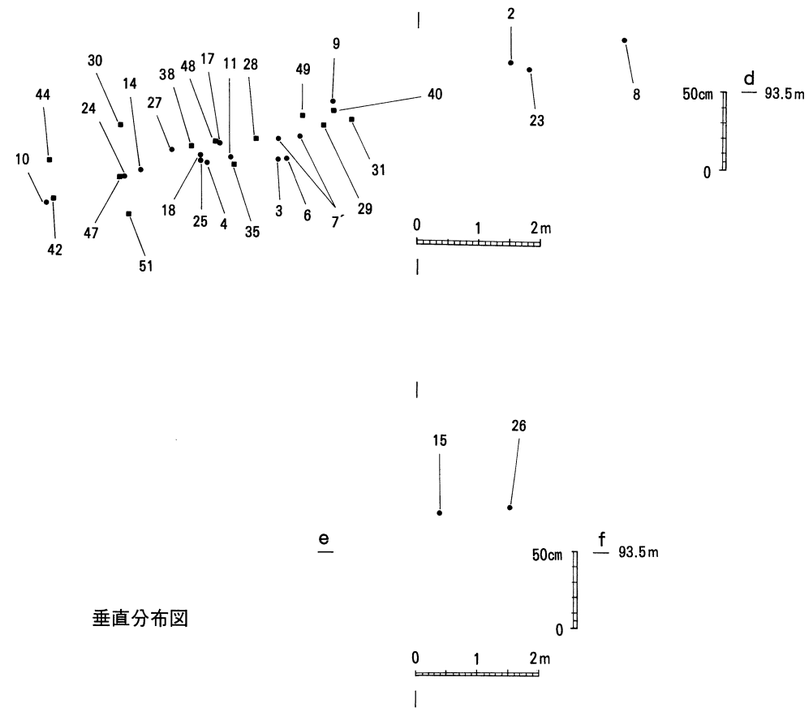
図番号	文様	調整	色調		胎土の特徴	備考
			外器面	内器面		
33	左上方から施文した６列の爪形文。	外器面文様帯の下は横ナデ。内器面は横ナデ。	にぶい橙	にぶい橙	１㎜以下の透明、白・黒・灰色の鉱物粒を含む。	
34	口縁肥厚部に２列、その下の肥厚しない器面にも１列、計３列の左上方からの爪形文。下から上へ施文。爪先状の浅い圧痕が器壁に多数見られる。	内外面とも横又は斜方向のナデ。ともに指頭圧痕状の浅い窪みが残る。	にぶい黄	浅黄	２㎜大の砂粒、微細な白・黒色、透明な鉱物粒等を含む。	外器面にスス付着。補修孔と思われる穿孔がある。
35	薄く粘土帯を貼付けた上に口縁端部は浅い連続押圧文、その下に上方左からの３列の爪形文。	内外面とも横ナデ。	にぶい黄橙	にぶい黄橙	１㎜以下の透明、白色、黒色の鉱物粒を含む。	外器面下端部に微量のスス付着。
36	右から左方向へ施文した７列の爪形文。最下部は途中で止まる。施文は最上段では左上方から、最下段ではほぼ真上からで横１列に線状になる。	外面は横又は斜方向の、内面上部は横方向のナデ。下部は横ケズリ。指ナデ・指頭痕あり。	にぶい黄橙	にぶい黄褐	微細な透明、黒色、乳白色の鉱物粒や赤褐色の岩片様の物を含む。	外器面上部にスス付着。
37	右から左、上から下へと施文された左上方からの６列の爪形文。	内外面とも横ナデ。内面には指頭痕と思われる浅い窪みが多数見られる。	にぶい黄橙	にぶい橙	微細な乳白色、白・黒・灰色及び透明な鉱物粒を含む。	外器面上部の一部にスス付着。
38	左から右、上から下へと施文したと考えられる左上方からの４列の爪形文。	内外面とも横ナデ。やや粗い。内面には指頭痕と思われる浅い窪みが見られる。	橙～灰褐	にぶい橙	微細な透明、乳白色、白・黒色の鉱物粒や軽石、茶褐色の物を含む。	外器面にスス付着。胎土に高師小僧が多く見られる。
39	左上方から施文された３列の爪形文。	外面は不明。内面は横ナデ。	黄灰	黄褐	１㎜以下の微細な透明、白色の鉱物粒及び軽石粒を含む。	爪形文の中にスス付着。
40	左上方から施文された４列の爪形文。	外面は不明。内面は横ナデ。	にぶい橙	にぶい橙	１㎜以下の微細な白色、透明な鉱物粒等を含む。	爪形文の中にスス付着。
41	左から右へと、左上方から施文したと考えられる２列の爪形文。口唇部に粘土帯を貼付けたような筋状の窪みがわずかに見られる。	外面は不明。内面は横ナデ。	橙	橙	１㎜以下の透明、白色、黒色の鉱物粒等を含む。	爪形文の中にスス付着。
42	上方やや左からの４列の爪形文。	内外面とも横ナデ。	橙	明黄褐	１㎜以下の透明、白色、黒色の鉱物粒を多く含む。	
43	左から右へと、左上方から施文したと考えられる４列の爪形文。	内外面とも横ナデ。	橙	にぶい橙	微細な乳白色、白・黒・灰色、透明な鉱物粒を含む。	爪形文の中にわずかにスス付着。
44	左から右、上から下へと施文したと考えられる左上方からの４列の爪形文。	内外面とも横ナデ。	浅黄	浅黄	微細な白色、灰色、透明な鉱物粒を少量含む。	爪形文の下にごくわずかにスス付着。
45	左上から施文した５列の爪形文。	内外面とも横ナデ。内面には指頭圧痕と思われる浅い窪みが見られる。	浅黄	淡黄	１㎜以下の透明、白・灰・黒色の鉱物粒及びわずかに軽石粒を含む。	
46	左上から施文した６列の爪形文。その上にやや斜めの浅い凹線があり先の鋭い工具で６個の刺突文。爪形文の下には爪先による羽状文、格子状文。	内外面とも横ナデ。内面には指頭圧痕と思われる浅い窪みが見られる。	浅黄橙	にぶい黄橙	１㎜以下の透明、白・灰・黒色の鉱物粒及びわずかに軽石粒を含む。	45と同一個体と思われる。
47	口縁部直下に左上からの５列の爪形文。左から右へ、上から下へと施文。粘土の接合部と思われる屈曲部に同じく左上から施文した１列の爪形文。	内外面とも横ナデ。ともに指頭圧痕又は指ナデ状の浅い窪みが見られる。	にぶい黄橙	にぶい黄橙	１㎜以下の透明、白色、黒色の鉱物粒及びわずかに灰色岩片を含む。	外面に微量のスス付着。
48	口唇部にヘラ状具で斜めの連続押圧刻み。その下に右から左へ左上から施文した５列の爪形文。その下は１条の隆帯文にヘラ状具で斜めの連続刻み。	内外面とも横ナデ。内面に指頭痕状の窪み、接合部と思われる所には凹面が１条巡る。	浅黄橙	にぶい黄橙	１㎜以下の透明、白色、黒色の鉱物粒を含む。	外面に微量のスス付着。
49	口縁端部に粘土紐を貼付け棒状工具により連続押圧刻み。その下に左上から施文した爪形文。	外面は不明。内面は横ナデ。	にぶい黄橙	にぶい黄橙	１㎜以下の透明、白色、灰色の鉱物粒を含む。	外面にスス付着。
50	口縁端部に粘土紐を貼付けヘラ状工具により斜めの連続押圧刻み。その下に左から右へ左上から施文の２列の爪形文。	外面は不明。内面は横ナデ。	にぶい黄橙	にぶい黄橙	１㎜以下の透明、乳白色、黒色の鉱物粒を含む。	爪形文の中に微量のスス付着。
51	粘土帯の接合痕が見られる無文土器。	内外面とも横又は斜めのナデ。	灰黄褐	暗褐	１㎜以下の透明、白色、黒色の鉱物粒を含む。	外器面にスス付着。
52	無文土器と考えられるが、口縁端部にごくわずかな高さの小さな粘土の塊（図化できない程の）が見られる。意識的に貼付けたものかどうか不明。	内外面とも（横）ナデ。	橙	にぶい橙	１㎜以下の透明、白色、微細な黒色の鉱物粒等を含む。	
53	（上下不明。他の施文状況を参考にすると）右から左へ、右上方から施文した２列の爪形文。その下の三角隆帯上をヘラ状工具で下方から連続刺突。	内外面とも横ナデ。内面に指頭圧痕状の浅い窪みが見られる。	灰黄褐	にぶい黄橙	１㎜以下の透明、白色、微細な黒色の鉱物粒等を含む。	
54	（胴部、無文）	内外面とも横ナデ。	橙	淡黄	１㎜以下の透明、黒色、白色の鉱物粒等を含む。	補修孔と考えられる円形の穿孔及び未貫通の孔。
55	（胴部、無文）	外面ナデ、内面横ナデ。	灰黄褐	にぶい橙	１㎜以下の透明、白・黒色の鉱物粒及び赤褐色の粘土粒状の物を含む。	補修孔と考えられる２個の穿孔。外面スス付着。
56	（平底底部、無文）	内外面とも横ナデ又はナデ。ともに指頭圧痕状のわずかな浅い窪みが見られる。	淡黄橙	淡黄	微細な乳白色、黒色、透明の鉱物粒及び赤褐色の粘土粒状の物を含む。	外器面に微量のスス付着。内器面にも微量の炭化物。
57	（平底底部、無文）	内外面ともナデもしくは横ナデ。	橙	にぶい黄橙	１㎜以下の透明、白色、微細な黒色の鉱物粒等を含む。	底部外面にごく微量のスス付着。
58	（丸っこい平底底部、無文）	内外面ともナデもしくは横ナデ。内面は剥離が著しい。	淡黄橙	にぶい橙	微細な白色、黒色、透明の鉱物粒を含む。	底部片上部は粘土の接合面で剥離している。
59	（丸っこい平底底部、無文）	内外面ともナデもしくは横ナデ。内面に指ナデ状の浅い窪みが見られる。	にぶい黄橙	灰黄褐	微細な白色、黒色、透明の鉱物粒及び灰色岩片等を含む。	
60	（丸っこく小さな平底底部、無文）	内外面とも縦ナデ。	淡黄橙	にぶい黄橙	ほかの土器と異なり殆ど鉱物粒が含まれない。	ミニチュア的なもの、もしくは底部以外のものか。
61	（丸っこい平底底部、無文）	内外面とも横ナデ。内面には指頭圧痕状の浅い窪みが見られる。	にぶい橙	にぶい橙	１㎜以下の乳白色、黒色、透明な鉱物粒を含む。	
62	（丸っこい平底底部、無文）	内外面ともナデもしくは横ナデ。外面は摩耗著しい。	にぶい橙	橙	微細な透明、白色、黒色の鉱物粒を含む。	外器面の一部にごく微量のスス付着。
63	（平底底部）外器面の粘土の接合部付近に二枚貝の殻頂部の連続押圧が見られる。また、その下に１カ所爪先の圧痕が見られる。	内外面とも横ナデ。指頭圧痕と考えられる浅い窪みが多く見られる。	にぶい橙	明赤褐	微細な透明、白色、赤褐色の鉱物粒を含む。	内外面に微量のススや炭化物付着。固く焼き締まる。

表３　椎屋形第１遺跡Ａ地区　縄文時代草創期石器計測表

番号	種　別	出土地点（区）	器長（cm）	器幅（cm）	器厚（cm）	重量（g）	石　材	備　考	取上番号
1	台石	B−10	22.1	16.3	6.0	2995.0	砂岩	両平面に敲打痕、側端欠損	J−809
2	台石	A−11	18.6	12.0	8.0	2080.0	砂岩	両平面に敲打痕、先端打欠？、一部欠損、焼石か	J−474
3	敲石・磨石	B−11	12.9	9.3	5.6	892.8	砂岩	両平面及び側面の一部に敲打痕、両平面ともに磨面、ヒビ割顕著	J−882
4	敲石・（磨石）	B−11	10.4	7.8	6.4	740.1	砂岩（中粒）	片面の一部に敲打痕、表面の所々に磨面？	J−308
5	敲石	B−10	8.8	3.0	2.3	82.5	砂岩	両側面及び両先端に潰痕	J−667
6	磨製片刃石斧	B−10	11.5	3.8	2.4	157.8	頁岩	基部と片側面に潰痕が残る、片平面は剥離著しい	J−887
7	磨製石斧（基部）	A−10	10.1	6.4	2.9	253.7	頁岩（珪質）	7’と同一個体か、刃部欠損、全面磨痕	J−612
7’	磨製石斧（刃部）	B−10・11	3.8	5.5	1.7	20.7	頁岩（珪質）	2破片接合刃部片	J−683 297
8	局部磨製石斧	A−11	13.9	4.5	2.7	216.6	砂岩（極細粒）	刃部側一部に磨面、刃先欠損	J−483
9	打製石斧（基部か）	B−11	9.6	5.4	2.7	157.2	シルト岩	刃部欠損、片平面は自然面のまま	J−293
10	スクレイパー	B−11	12.1	7.2	2.9	297.6	頁岩（珪質）	側縁端部に著しい磨滅痕	J−956
11	スクレイパー	B−10	9.5	6.8	2.5	180.8	溶結凝灰岩	片面は自然礫面、流紋岩質、尾鈴山酸性岩類	J−728
12	スクレイパー	A−10	9.0	7.9	2.4	213.8	溶結凝灰岩	片面は自然礫面	J−24
13	スクレイパー	B−10	6.6	8.4	2.9	197.2	砂岩（細粒）	片面は自然礫面	J−786
14	スクレイパー	B−10	10.9	5.9	3.4	155.3	砂岩（極細粒）		J−753
15	スクレイパー	A−12	4.8	4.4	1.6	29.8	頁岩		J−365
16	スクレイパー	B−10	3.7	1.9	0.7	5.1	頁岩		J−804
17	使用痕剥片	B−11	6.8	6.1	2.2	113.3	砂岩（細粒）	片面は自然礫面	J−223
18	使用痕剥片	B−11	12.5	10.3	2.4	327.3	砂岩（中~細粒）	側縁に剥離痕、上端部に磨耗が見られる	J−940
19	使用痕剥片	B−10	7.6	5.2	1.9	52.8	砂岩（細粒）	側縁端部に使用痕と思われる剥離	J−648
20	使用痕剥片	B−10	10.1	4.7	2.8	136.3	砂岩（極細粒）	側縁に剥離、自然礫面が残る	J−656
21	使用痕剥片	A−10	3.0	2.4	0.9	5.8	頁岩	側縁に細かな剥離	J−601
22	使用痕剥片	A−10	8.4	7.1	1.9	70.5	頁岩	2側縁に細かな剥離、自然礫面が残る	J−25
23	剥片	A−11	7.1	2.5	0.8	13.0	砂岩（細粒）		J−489
24	石核	B−11	11.4	10.6	6.4	854.4	砂岩		J−88
25	スクレイパーか	B−11	7.3	6.9	3.2	216.0	硬砂岩		J−139
26	石核か	A−11	5.7	4.3	2.6	60.4	頁岩		J−398
27	台石か	B−11	13.9	11.3	3.6	573.8	凝灰岩（入戸火砕流）	板状で表面は平ら、一部に熱を受けた様な異変、周辺欠損？	J−315
28	打製石鏃	B−11	2.4	1.5	0.4	0.9	砂岩（極細粒）	片方の脚部欠損、有脚	J−241
29	打製石鏃	B−11	1.9	1.2	0.4	0.6	砂岩（極細粒）	先端部がわずかに磨耗、完形、凹基	J−265
30	打製石鏃	B−11	2.4	1.5	0.5	1.3	頁岩	完形、凹基	J−107
31	打製石鏃	B−10	1.9	1.4	0.3	0.6	頁岩	先端部欠損、凹基	J−54
32	打製石鏃	B−10	1.6	1.6	0.4	0.6	砂岩（極細粒）	先端部わずかに欠損、凹基	J−632
33	打製石鏃	B−10	1.7	1.5	0.5	0.7	黒曜石	先端部欠損、凹基	J−648
34	打製石鏃	A−10	1.6	1.3	0.5	0.7	黒曜石	先端部と片方の基部欠損、凹基	J−548
35	打製石鏃	B−10	1.8	1.1	0.3	0.4	黒曜石	片方の基部欠損、裏面は縁辺調整のみ、凹基	J−854
36	打製石鏃	B−10	1.8	1.2	0.4	0.5	黒曜石	完形、裏面の一部は調整されず剥離のまま、凹基	J−497
37	打製石鏃	B−10	1.7	1.4	0.4	0.6	黒曜石	側縁の一部欠損、凹基	J−501
38	打製石鏃	B−11	1.6	1.1	0.4	0.5	黒曜石	完形、表面に自然面、裏面の一部無調整、凹基	J−475
39	打製石鏃	B−10	1.7	1.4	0.3	0.5	黒曜石	完形、凹基	J−631
40	打製石鏃	A−11	1.8	1.5	0.4	0.8	黒曜石	側縁の一部欠損、凹基	J−249
41	打製石鏃	A−10	1.5	1.3	0.3	0.6	黒曜石	先端部欠損、裏面は縁辺の調整のみ、平基	J−42
42	打製石鏃	B−11	1.3	1.4	0.4	0.5	黒曜石	完形、平基	J−921
43	打製石鏃	B−10	1.2	1.1	0.3	0.3	黒曜石	完形、平基	J−806
44	打製石鏃	B−11	1.4	1.0	0.3	0.3	黒曜石	完形、平基	J−937
45	打製石鏃	B−11	1.3	1.0	0.4	0.4	黒曜石	先端部欠損、平基	J−931
46	打製石鏃	B−10	1.6	1.1	0.4	0.6	黒曜石	完形、平基	J−587
47	打製石鏃	B−10	1.7	1.6	0.4	0.8	黒曜石	片方の基部欠損、両面中央に自然面、平基	J−897
48	打製石鏃	B−11	1.2	1.4	0.6	1.1	黒曜石	先端側半分程欠損、凹基	J−201
49	打製石鏃	B−10	0.8	1.0	0.4	0.3	黒曜石	先端側半分程欠損、平基	J−62
50	打製石鏃	B−10	1.7	1.4	0.4	0.7	黒曜石	基部側欠損	J−629
51	打製石鏃	B−10	1.3	1.3	0.5	0.8	黒曜石	基部側半分は大きく欠損	J−848

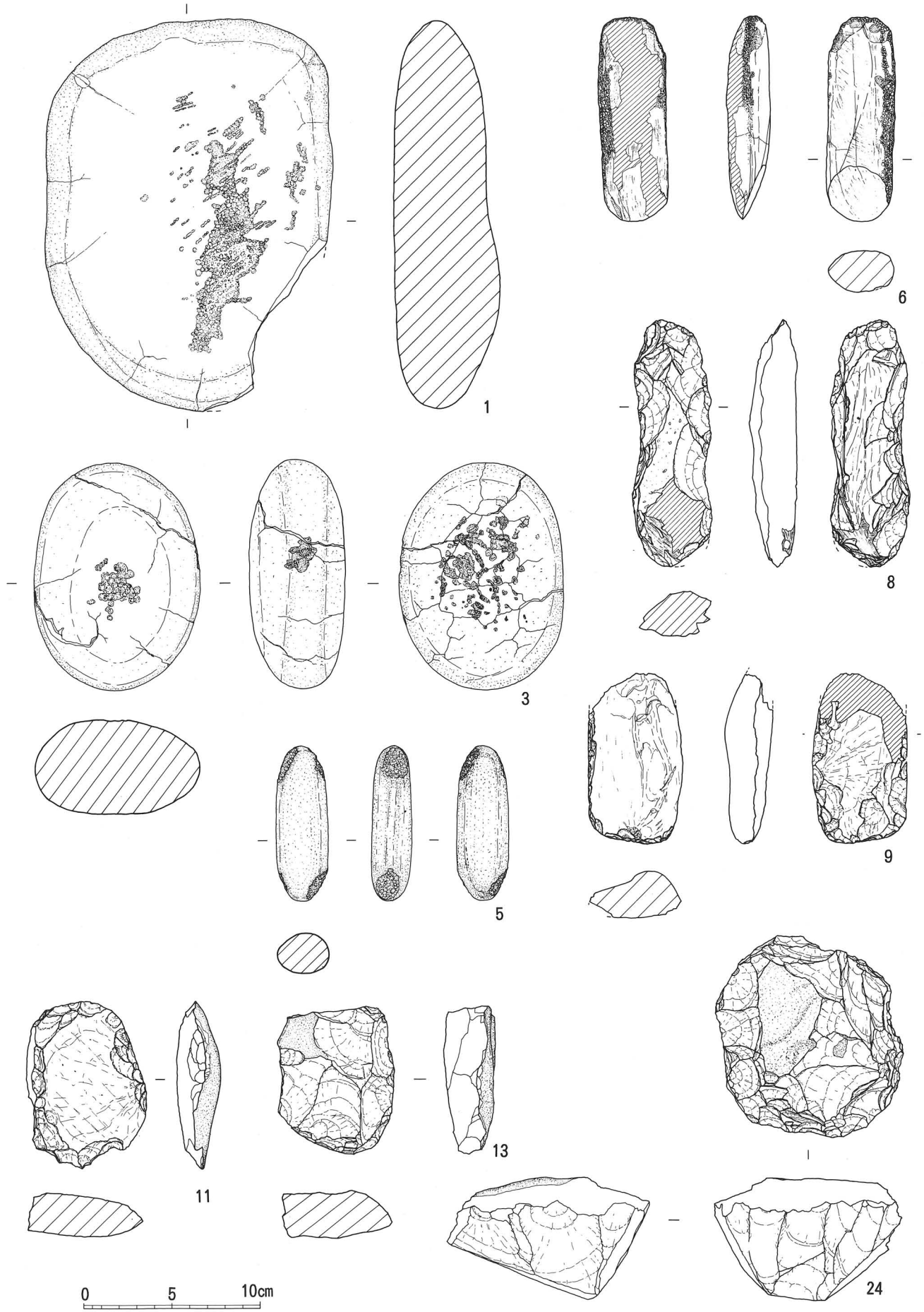




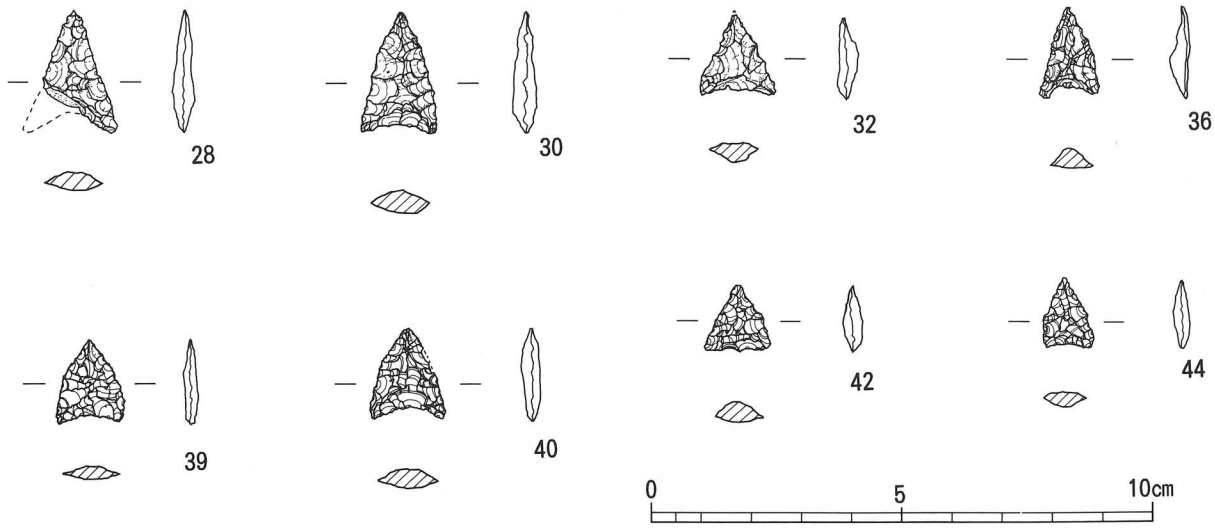


垂直分布図

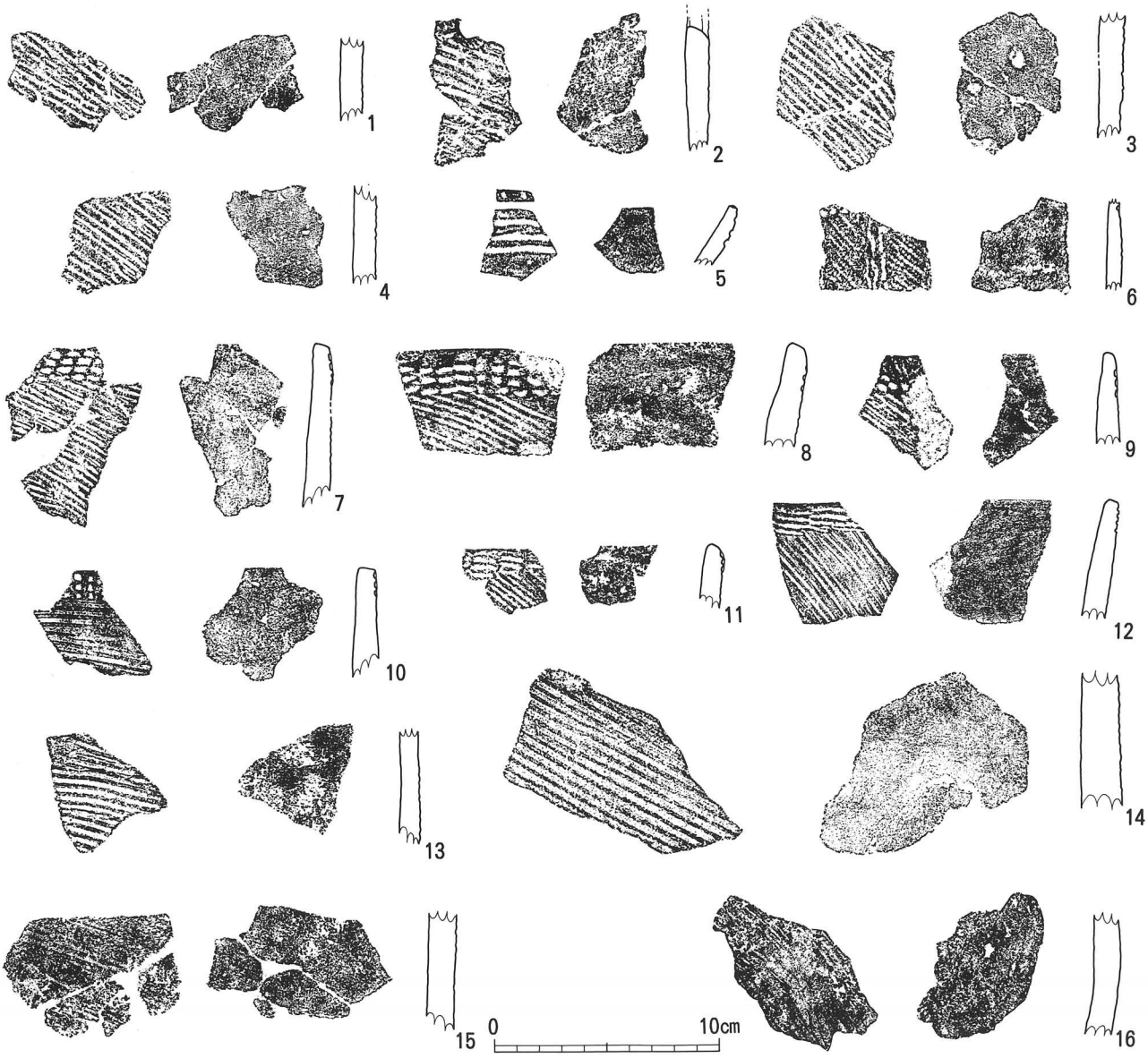
第10図　椎屋形第１遺跡Ａ地区　主要草創期石器 平面・垂直分布図 （番号は、計測表の番号）



第11図　椎屋形第１遺跡Ａ地区　草創期石器実測図（１）　図番号＝計測表番号



第12図　椎屋形第１遺跡Ａ地区　草創期石器実測図（２）　図番号＝計測表番号



第13図　椎屋形第１遺跡Ａ地区及び西側工事区出土早期土器実測図

面にぶい黄褐色、内面にぶい黄橙、12は外面にぶい黄橙、内面黄橙、13は外面にぶい橙、内面にぶい褐色、14は内外面とも浅黄橙、15は外面にぶい橙、内面黄橙である。16は、やや丸みのある器壁を持ち、外面調整は斜方向の条痕の上からヘラミガキを施している。内面調整は縦方向のヘラミガキもしくはヘラナデと思われる。色調は外面黄橙、内面橙である。これらの土器の胎土は、9・14に金色の鉱物粒が、15に高師小僧片が見られるほかは、通常の胎土である。西側工事区では、このほかに知覧式土器系の胴部片が1点採集されている。

早期の石器は、包含層が未調査のため詳細は不明である。土器同様に弥生時代の遺構埋土中からと耕作により削平された早期包含層面から遺物を採集しているので、表4及び図版に掲載した。

表4　椎屋形第1遺跡A地区　縄文時代早期石器計測表

番号	種別	出土地点(区) 取上番号	器長 (cm)	器幅 (cm)	器厚 (cm)	重量 (g)	石材	備考
1	打製石鏃	A－7区	2.1	1.4	0.2	0.5	チャート	完形、凹基
2	打製石鏃	弥生SA5－50	2.2	1.5	0.3	1.0	チャート	片脚端部欠損
3	石匙	弥生SA5－6	2.2	4.0	0.5	3.1	頁岩	横型、右端部欠損
4	石錐	弥生SA3－167	2.4	1.1	0.8	1.7	石英	完形、先端部磨耗

2　弥生時代の遺構と遺物（第14図）

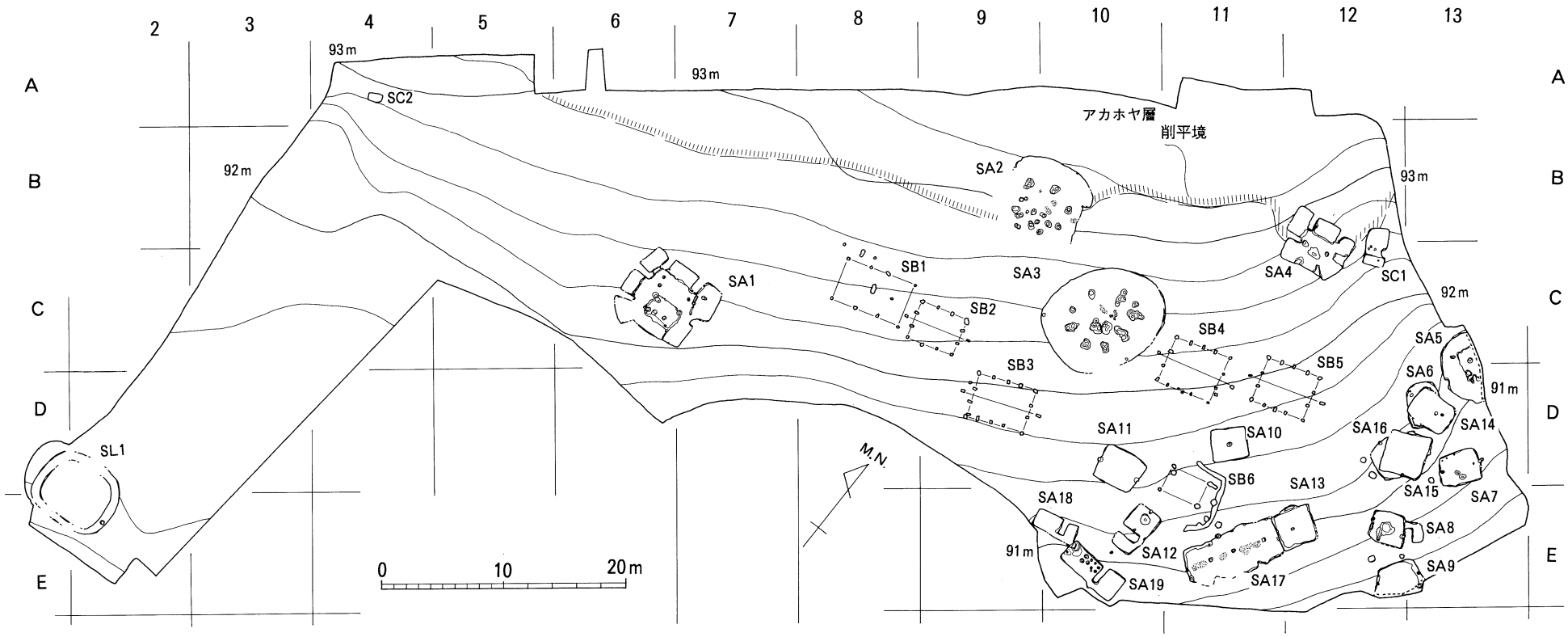
当初の予想と異なり数多く検出された弥生時代の遺構は、内容もいろいろと変化に富み、しかも出土土器からはさほどの時間幅は見られないものである。次に順次報告する。

（1）掘立柱建物跡（SB、第15～17図）

掘立柱建物跡は6棟検出された。トレンチャーによる深耕を免れ、ほかにピットも見られなかった事から検出は比較的容易であった。ピットからは殆ど遺物が出土しなかったが、埋土中にわずかに出土した土器片は弥生土器であり、また、周囲には縄文時代以外の時期の遺物が見られなかったため、弥生時代の遺構として報告する。SB6に伴うと思われるコの字形の溝からは第17図のような竪穴住居跡と同様の弥生土器が出土している。これらの掘立柱建物跡は、柱の掘方が長方形もしくは方形を意識して掘り込まれていると考えられる。長方形の掘方の長軸方向は、おおよそ建物に対し直角方向である。主軸方向はほぼ同じ略東西方向であるが、細かく見るとSB1・2、SB4・5がそれぞれ桁や梁方向が平行である。検出面がアカホヤ火山灰層上面であったためか、側柱で囲まれた空間には焼土等は確認できなかった。これらの掘立柱建物跡のうち4棟が棟持柱を持つ（表5参照）。

SB1は、棟持柱を有さない最も大きな掘立柱建物跡である。北側の側柱間が東端のみ特に間隔が広い。中央東半には主軸線上に並ぶピットが、北西側の側柱の外側にも平行に並ぶピットが見られる。耕作によりかなり削平。掘方から甕の胴部片とSA19の一括土器と接合した壺の口縁部小片が出土。

SB2は、西側の棟持柱の掘方付近が攪乱されていたが、微妙に違う土色を頼りに掘り進めたところ長方形の掘方を確認できた。また、検出時に西側中央の2本の妻柱は、柱痕跡と思われる黒色の柔らか

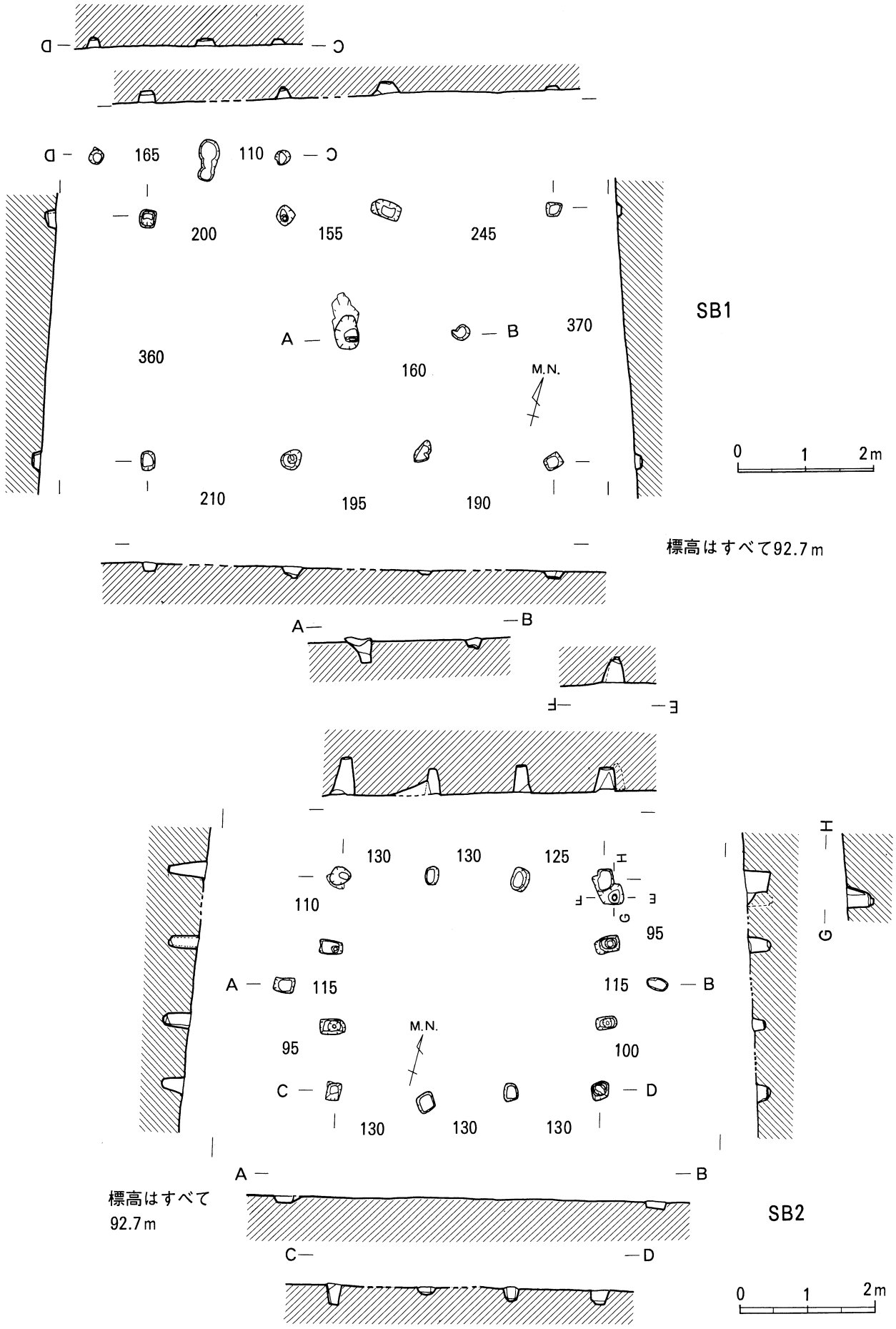


第14図　椎屋形第1遺跡Ａ地区　弥生時代遺構分布図

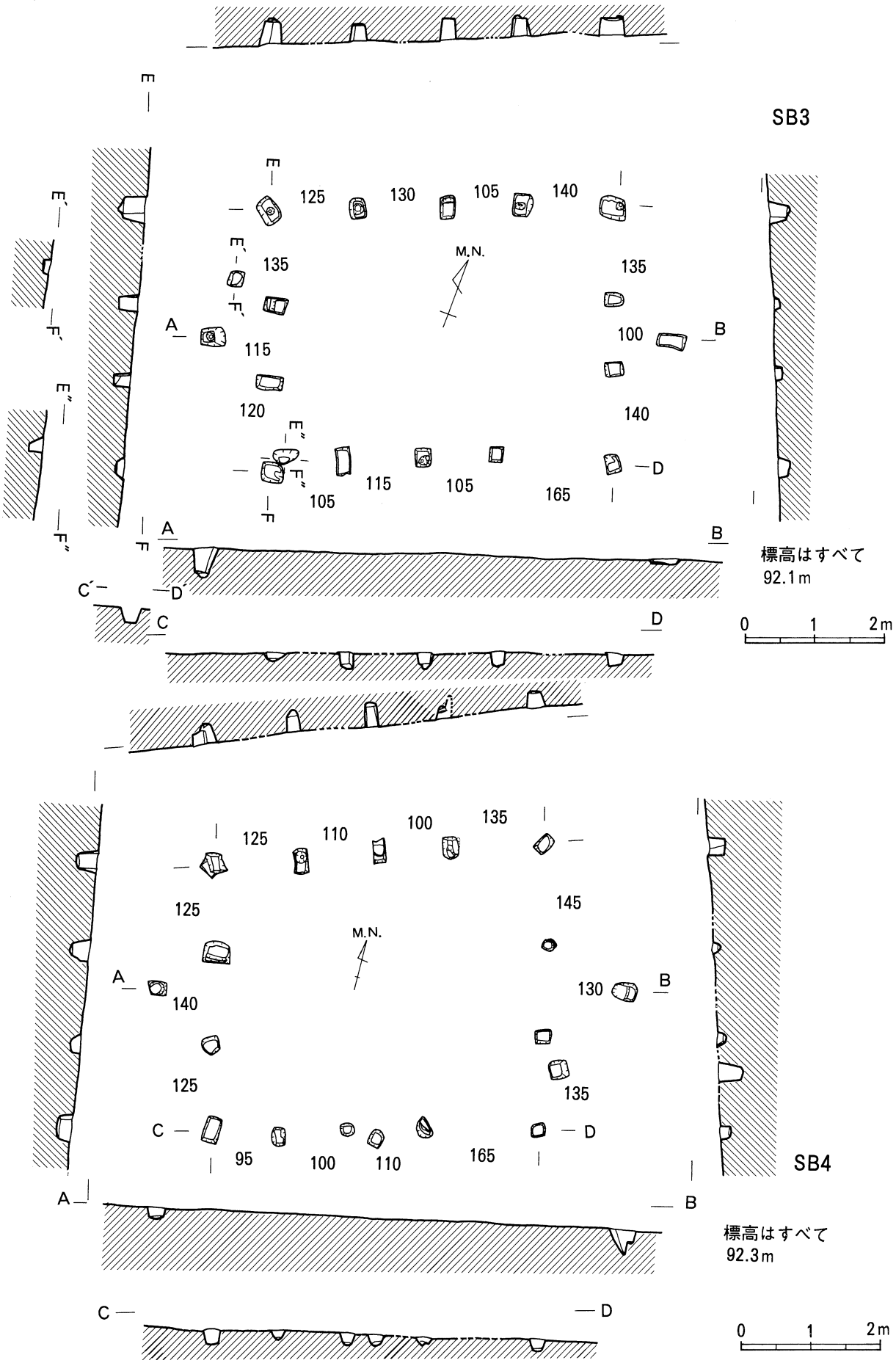
表５　椎屋形第１遺跡Ａ地区　弥生時代遺構一覧表

遺構番号	面積(㎡)	グリッド	主軸方向	規模	梁間(cm)	桁行(cm)	棟持柱間距離(cm)	備考	図番号
ＳＢ１	21.8	Ｃ－８	Ｎ－76°－Ｅ	１間×３間	360～370	595～600	－	掘り方は方形、一部に柱痕、ＡＢはほぼ主軸線上	15図
ＳＢ２	12.2	Ｃ－８・９	Ｎ－76°－Ｅ	３間×３間	310～320	385～390	550	掘り方は方形基調、一部に柱痕が見られる	15図
ＳＢ３	18.4	Ｄ－９	Ｎ－70°－Ｅ	３間×４間	370～375	490～500	660	掘り方は方形、一部に柱痕	16図
ＳＢ４	18.8	Ｃ･Ｄ－10･11	Ｎ－75°－Ｅ	３間×４間	390～410	470	680	掘り方は方形基調、一部に柱痕	16図
ＳＢ５	17.1	Ｃ･Ｄ－11･12	Ｎ－74°－Ｅ	３間×４間	375	450～460	620～630	掘り方は方形基調、一部に柱痕	17図
ＳＢ６	7.4	Ｄ･Ｅ－10･11	Ｎ－78°－Ｅ	１間×１間	220～230	330	－	掘り方の一部は方形、排水溝（？）あり	17図

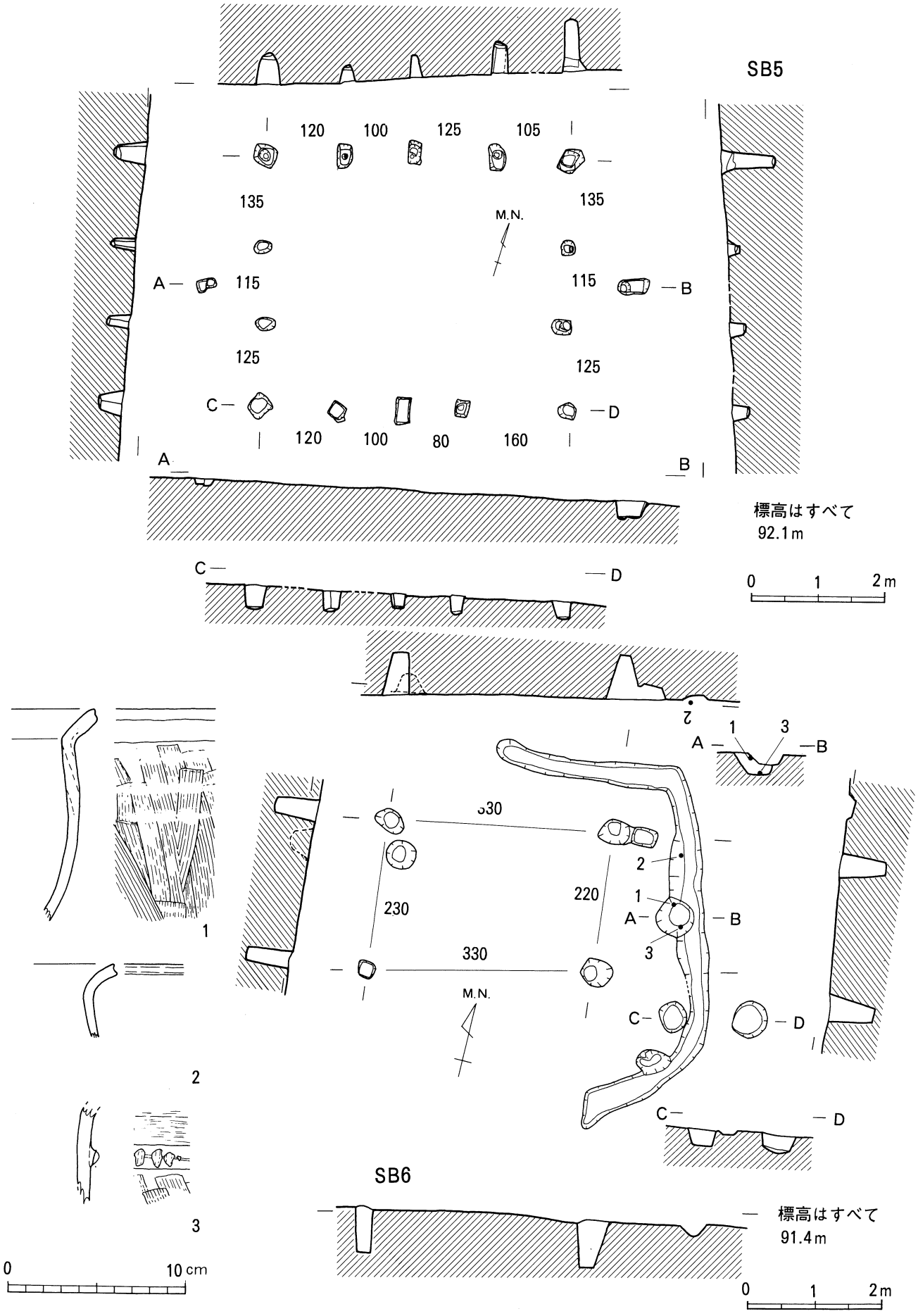
遺構番号	平面形	主柱数(深さ 浅～深 cm)	規模 長軸×短軸（m）	規模 床面積（㎡）	主な出土遺物	備考	図番号
ＳＡ１	不整長方形	２本(70～80)	7.5×6.8	37.5	甕、壺、鉢、ミニチュア、石皿、磨石、砥石、装飾品？、磨製石鏃	間仕切り壁５、ベッド状遺構１、間仕切られた土坑状の区画１、溝による区画２、中央に長方形土坑と柱穴２、一部に貼床、柱の建替え？	18図
ＳＡ２	不明	７～８本(25～90)	７＋α×不明	(38.5)	甕、壺、石庖丁未製品、磨製石鏃	焼床面４、中央柱穴２、２～３回の柱の建替えあり	18図
ＳＡ３	楕円形	８本(40～105)	10.0×8.1	64.0	甕、壺、石皿、凹石、砥石、不明石器、磨製石鏃及び未製品、鉄器、炭化木の実	焼床面５、壁帯溝、薄く貼床、中央柱穴２、柱の建替え最多で９回	20図
ＳＡ４	不整長方形	２本(35～40)	5.6×4.2	19.3(間仕切削平前17.8)	甕、壺、凹石、砥石、鉄片	現存間仕切壁３、削平間仕切壁３、ベッド状遺構２、一部に壁帯溝、中央に土坑、貼床	22図
ＳＡ５	円形？	不明	5.9×2.8＋α	(11.8＋α)	甕、壺、磨製石鏃、炭化シイの実	半掘（地区外）、中央に土坑、中央柱穴１＋α、一部に突出壁１	22図
ＳＡ6･14	ＳＡ６隅丸長方形？	不明	3.65×2.75	(推定8.7)	甕	ＳＡ14と切り合い、焼土塊２、貼床	22図
	ＳＡ14隅丸長方形	１本？(30)	3.6×2.7	8.8		ＳＡ６と切り合い	22図
ＳＡ７	隅丸長方形	２本(25～30)	3.7×2.7	8.0	甕、壺、石皿	南東壁際に小土坑、貼床	24図
ＳＡ８	不整方形(張出し土坑付)	２本(35～50)	2.9×2.7	6.3	甕、壺、瀬戸内系高坏脚、局部磨製石鏃	中央に土坑、貼床、長方形土坑を付け足す(１、１㎡)	24図
ＳＡ９	不明(不整方形か？)	不明(２本の細いピットあり30～45)	4.4＋α×2.6＋α	(7.8＋α)	甕、壺、敲石、炭化木の実	半掘（地区外）、焼土１（図面記録もれ）、２軒の切合いの可能性あり	24図
ＳＡ10	長方形	１本(85)	3.0×2.6	7.4	甕、丹塗り壺、石皿、台石、凹石、敲石、磨製石鏃	全面に炭化材覆う、貼床	25図
ＳＡ11	不整長方形	２本(70～80)	3.6×3.1	10.1	甕、壺、鉢、凹石	主柱穴は斜め、貼床	25図
ＳＡ12	方形(長方形土坑付)	２本(40)	2.4×2.25	4.7	壺	中央に大ピット（土坑？）、南側に長方形土坑が付属する（1.9㎡）	25図
ＳＡ13	方形	不明	3.1×3.1	8.1	甕、壺、敲石、磨製石鏃	ＳＡ17と隣接、貼床、埋土中に焼土面あり	27図
ＳＡ15･16	ＳＡ15方形	不明	3.6×3.5	11.4	ＳＡ15　台石 どちらか　甕、壺、瀬戸内系凹線文壺	ＳＡ16と切り合い、床中央に台石	28図
	ＳＡ16方形？	２本？(30～55)	3.3×2.2＋α	(6.1＋α)	不明　鉢、鉄器 ＳＡ16　壺、丹塗り壺	ＳＡ15と切り合い、貼床	28図
ＳＡ17	方形３連結または長方形	２本または４本＋α(20～40)	8.1×3.8	(25.2)	甕、壺、炭化ツブラジイ（焼土３より）	焼土４、埋土はごく浅い、ＳＡ13と一連のもの？	27図
ＳＡ18	長方形(長方形土坑付)	不明	2.3×1.6	3.3	小破片のみ	東側に長方形土坑が付属する（1.4㎡）	28図
ＳＡ19	長方形(長方形土坑付)	不明	3.25×1.9	5.6	甕、壺	ＳＡ18に上がる土の階段状遺構、西壁に炉状の焼土、柱の痕跡様の２対×４列のくぼみ、東側に長方形土坑が付属する（3.7㎡）	28図



第15図　椎屋形第１遺跡Ａ地区　ＳＢ１～２実測図



第16図　椎屋形第１遺跡Ａ地区　ＳＢ３～４実測図



第17図　椎屋形第１遺跡Ａ地区　ＳＡ５～６及びＳＢ６周辺出土土器実測図

な埋土が見られた。長方形の掘方の東端に寄せて柱を据え、周囲はアカホヤ混じりの黒色土で堅く締めたものと考えられる。柱の傾きは垂直、直径は12～13cmであった。完掘時に上屋の重みによると思われる柱の円い圧痕が、この2柱を含め6カ所見られた。北東端には1カ所柱の建て替えが見られる。

ＳＢ3は、長方形の掘方が顕著に見られ、柱の圧痕と思われる浅い円い窪みが7カ所確認できた。また、建て替えあるいは補助の支柱と思われるピットも見られる。棟持柱を有する。

ＳＢ4は、同様に掘方の多くが長方形もしくは方形を呈している。また、柱の圧痕と見られる窪みも1～2カ所残る。柱の建て替えあるいは補助支柱と思われるピットも見られる。棟持柱を有する。

ＳＢ5も棟持柱を有する建物跡で、柱の圧痕と思われる窪みが7カ所確認できた。

ＳＢ6はこれらの掘立柱建物跡とは異なり、竪穴住居跡群の中に位置する。竪穴住居跡との切り合いはなく、平面プランはやや歪な長方形で、柱間は1間×1間である。東側にコの字形に囲むような溝が見られる。溝は、コンターラインから見るとやや中途半端ではあるが、排水を意図したものかあるいは区画を意図したものかもしれない。溝の中央、建物の主軸線上に近く、やや大きなピットが見られる。このピットや溝からは、第17図1～3の甕形土器片が出土している。このほかにも溝や柱の掘方から甕胴部片等が出土している。

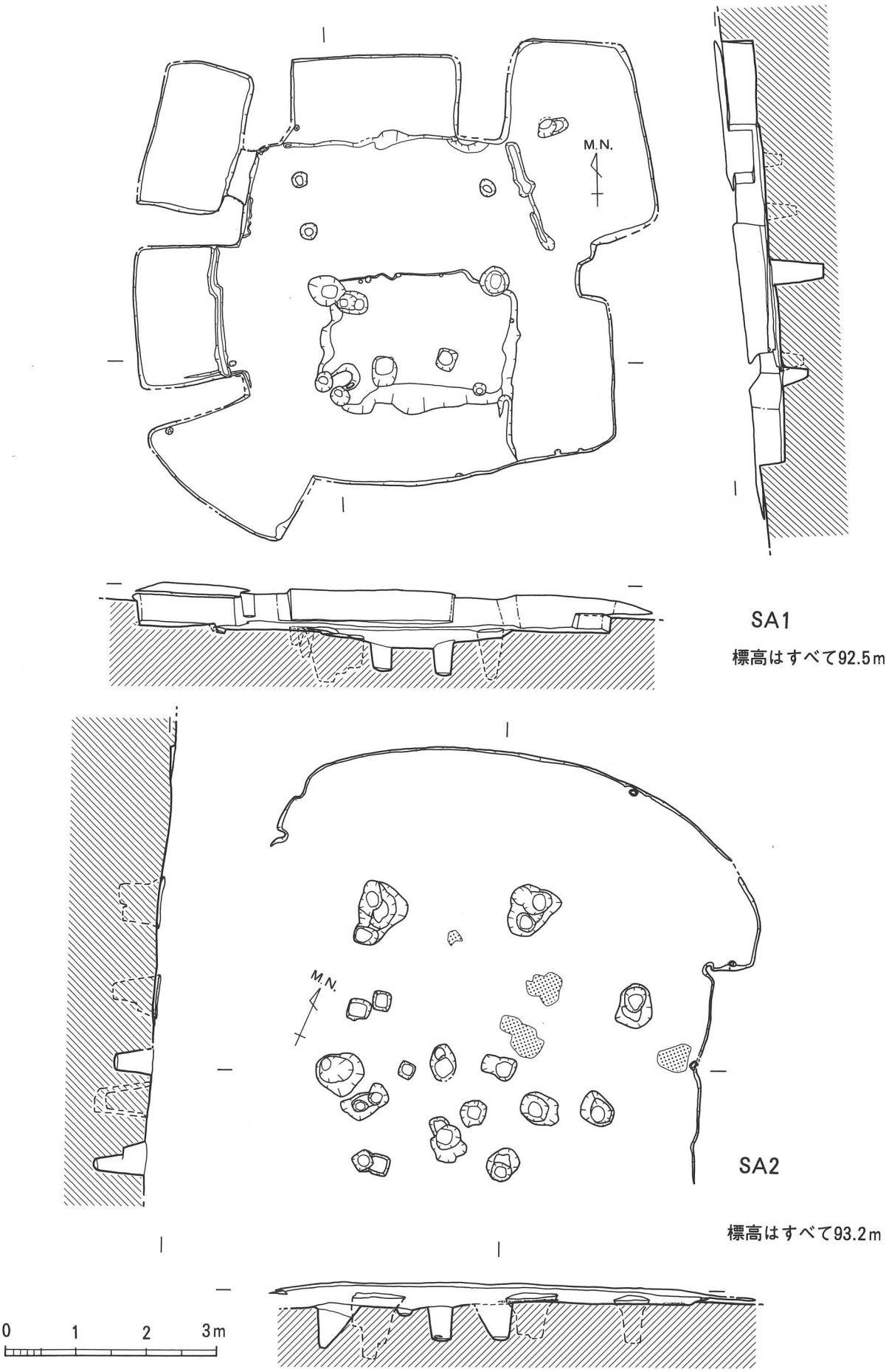
（2）竪穴住居跡（ＳＡ）

竪穴住居跡は、掘立柱建物跡を中心に床面積の大きいものや間仕切り壁を有するものが標高の高い方に分布し、10㎡未満のものが標高の低い方に分布している。なかにはＳＡ19のように住居跡とは考えにくい竪穴もあるが、ここでは一応竪穴住居跡として報告したい。全部で19軒検出した。このうち、明らかな切り合いが2例、連続して作られたと思われるものが2例ある。また、床面積の大きな住居跡には柱の建て替えや間仕切り壁の一部削平等が見られる。表5を参照されたい。次に表に補足しておきたいことを簡単に述べる。

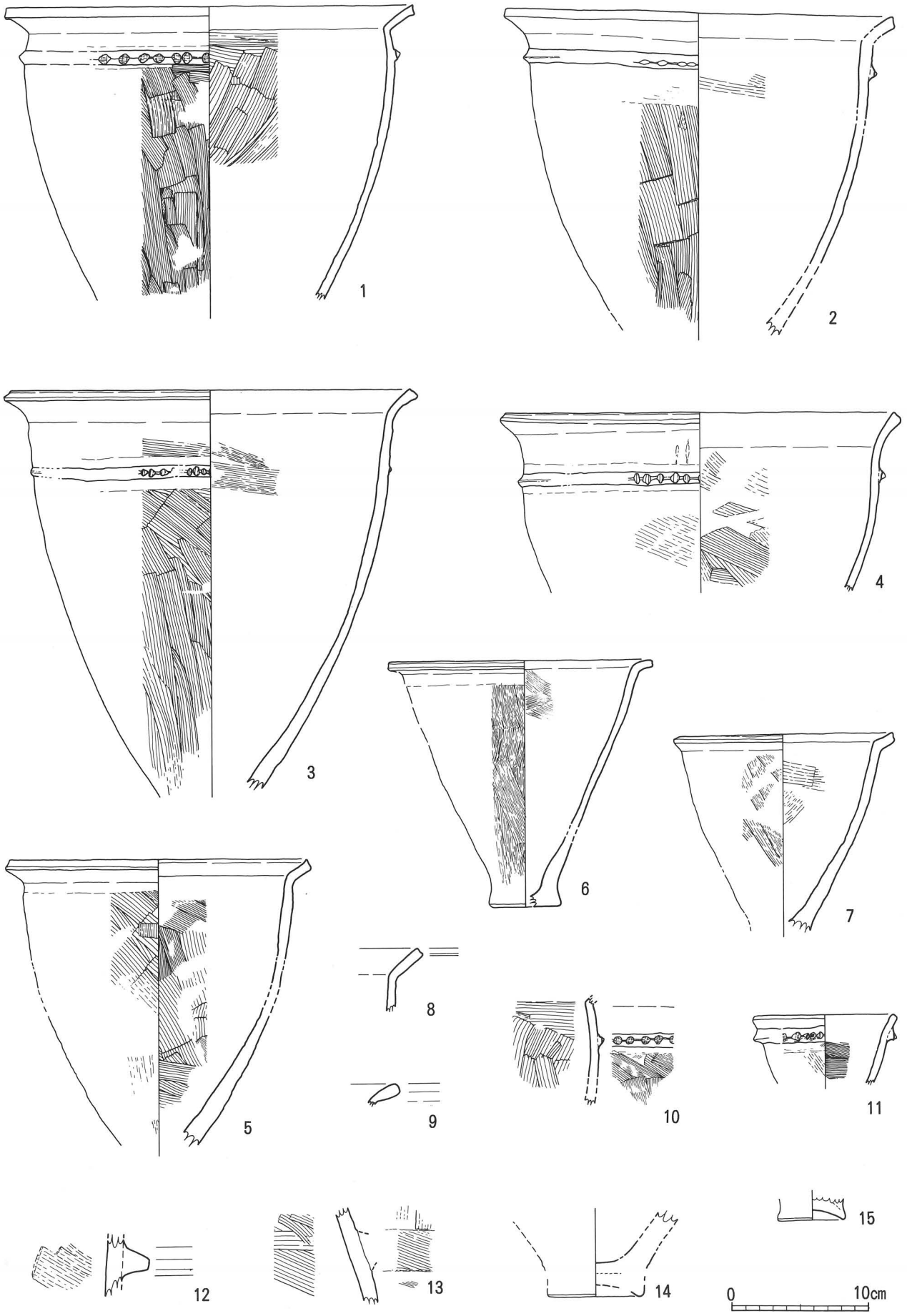
ＳＡ1は間仕切り壁を有する住居跡である（第18図）。検出時既にトレンチャーで上部を筋状に攪乱されていた。ただ、この攪乱箇所以外は原位置を保ったままで、床面も破壊を免れていた。埋土はほぼ1層で、中央部と間仕切られた各区画との堆積状況に違いは見られない。中央の東西に並ぶ主柱に平行に南北両側に支柱穴が見られる。このうち西側の主支柱穴には、建て替えもしくは補助支柱と思われる複数のピットが見られる。また、中央やや南よりの土坑には、ＳＡ2・3等大型の住居跡に見られる2本の比較的大きな支柱穴がある。これら支柱穴の深さはおおむね40～50cmである。

このほかＳＡ1には、ベッド状遺構や溝で区画された間取りが見られるが、北西側の1区画は、間仕切り壁の先端がカギ状に曲がった状態で残され、狭くなった通路部分の床も1段盛り上がった状態で削り残されており、長方形の土坑を造り付けたような構造になっている。また、南西の一角は、中央の土坑から南に延びる段差と東壁の張り出しとでベッド状遺構のようになっている。

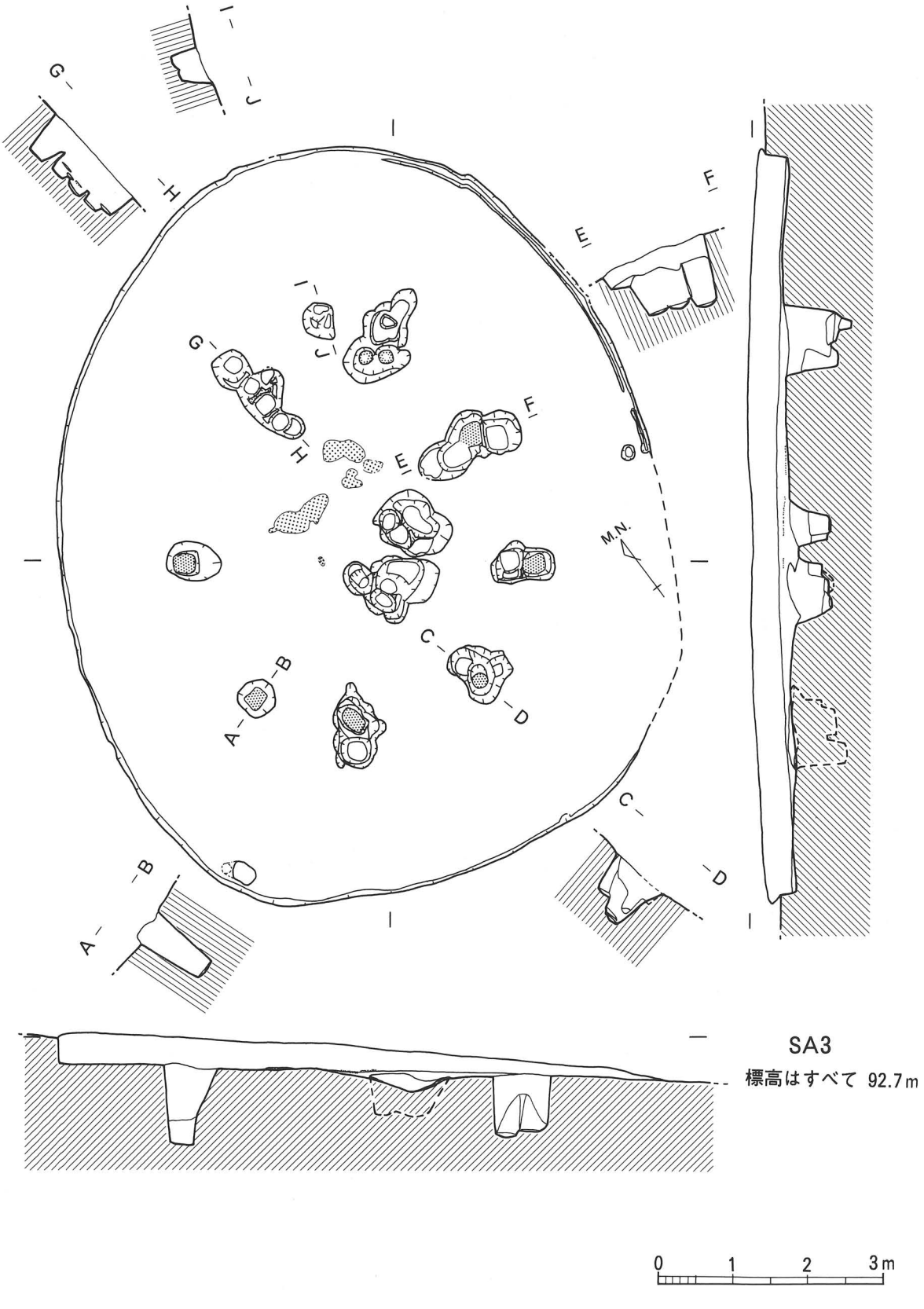
遺物は、主に中央部分に出土している。殆ど浮いた状態で、壁際ほど高く中央部へ低くなる。主な遺物では、第19図1が南西支柱穴の西側で、2が北西支柱穴の南側で、5が中央土坑内の2本支柱穴の北側で、3・4が東側主柱穴の北から北東の溝付近で、6・7が北のベッド状遺構の段差付近でそれぞれ集中して出土している。また、21は同ベッド状遺構の西端で、11は前述の北西端の土坑状の区画内の上部で出土している。石器のうち表8の1・2は、中央土坑内の南側で、石皿は床面直上、磨石はかなり



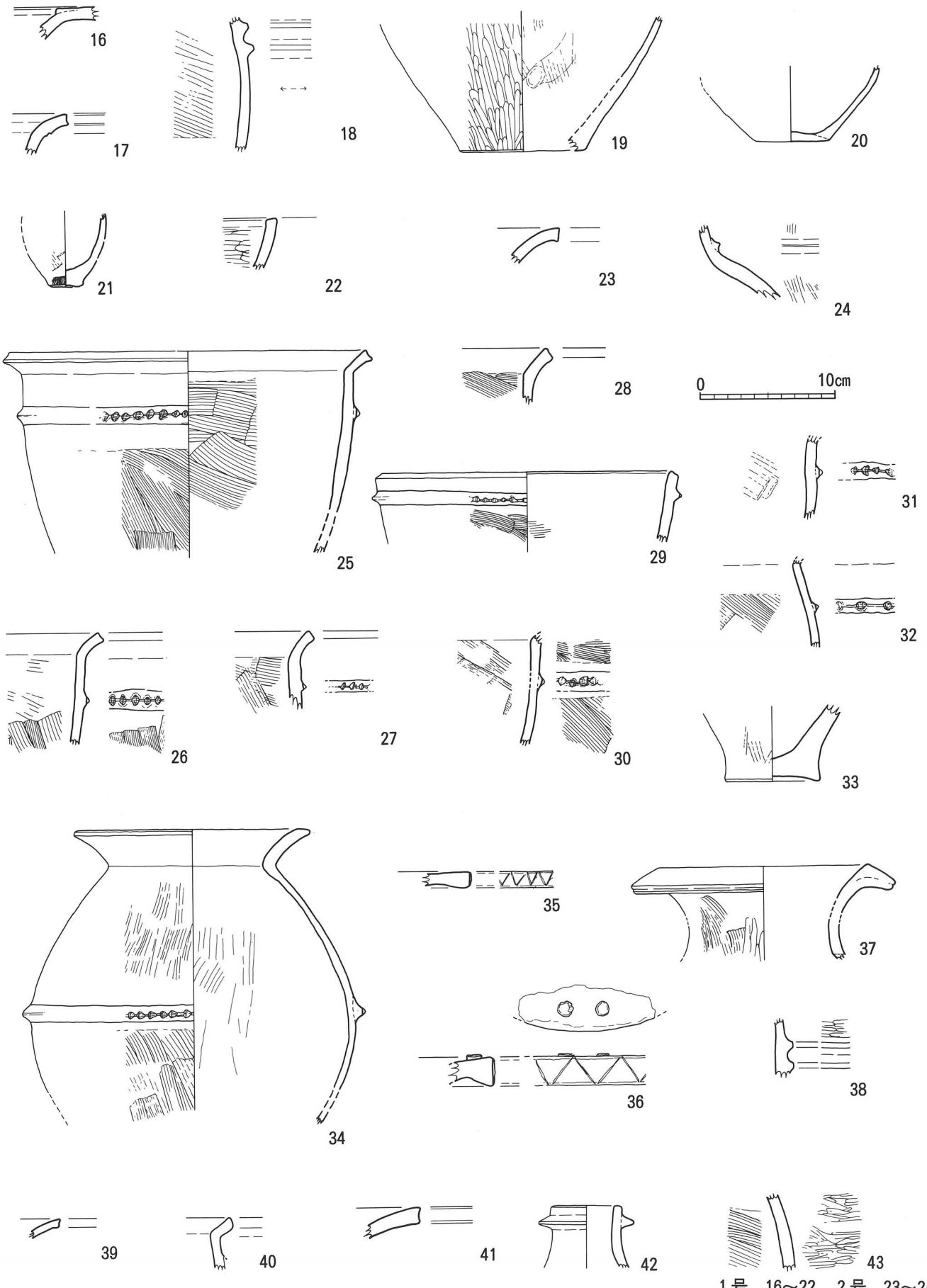
第18図　椎屋形第１遺跡Ａ地区　ＳＡ１～２実測図



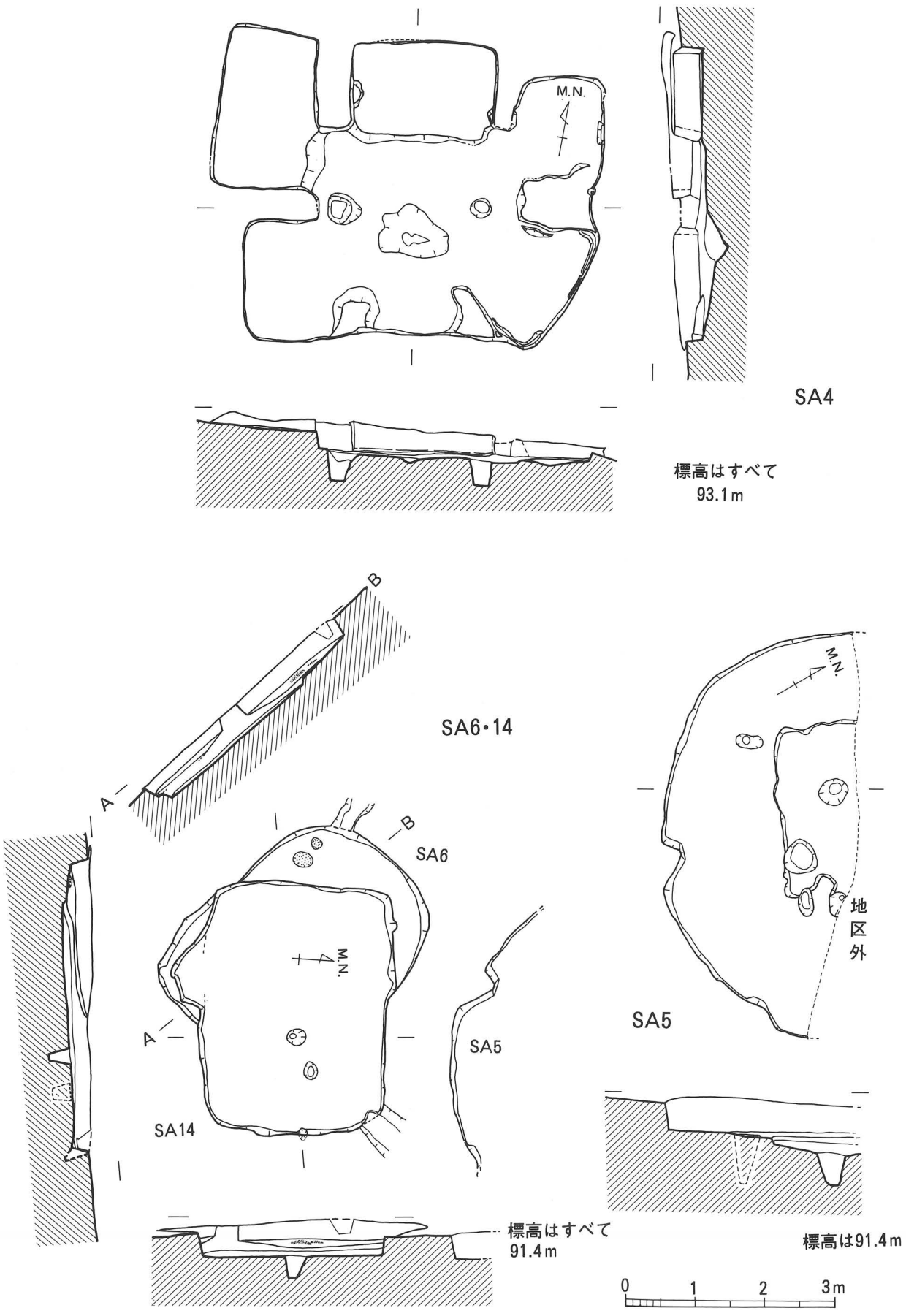
第19図　椎屋形第１遺跡Ａ地区　ＳＡ１出土土器実測図



第20図　椎屋形第１遺跡Ａ地区　ＳＡ３実測図



第21図　椎屋形第１遺跡Ａ地区　ＳＡ１～４出土土器実測図　1号　16～22、2号　23～24　3号　25～38、4号　39～43



第22図　椎屋形第１遺跡Ａ地区　ＳＡ４～６・14実測図

浮いた状態で出土、4・5の穿孔のある装飾品様の石製品は、北西端土坑状区画内とその東側段差を越えた箇所でかなり浮いた状態で出土した。

ＳＡ２は、耕作により削平されたと考えられ、北～東側の壁の一部と主柱の掘方、床の一部のみ残存していた（第18図）。主柱穴は円形に並ぶ。掘方は殆ど２回、多くて３回の建て替えが見られる。最終的な掘方は、遺憾ながら記録漏れで不明である。中央の柱穴２本は深さ50cmである。掘方の中には、上端幅22～23cm、下で15～16cm幅のＵ字形鋤先状の工具痕の残るものがある。

遺物は、北側壁の中央東寄り床面と中央の焼床面のまわりで少量出土している。石器のうち10の石庖丁の未製品と思われるものは、この北側壁付近で出土している。

ＳＡ３（第20図）は、同じく円形に主柱が並ぶ住居跡である。柔らかい埋土の柱痕跡がアミ掛け部分の掘方に残存していた。その周囲はアカホヤ混じりの土で固められていたが、完掘すると２～４回、多いのは９回もの建て替えと思われる連続し切り合うピットが検出された。中央のピットでも４回以上の建て替えが考えられる。掘方の底には掘立柱建物跡と同じく方形のものが見られる。

遺物は全体的に出土している。ただ、壁の残存状況のよくない南東部は埋土も薄く、遺物は少なかった。深耕による削平と遺構検出の際の指示の失敗によるものであろう。遺物には小片が多く、石器では砥石や磨製石鏃、チップなどが多く出土している。この砥石は主に北半部分で出土、磨製石鏃はほぼ全体的に出土、計測表の21の敲打痕と研磨痕の見られる工具様の石器は南西壁際で出土した。また、土器のうち第21図29は、北西壁際で浮いた状態で出土。この土器はＳＡ11の中央付近出土の破片と接合する。25は北半全体に散乱し、殆ど主柱穴の外側である。34は南西壁際で浮いた状態で出土。胴部片であるが、ＳＡ８の中央土坑付近の口縁部～頸部片に接合した。

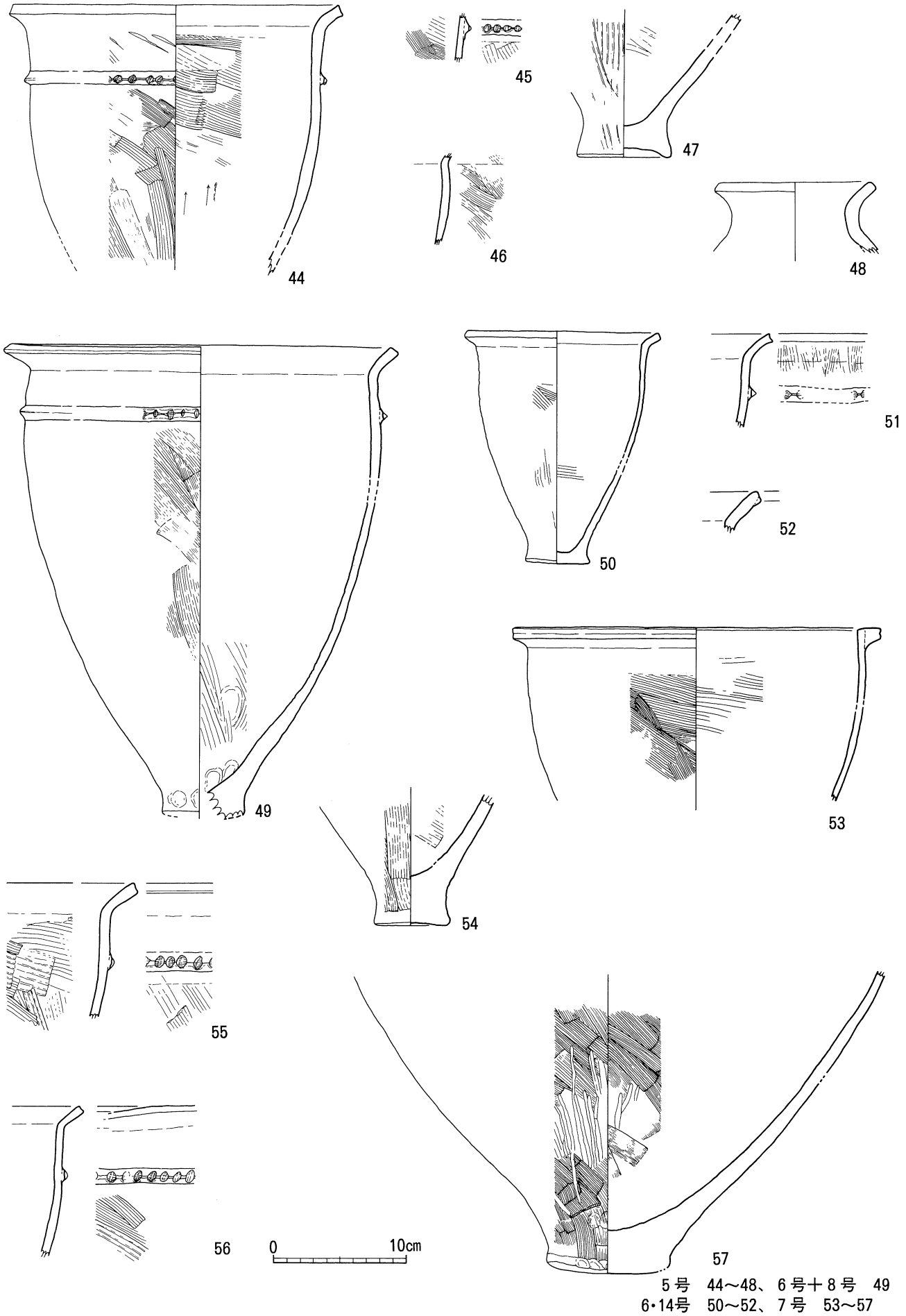
ＳＡ４（第22図）は、当初間仕切り壁が３カ所と考えられていたが、アカホヤや黒色土等の混じった貼床を除去する際に、削平された間仕切り壁の下部が残存し、貼床することでほぼ床の高さを合わせていることが確認された。遺物は少ない。中央土坑付近にやや集中、しかし、全体的に見られる。浮いた状態である。北のベッド状遺構からは鉄片が出土している。

ＳＡ５（第22図）は半分以上地区外にかかるため全掘できなかった。中央土坑内にある中央柱穴と思われる掘方の深さは45cmである。遺物は殆ど浮いた状態で出土しているが、第23図44は中央の土坑と南西壁との中間付近から土坑にかけて出土、床の直上である。

ＳＡ６とＳＡ14は切り合って検出された（第22図）。しかし、土層断面の観察では切り合いの新旧関係はつかめていない。遺物はＳＡ６の床面に張り付いたもののみＳＡ６で取り上げ、その他はＳＡ６・14と併記して取り上げた。ＳＡ14は小破片が全体から出土しているが、ＳＡ６の推定範囲外の出土遺物も小片である。しかし、ＳＡ６からは、第23図49の甕形土器が西～北西壁際に残存する床面直上で出土している。これは、ＳＡ８の中央土坑付近出土の底部に接合した。また、50はＳＡ６の南側の床面の残存する箇所と崩壊部分との境目付近で出土。崩壊の状況からするとＳＡ６に伴う可能性が強い。

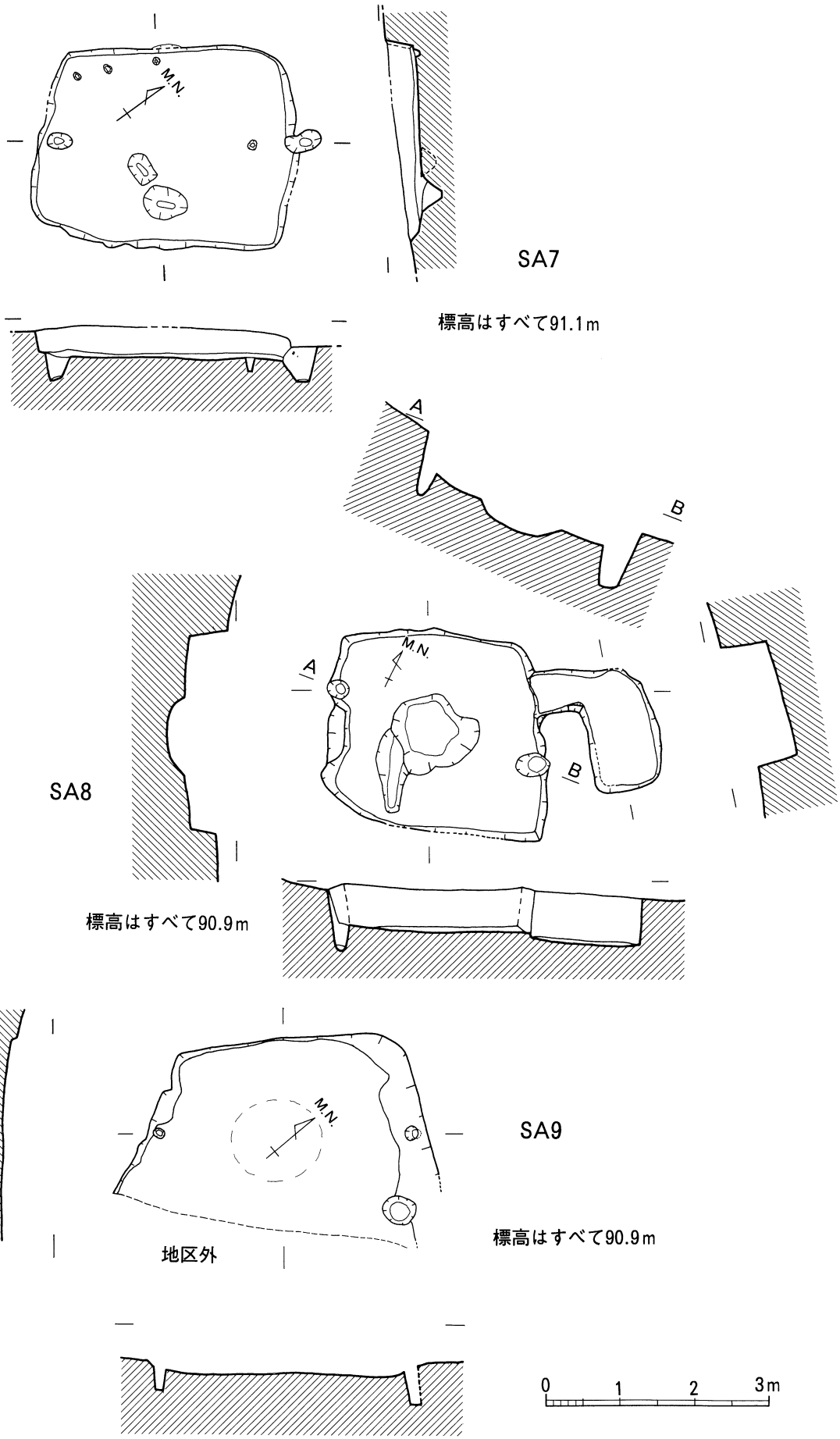
ＳＡ７（第24図）の埋土は、中央が窪んだレンズ状堆積が見られ３層に分層できる。遺物は南北の角を除いて全体に出土している。土器のうち第23図55は、北東主柱穴の南側でやや浮いた状態で出土、57と石器の19石皿は、西壁際の床面直上で出土した。

ＳＡ８は方形の住居の壁の途中から短い通路付きの土坑を取り付けたような構造の竪穴である（第24

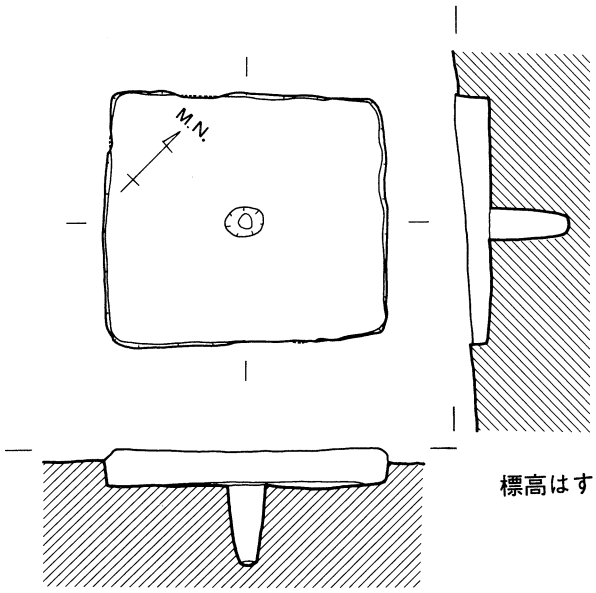


5号　44～48、6号十8号　49
6・14号　50～52、7号　53～57

第23図　椎屋形第1遺跡A地区　SA5、6・14、7出土土器実測図

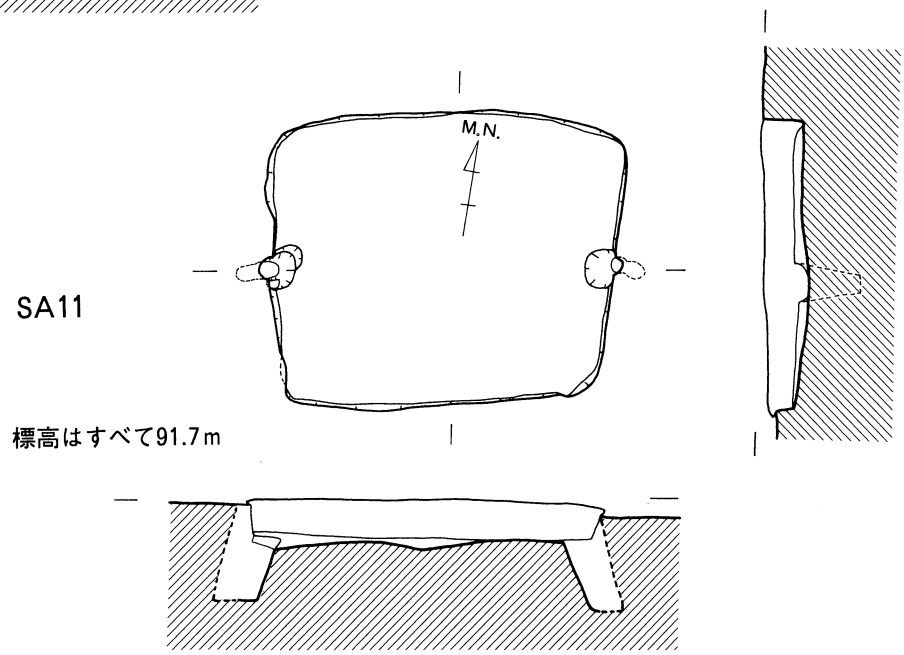


第24図　椎屋形第１遺跡Ａ地区　ＳＡ７～９実測図



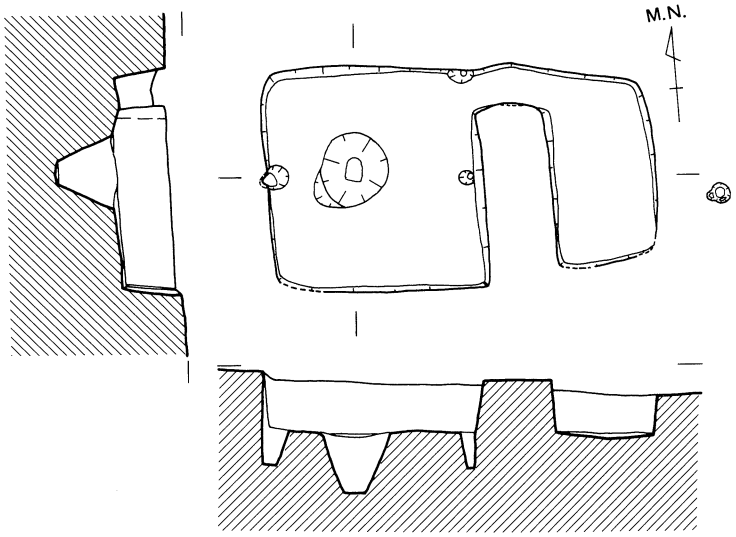
SA10

標高はすべて91.7m



SA11

標高はすべて91.7m



SA12

標高はすべて91.4m

0 1 2 3m

第25図　椎屋形第１遺跡Ａ地区　ＳＡ10～12実測図

図)。土坑は住居床面より約10cmほど低く、長軸165cm、短軸95cmの長方形プランである。遺物は中央土坑付近を中心に出土。土器のうち第26図62は東角付近で、63の瀬戸内系凹線文高坏脚部片は北壁際中央付近で出土している。また、前述の34（ＳＡ３）・49（ＳＡ６）に接合した土器片は、中央部の比較的床面に近い所から出土している。

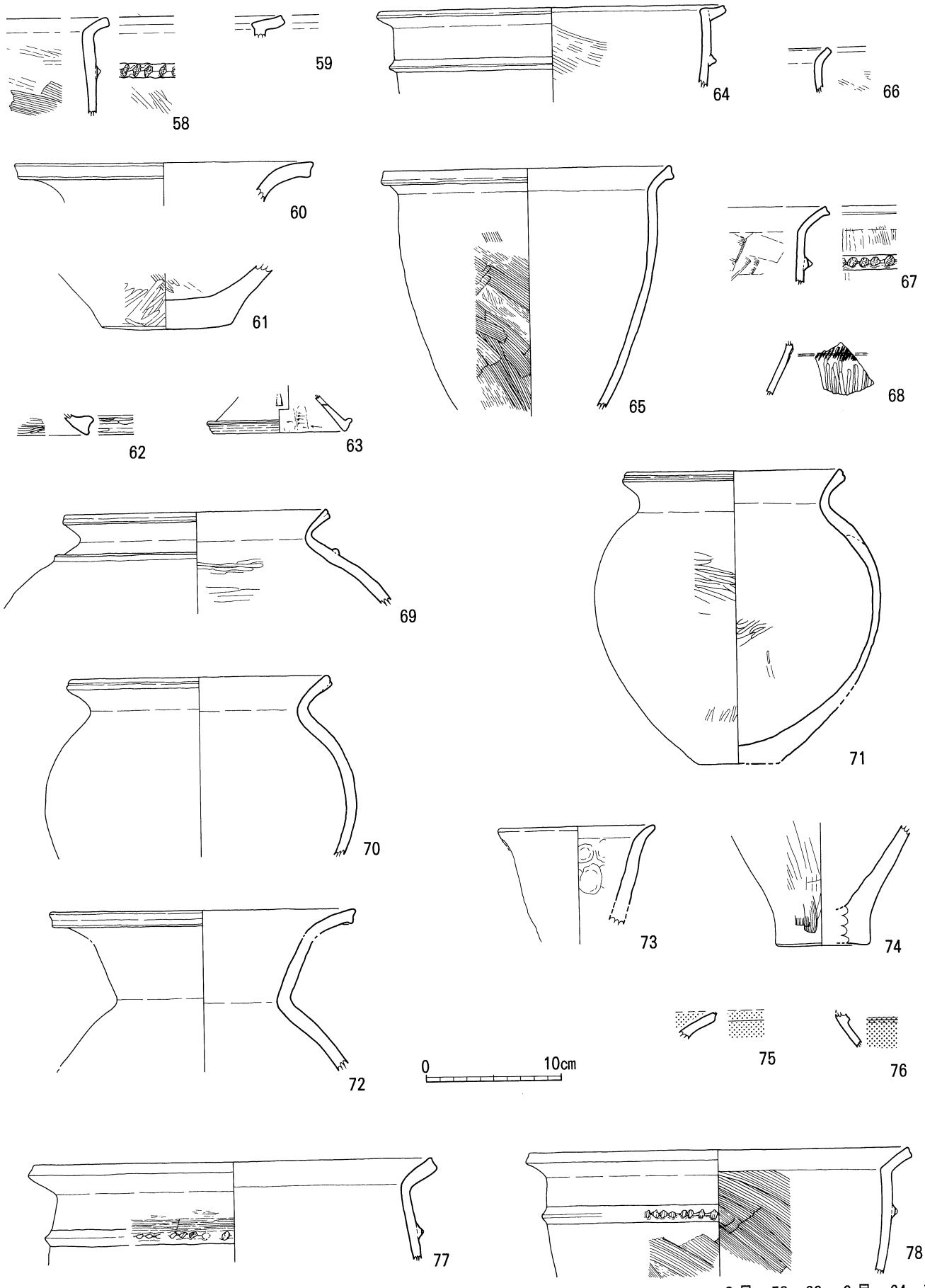
ＳＡ９は半分以上が地区外となって全掘できなかった（第24図)。床面中央部付近に焼土面を確認したが、現地で記録する際に記入漏れしてしまった。図中の破線部分がおおよその範囲である。この焼土中からは炭化した木の実が出土している。遺物は中央の焼土付近から北東側に集中するが、西側でも出土していて、いずれも浮いた状態である。遺構・遺物の検出時に、図化した遺構プランの西側部分に略方形プランの一部とも取れる浅い落ち込みがあるのを確認したが、壁の崩れとも見えたため図化はしなかった。切り合いであった可能性も否定できない。出土土器のうち第26図64が北西側壁近くで出土、この同一個体がＳＡ８でも出土している。65は焼土面の上部で、68・69は南西角で出土している。また、70・71は北東側に散乱していたもので、直接は接合せず推定口径も異なるが、少し凹線気味に窪む口縁部ややや膨らんだ肩部などの特徴がよく似ていて、同一個体の可能性が高い土器である。ただ、内面の色調は異なる。

ＳＡ10（第25図）は、遺物が全体的に見られ、これらは浮いた状態のものが多い。主柱穴周辺にやや集中している。そのうち土器では、第26図73が主柱穴の北西側に出土、75・76などの丹塗り土器片は南～南西側に出土している。丹塗りの土器はＳＡ10だけで破片のみ９点出土している。石器のうち計測表の44～46は北東側に、47は主柱穴の西側に出土している。このうち45のみ浮いた状態で、ほかは床面直上に出土している。炭化材が主柱穴を中心に南西側と南東側に見られるが、これらは床面直上の遺物の上に覆いかぶさった状態で検出された。埋土中には細かな炭化物を多く含んでいる。

ＳＡ11（第25図）は貼床が４～８cmと比較的厚く作られている。遺物は主柱穴間の中央付近に出土した。殆ど浮いた状態で中央部分がやや低くなる。このうち第26図77・78の甕形土器は同じく中央付近で浮いた状態で出土している。79は、東側主柱穴の北西で出土。ＳＡ10の北西壁際出土の小片と接合する。85は中央付近出土である。

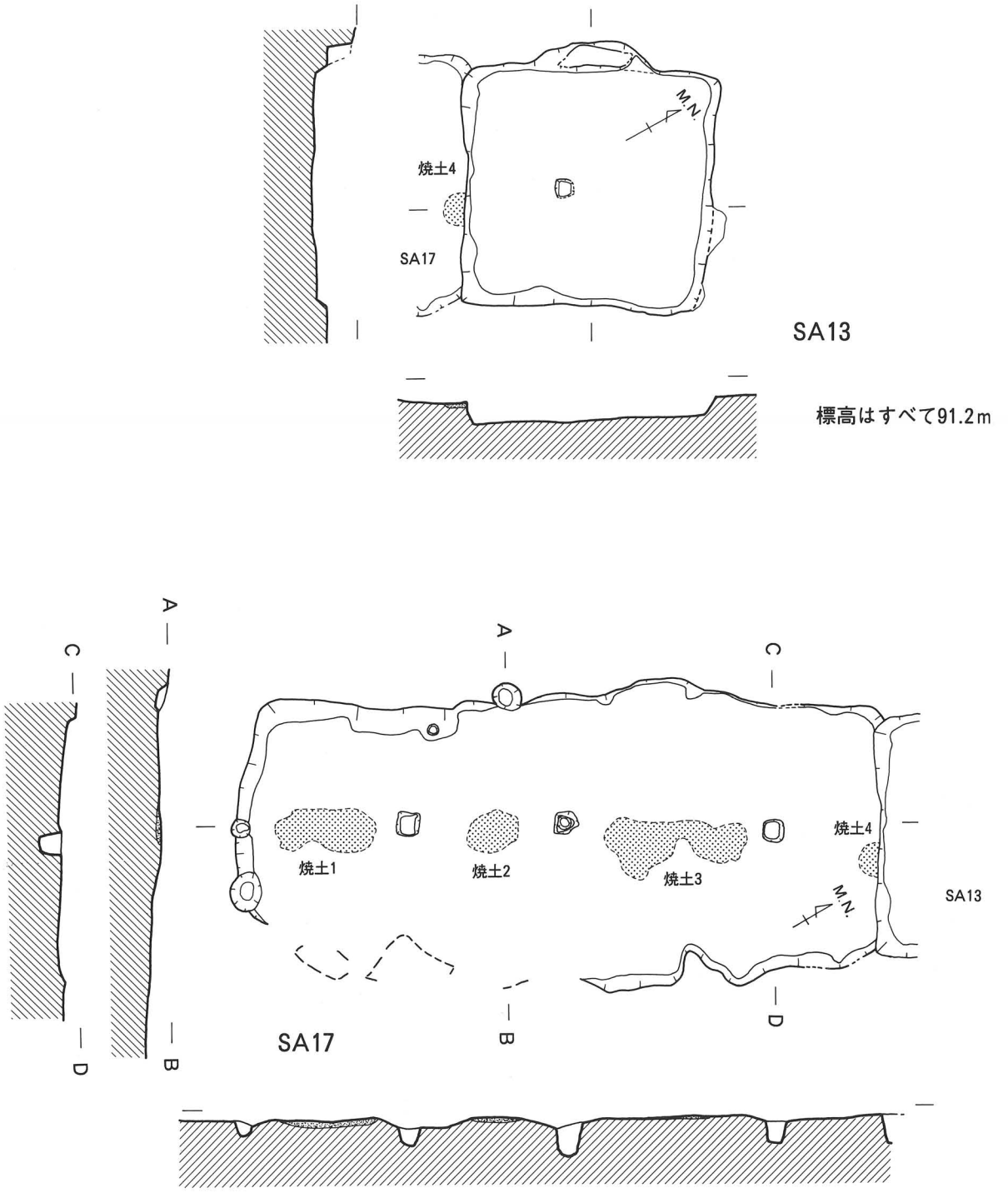
ＳＡ12（第25図）は、ＳＡ８に似て通路の付いた土坑を付属させている様な構造である。異なる点は、住居の角から通路を作ること、通路も長方形土坑の床面も住居の床面とほぼ同じ高さであること等で、長方形住居に大きな間仕切り壁が掘り残されている様にも見えるが、通路がやや屈折していることと土坑の長軸がやや短いことから付属させていると見たい。土坑は2.0×1.1mの規模である。ちなみに主柱穴の軸線上での土坑まで入れた長軸は４ｍを測る。土坑の南側でこの軸線上近く支柱かと思われる小ピットが見られる。中央ピットは77×69cmで深さ61cmを測る。遺物は少なく、小片が浮いた状態で出土している。

ＳＡ13とＳＡ17は隣接している（第27図)。検出時には、長い長方形状に黒っぽい埋土が見られ、その南西側の中央部に焼土が飛び飛びに並んでいるのが確認された。この埋土を除去したところ、ＳＡ13のみ竪穴状に深さがあり、ＳＡ17としたところはごく浅く、中央部の焼土列の間に柱穴列が確認された。ＳＡ13の埋土は、床面のうえに暗褐色の固い層が堆積し、その上面に径40～80cmの範囲で４カ所の焼土が見られた。この上には暗褐色土混じりの黒色砂質土が覆い、その中央部上層のみ黒色シルトのきめ



第26図　椎屋形第１遺跡Ａ地区　ＳＡ８～11出土土器実測図

8号　58～63、9号　64～72
10号　73～76、11号　77～78



第27図　椎屋形第１遺跡Ａ地区　ＳＡ13、17実測図

細かな土が堆積していた。このＳＡ13の埋土の上部にも焼土が１カ所あったが、ＳＡ17の焼土とは並んでいない。このことは、ＳＡ13の埋没過程のある時期その面を使用して火を用い、さらに上部まで埋没したとき再び火を用いたことがあったと言うことで、それはＳＡ17に焼土列ができた時期とは時期差があったとも思える。ＳＡ17はＳＡ13の規模の住居が横に次々に続けて営まれて行った様な形状に思える。

ＳＡ13の遺物量は少なく、小片が全体に散乱した状態で出土している。ＳＡ17の遺物は、北東側のＳＡ13に近い方に片寄って分布している。これらは床面近くで出土しているが、なかでも第29図101は、焼土３付近からその北西側壁際付近にかけて集中して出土している。また、この焼土３からは多くの炭化した木の実が出土している。木の実は分析の結果が後に掲載してあるので参照されたい。

ＳＡ15・16は切り合って検出された（第28図）。土層断面からは、ＳＡ15とＳＡ16の境にＳＡ15の壁の上部の立ち上がりは確認できなかった。また、ＳＡ15の壁際の埋土とＳＡ16の壁際の埋土に違いが見いだせず、新旧決しがたい。ただ、ＳＡ16に見られる貼床がＳＡ15側の埋土の途中に確認できなかったことから、ＳＡ15の方がＳＡ16を切っている可能性がある。遺物は、取り上げの際に切り合い関係がよく分からなかったため、ＳＡ15・16として取り上げたが、殆どはＳＡ15の範囲内で出土している。土器の第29図95・96は、ＳＡ16のピット内から出土したものである。93の瀬戸内系凹線文土器片は一括取り上げの中にあった。94の鉢形土器は、ＳＡ15の西壁際、ＳＡ16との境付近を中心に出土した。また、石器の56台石としたものは、ＳＡ15の床面中央に据えられていたもので、わずかに磨面と黒色の付着物が見られる。

ＳＡ18・19は、ＳＡ18の一部をＳＡ19が切った状態で検出された。それぞれ似た構造であり、住居というより長方形の土坑が短い通路で連結されたもの、もしくは間仕切り壁が掘り残された長方形竪穴建物といった構造である。大小の土坑の埋土に差異はなく、同時期のものである。ＳＡ12に似てそれぞれの床面の高さは同じである。ＳＡ19はＳＡ18と角を接する状態で、ＳＡ18からＳＡ19へ降りる階段状の固く踏み締められた様な土盛りが見られた。ＳＡ19には階段を降りた右側の壁際に焼土塊があり、壁面まで焼けた状態であった。また、階段の正面には６個の縦横に並ぶ小ピットとややずれた位置に２個の若干大きめの小ピットが見られた。調理施設的な建物を連想させる状況である。

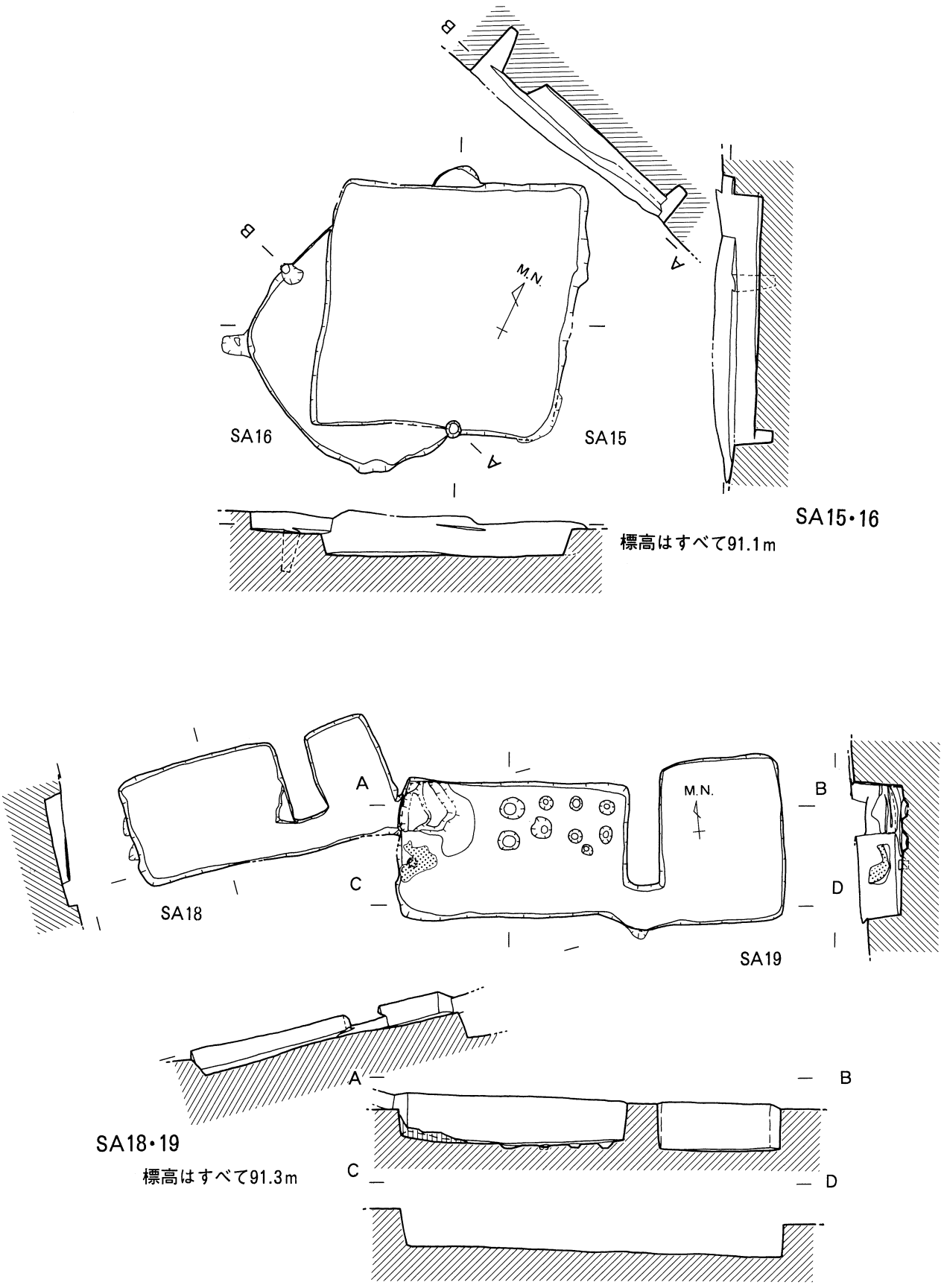
遺物は、ＳＡ18の場合小片が少量、小さい土坑の方にも数点出土した。ＳＡ19は、やはり小片が焼土付近にやや集中し、その東側のピットから南側にかけて出土した。焼土付近の土器は張り付いているが、ほかは浮いた状態である。小さい土坑の方からは小片が３点出土､そのうち西壁際で第31図104が出土した。

（３）周溝状遺構（ＳＬ、第31図）

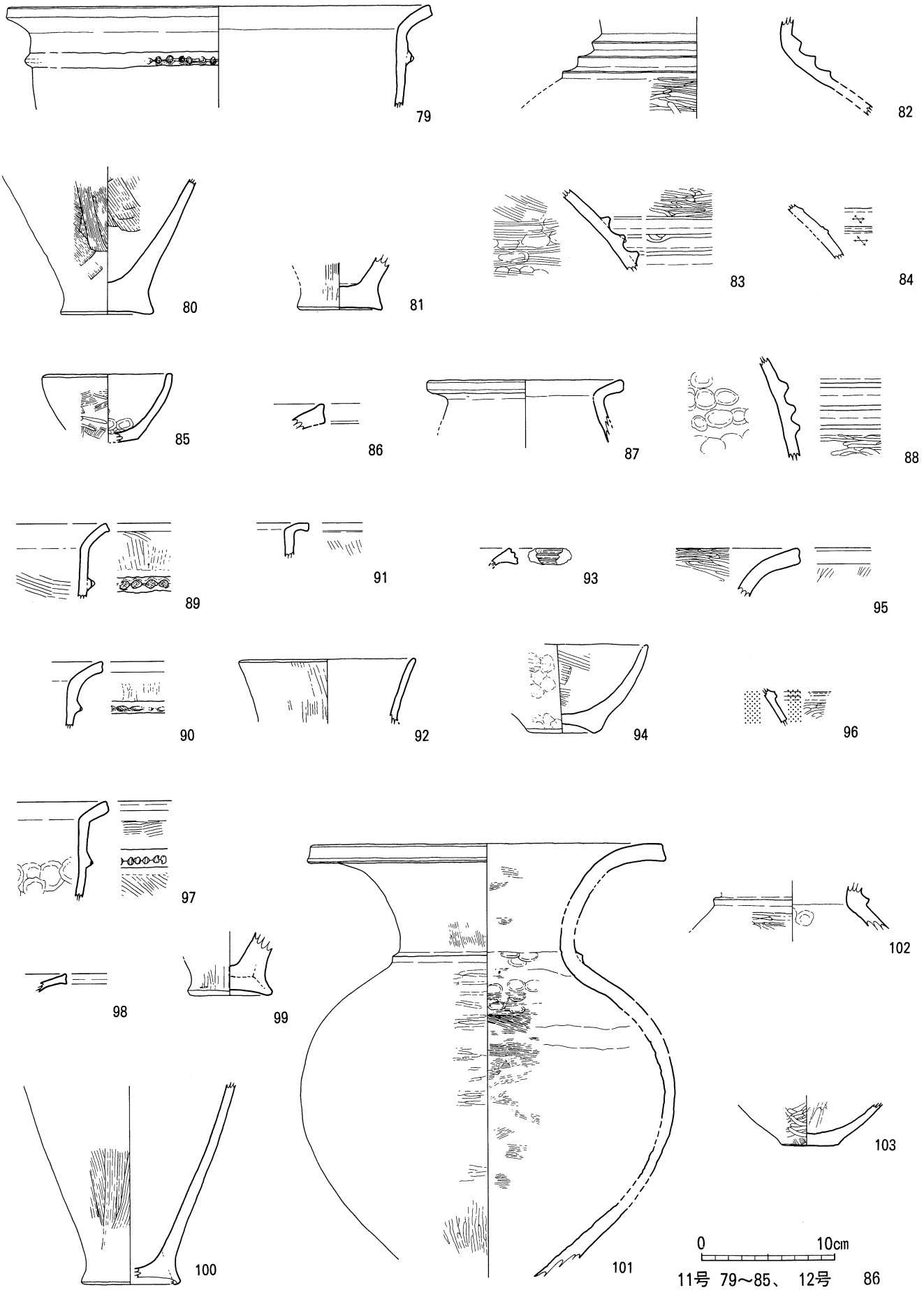
Ａ地区の南西の外れた位置にトレンチャーで筋状に攪乱された状態で検出された。四角っぽい楕円形といった形状である。長軸はほぼ東西方向を向き、長径6.05m、短径はトレンチャーに切られて攪乱されているが、推定6.1m程と思われる。東側の周溝内にピットが１基検出されている。検出面がアカホヤ層で、上部を耕作により攪乱されていたので溝の深さは浅い。遺物は少なく、第30図110等の甕形土器片が出土している。

（４）土坑（ＳＣ）

Ａ地区ではＳＡ18等土坑としてもよい様な竪穴が検出されているが、さらに小規模の竪穴と墓壙と思

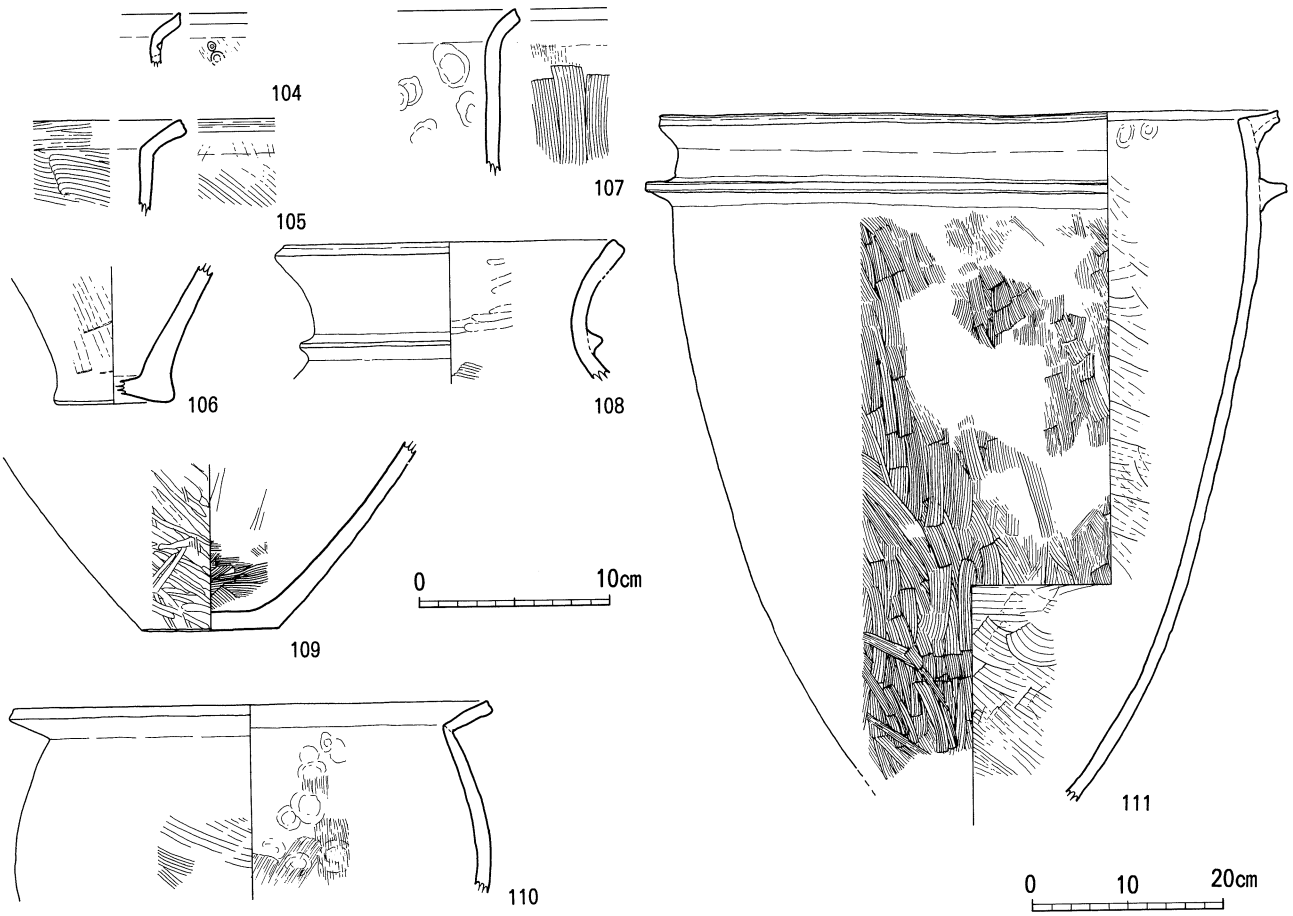


第28図　椎屋形第１遺跡Ａ地区　　SA15・16、18・19実測図

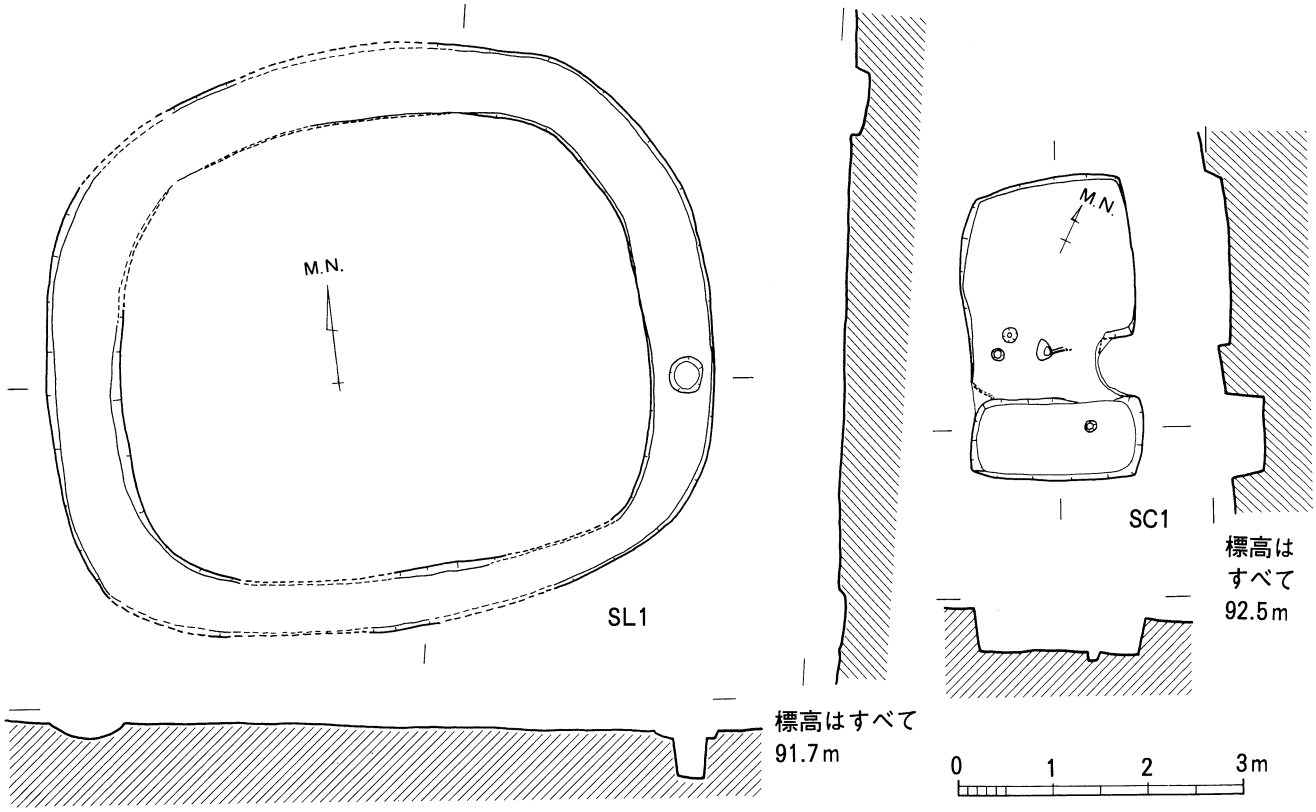


第29図　椎屋形第１遺跡Ａ地区　ＳＡ11～13、15～17出土土器実測図

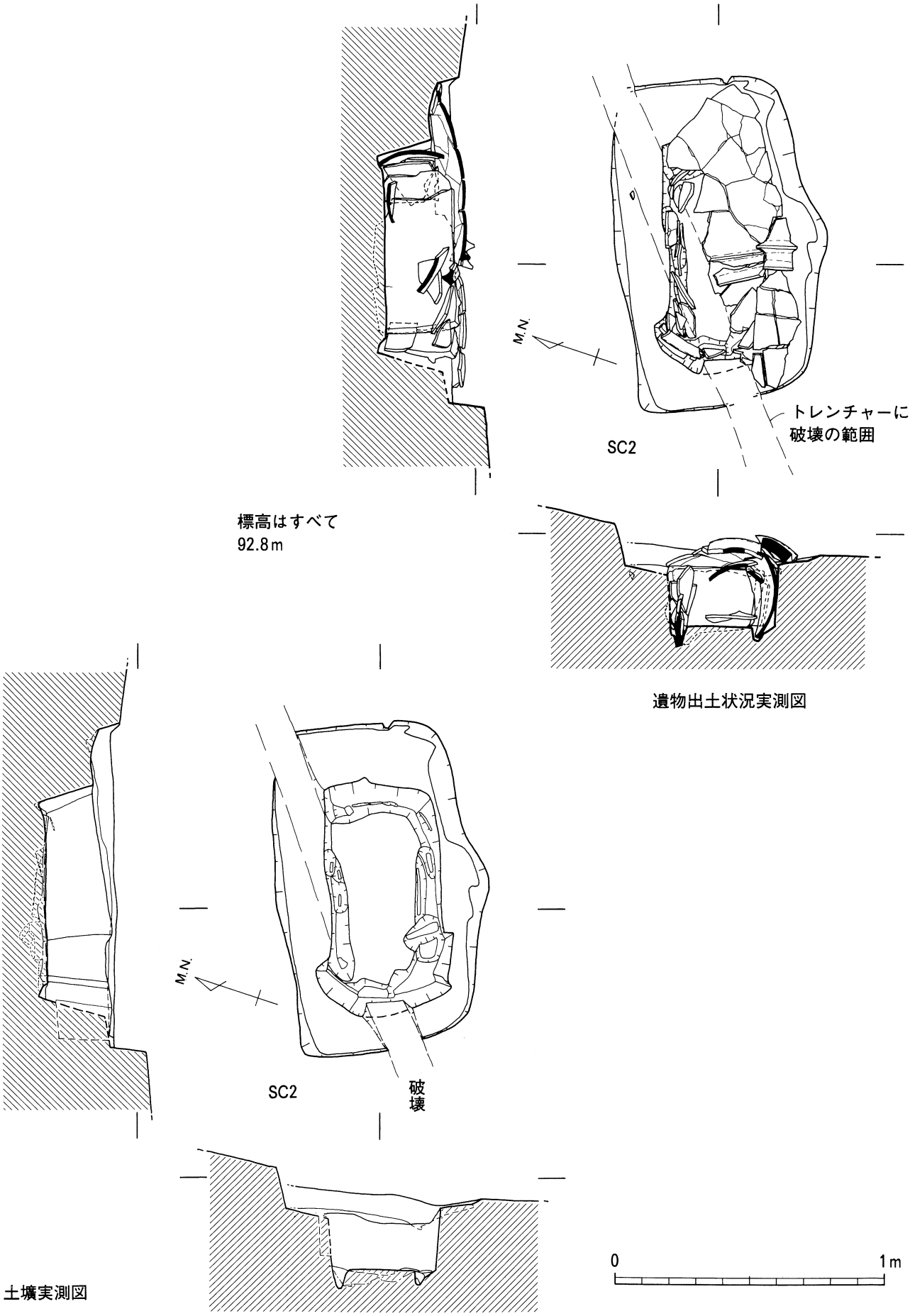
11号 79～85、 12号 86
13号 87～88、 15・16号 89～94
16号 95～96、 17号 97～103



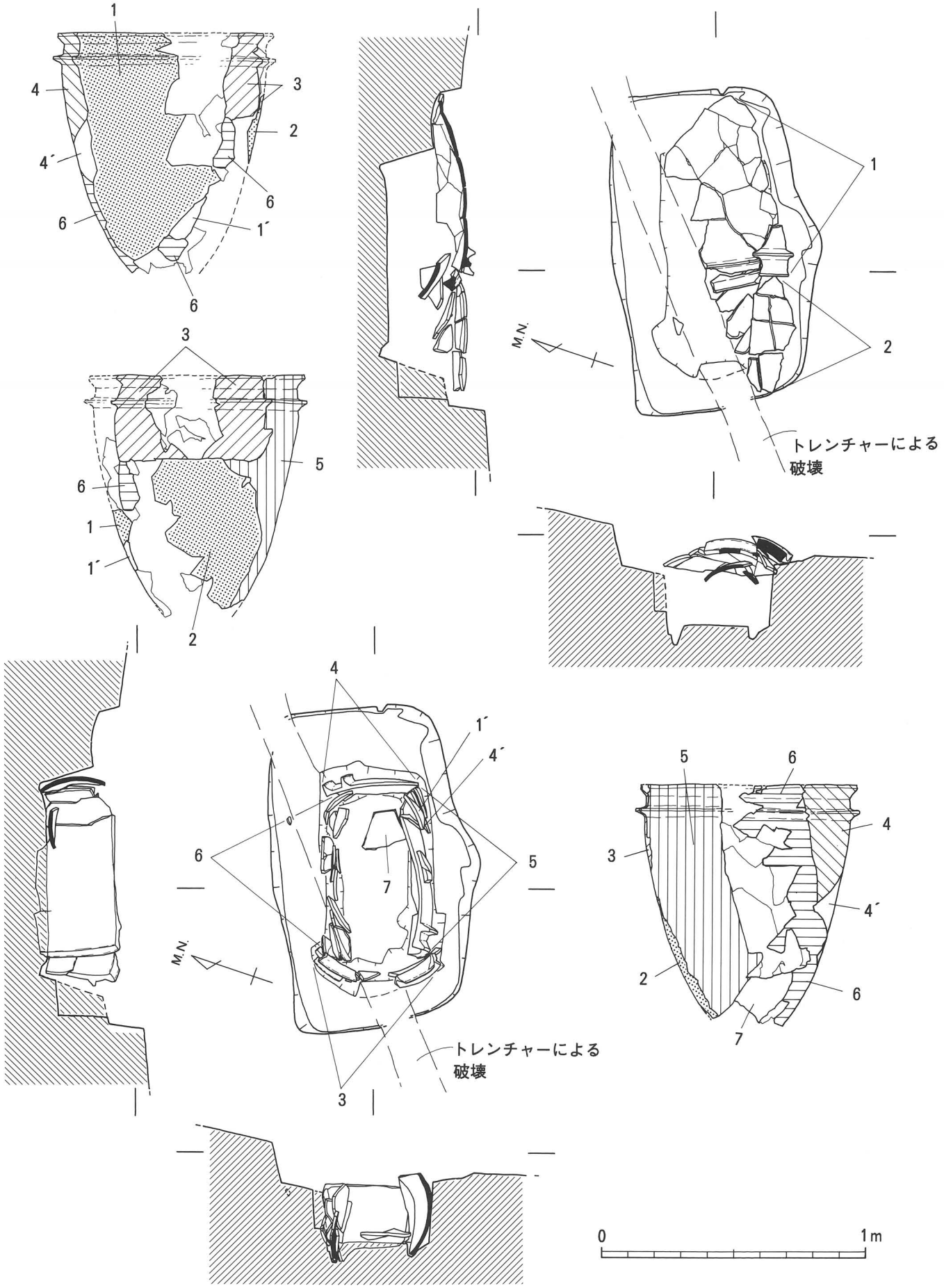
第30図　椎屋形第１遺跡Ａ地区　　SA19、SL1、SC2 出土土器実測図　　19号　104～109
SC2　110
SL1　111



第31図　椎屋形第１遺跡Ａ地区　　SLI、SCI実測図



第32図　椎屋形第１遺跡Ａ地区　　ＳＣ２実測図



第33図　椎屋形第１遺跡Ａ地区　　ＳＣ２土器片利用部位状況図

われるものを土坑として報告する。

ＳＣ１（第31図）は、ＳＡ４の東側で検出された。周溝状遺構やＳＣ２と異なり、住居跡群に近接して営まれている。3.2m×1.8mの長方形を呈する。土層観察用のベルトを除去する際に埋土を見極められず、東側の壁の一部が内部へ突出する箇所の西側部分の形状が確認できなかった。当初の形状は、間仕切り壁のようにある程度内側へ飛び出した形で掘り残されていたものか。南側の壁際は、北側の床面より30cm程深くなった土坑となる。遺物は殆どない。

ＳＣ２（第32・33図）は、Ａ地区の西側の外れた位置に１基だけ検出された。ちょうどトレンチャー耕作の端の一筋が床面近くまで破壊しており、畑の表面に遺物の一部が出土していた。遺構は県内では例を見ないものであるが、二段掘り土壙に箱式石棺墓の石を第30図111の大甕の破片に替えて組み合わせたものであるといえよう。その組み合わせ部位は第33図を参照されたい。西側の小口のみ口縁部を上向きに据えている。これらの土器片の固定にはアカホヤの２～３cm前後のブロックを中心に黒色土等を充填している。規模は、土壙が上段で122cm×70cm、深さ10～15cm、下段は推定85cm×42cm、深さ約20cmである。箱式棺の蓋には２個の大きな破片を用いているが、合わせた長さが113cm、幅はトレンチャーで破壊されていて不明、土器棺部分の内法は78cm×30cm、高さ約30cmを測る。床面はそのまま自然層になる。この大甕は底部が見られず、接合復元するとトレンチャーの破壊箇所のみ破片が失われている。

（５）出土土器

弥生土器については、県内の土器編年資料の充実をはかるためにも可能な限り図化に努めた。ここでは各遺構の土器を一括して、各器種毎に形式分類を行うこととする。

甕形土器

口縁部等の特徴により７類に分類した。

Ⅰ類　台形状の突帯を貼り付けた逆Ｌ字状口縁のもの（53）。口縁部はほぼ水平で、端部にわずかな窪みが見られる。胴部に突帯は付かない。

Ⅱ類　突帯を貼り付けた逆Ｌ字状口縁であるが、端部がやや立ち上がるもの（64）。端部にわずかな窪みが見られる。胴部には三角状突帯が付けられる。

Ⅲ類　口縁部がくの字状になり、口縁直下に一条の刻目突帯が付くもの。端部は上方へわずかに立ち上がり、口唇が浅く窪む。次の３類に細分する。

ａ　口縁部の屈曲が強いもの（１、２、25、40、78、97）

ｂ　口縁部の屈曲がやや弱いもの（３、26、49、51、55、56、58、67、77、79、89）

ｃ　口縁部の屈曲が弱く外反するもの（４、27、44、90）

このⅢ類の胴部片と思われるもの（10、30、31、32、45、ＳＢ６の第17図３）

Ⅳ類　Ⅲ類同様口縁部がくの字状になり端部が上方へわずかに立つが口縁直下に突帯は見られないもの（５、50、65、107、ＳＢ６の第17図１）。口唇部にわずかな窪みを有するものもある。

このⅣ類の胴部片と思われるもの（46）

Ⅴ類　小型の甕で、胴部が膨らみをもたないまま口縁から直線的に底部へ至るもの。次の２類に細分する。

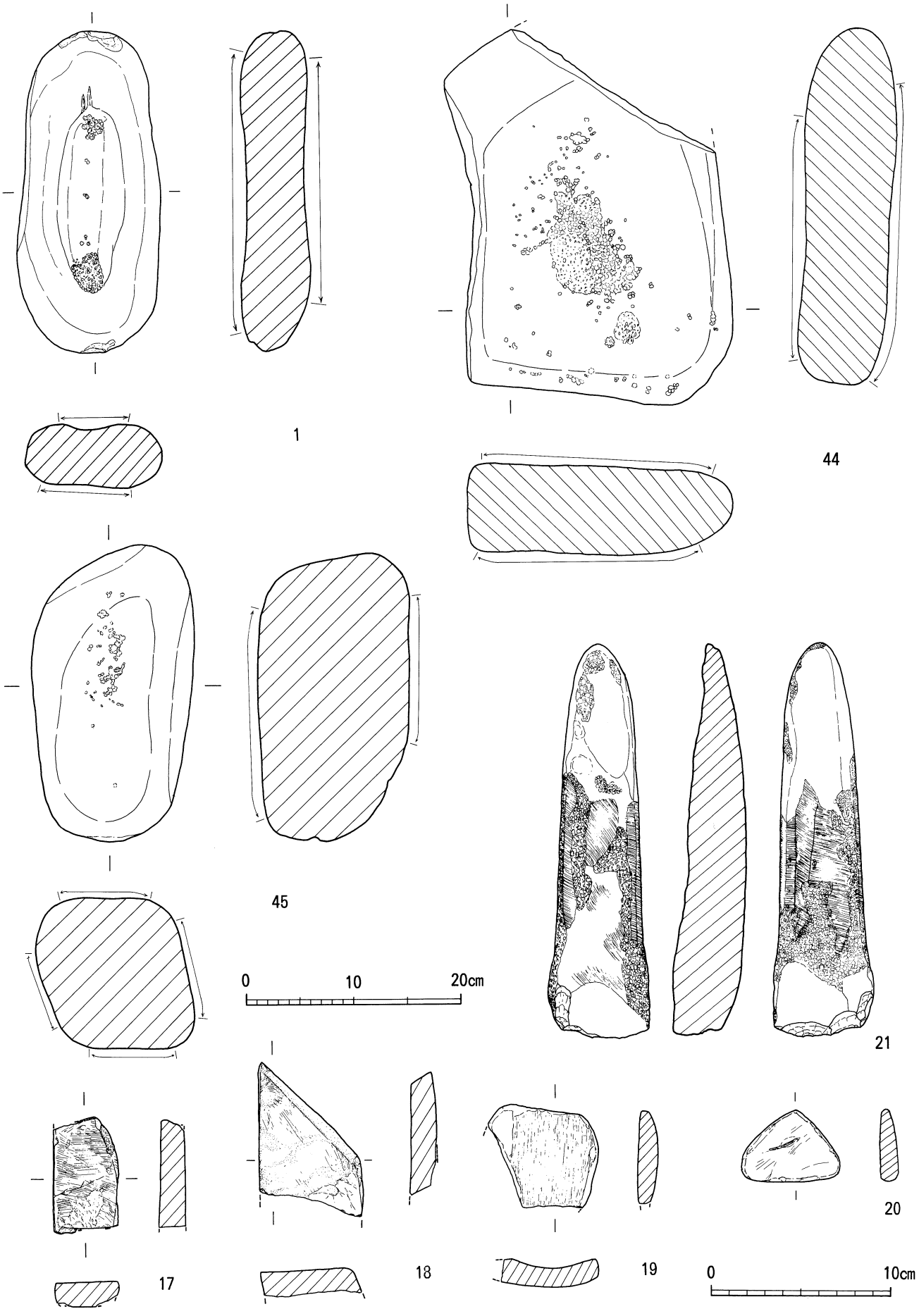
ａ　口縁部が屈曲し水平よりやや起きるもの（６、７）

表６　椎屋形第１遺跡Ａ地区　弥生土器観察表（１）

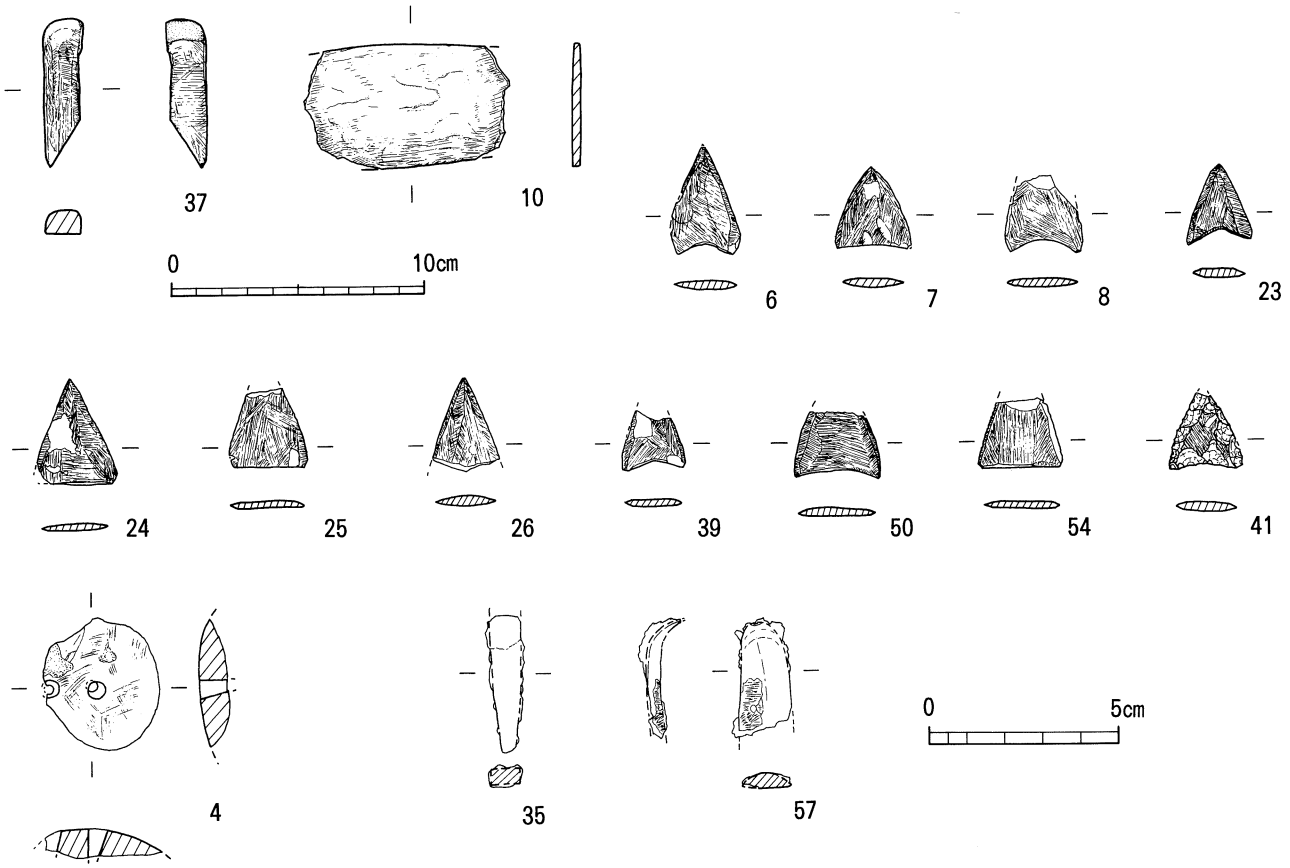
図番号	出土遺構	器種	器面調整	色調		胎土中の岩片・鉱物粒等の色	備考
			外面／内面（上から順に）	外面	内面		
第17図1	SB６周辺溝	甕	ヨコナデ、ハケメ／ナデ、ヨコナデ	灰白	浅黄	赤褐・黒褐・透明・白	内外面に炭化物
〃2	〃	〃	ヨコナデ／ヨコナデ	にぶい黄橙	にぶい橙	軟質赤褐・暗褐・黒透明・白・黒	口縁部内面にスス、器壁は薄い
〃3	〃	〃	突帯の上下ヨコナデ、下部ハケメ／ヨコ・ナナメナデ	にぶい黄橙	橙	軟質赤褐・暗褐・灰白・透明・黒	刻目にハケメ原体痕、外面スス
第19図1	ＳＡ１	〃	ヨコナデ、ハケメ／ヨコナデ、ハケメ、ナデ	淡黄・黄橙	にぶい橙・浅黄橙	黒褐・褐	刻目にハケメ原体痕、外面スス、推定口径29.7
2	〃	〃	ヨコナデ、ハケメ／ヨコ・タテナデ、一部ハケメ残存	橙	橙	赤褐・褐・灰・乳白・透明・黒	外面全体スス、推定口径28.4、外面風化顕著
3	〃	〃	ヨコナデ、ハケメ／ヨコナデ、一部にハケメ	にぶい橙	にぶい橙	暗赤褐・灰褐・透明	外面全体スス、ごく低い突帯、推定口径29.3
4	〃	〃	ヨコナデ、ナデ、一部ハケメ残存／ヨコナデ、一部ハケメ残存	浅黄橙	浅黄橙	褐・乳白・黒	外面全体スス、内面下部炭化物、口径28.5
5	〃	〃	ヨコナデ、ハケメ／ヨコナデ、ハケメ、ナデ	浅黄橙・橙	黄橙・黒褐	赤褐・灰・白・黒・透明	外面上部スス、外面二次焼成による風化、推定口径21.8
6	〃	〃	ヨコナデ、ハケメ／ナデ、一部ハケメ	黄橙・明黄褐・橙	灰黄・黄橙	灰黒・白	外面全体スス、推定口径19.3、器高18.5、推定底径5.3
7	〃	〃	ヨコナデ、一部ハケメ残存、タテナデ？／ナデ？、一部ハケメ？	赤・橙・褐	橙	灰・赤褐・乳白・透明・黒	内外面風化顕著、口径15.6
8	〃	〃	ヨコナデ／ヨコナデ	橙	橙	灰・薄茶・赤褐・黒・白	外面全体スス
9	〃	〃	ヨコナデ／ヨコナデ	橙	橙	黒・褐・乳白・透明	
10	〃	〃	ヨコナデ、ハケメ／ヨコナデ、ハケメ	浅黄橙	浅黄橙	黒・褐・乳白・金	刻目にハケメ原体痕、外面スス、図１と同一個体の可能性あり
11	〃	〃	ヨコナデ、ハケメ？／ヨコナデ、ナデ、ハケメ	灰白	浅黄橙・明褐灰	褐・乳白	外面全体スス、下部風化顕著、刻目にハケメ原体痕、推定口径10.0
12	〃	〃	ヨコナデ／一部ハケメ残存	橙	橙	褐灰・黒・透明	内面風化顕著
13	〃	〃	ヨコナデ、ハケメ／ナデ、一部ハケメ、ナナメナデ	浅黄橙	にぶい黄橙	白・黒	外面スス、突帯剥落下ハケメ、内外面風化
14	〃	〃	タテナデ、ヨコナデ、／ナデ	灰黄	黄灰	明褐・灰白・透明	推定底径7.1
15	〃	〃	ヨコナデ、ナデ／不明	浅黄橙	褐灰	褐・透明・黒	内面全体剥離、底径4.9
第21図16	〃	壺	ヨコナデ／ヨコナデ	にぶい橙	褐	褐・乳白	内面全体炭化物
17	〃	〃	ヨコナデ／ヨコナデ	にぶい橙	にぶい橙	赤褐・黒・透明	
18	〃	〃	ヨコナデ？、ミガキ？／ヨコナデ、ハケメ	浅黄橙	浅黄橙	赤褐・灰褐	外面全体風化顕著
19	〃	〃	ミガキ、丁寧なヨコナデ／タテナデ、一部ハケメ残存	橙	橙	乳白・黒	内面下部風化顕著、推定底径9.0
20	〃	〃	ナデ（タテハケの後？）、回転ケズリ？／ヨコナデ、ナナメナデ	褐	にぶい黄褐	灰褐・黒褐	外面スス、底径5.6
21	〃	壺？	ヨコナデ？、一部ハケメ？、ナデ／ナデ	橙	橙	黒・透明	外面全体風化顕著、底径2.7
22	〃	鉢	口唇ヨコヘラナデ／ヨコナデ／ヘラナデ又はミガキ	浅黄橙	橙	赤褐・乳白・黒・透明	外面スス
23	ＳＡ２	甕	ヨコナデ／ヨコナデ	浅黄橙	浅黄橙	赤褐・褐・黒・乳白・透明	
24	〃	壺	ヨコナデ、一部ハケメ／ヨコナデ	橙	灰黄	赤褐・灰・白	
25	ＳＡ３	甕	ヨコナデ、ハケメ／ハケメ、ヨコナデ	橙	浅黄橙・橙	乳白・黒褐	刻目にハケメ原体痕、外面全体スス、内面風化、推定口径26.4
26	〃	〃	ヨコナデ、ハケメ／ヨコナデ、一部ハケメ	にぶい橙	橙	褐・乳白・黒・透明	刻目にハケメ原体痕、外面スス
27	〃	〃	ヨコナデ／ヨコナデ、ハケメ	浅黄橙	黄橙	褐灰・灰白・灰黄	外面下部スス
28	〃	〃	ヨコナデ／ヨコナデ、ハケメ	浅黄橙	にぶい黄橙	灰褐・橙・黒	外面スス、内面炭化物
29	ＳＡ3+11	〃	ヨコナデ、ハケメ／ヨコナデ、ハケメ	橙	橙	赤褐・灰・乳白・黒・透明	外面スス、推定口径11.4
30	ＳＡ３	〃	ハケメ、突帯の上下ヨコナデ／ヨコナデ、ハケメ、ナナメナデ	浅黄橙・黄橙	橙・にぶい黄橙	灰・赤褐・乳白・黒・透明	外面スス、刻目にハケメ原体痕
31	〃	〃	ヨコナデ／ヨコナデ、ハケメ、一部ナナメナデ	橙	黄橙	灰・褐・黒	外面全体スス、刻目にハケメ原体痕
32	〃	〃	ヨコナデ、ナナメナデ／ナナメナデ、一部ハケメ？	浅黄橙	橙	赤褐・灰・黒・透明	外面突帯下スス多、刻目にハケメ原体痕
33	〃	〃	ハケメ、ヨコナデ、／ヨコナデ	黄橙	暗灰黄	茶・灰・黒	外面スス、推定底径7.2
34	〃	壺	ヨコナデ、ハケメ、一部タテナデ／ヨコナデ、ハケメ、ナデ？	にぶい黄橙	灰黄	黒褐・灰・透明・黒	刻目にハケメ原体痕、内面胴部剥離著しい、推定口径17.4
35	〃	〃	ヨコナデ／ヨコナデ	にぶい褐・橙	灰褐	灰・乳白	
36	〃	〃	ヨコナデ／ヨコナデ	橙・にぶい褐	橙	褐・黒・白	
37	〃	〃	ヨコナデ、ナデ、ハケメ、ミガキ／ヨコナデ	橙・浅黄橙	灰白・褐灰・浅黄橙	黒褐・褐・乳白	口唇一部スス、推定口径15.5
38	〃	〃	ミガキ、ヨコナデ？／ナナメナデ	浅黄	にぶい黄橙	黒・灰・白	外面一部風化
39	ＳＡ４	甕	ヨコナデ／ヨコナデ	浅黄橙	にぶい黄橙	赤褐・灰・黒	外面全体スス
40	〃	〃	ヨコナデ／ヨコナデ	にぶい橙	浅黄橙	赤褐・灰褐・灰白	外面全体スス
41	〃	壺	ヨコナデ、一部ヨコハケメ残存／ヨコナデ	浅黄橙	にぶい黄橙	赤褐・灰・乳白・黒・透明	外面全体スス
42	〃	〃	ヨコナデ、ハケメ？／ヨコナデ、ナナメナデ？	橙	橙	黒褐・乳白・黒	推定口径5.2
43	〃	〃	ナデ、ミガキ／ナナメナデ、ハケメ	浅黄	にぶい黄橙	灰・黒	
第23図44	ＳＡ５	甕	ヨコナデ、ハケメ／ヨコナデ、強いタテナデ	橙	橙	灰・赤褐・黒・透明	外面全体スス、刻目にハケメ原体痕、推定口径24.8
45	〃	〃	ヨコナデ、ハケメ／ハケメ	橙	灰褐	灰・黒・乳白・透明	外面スス
46	〃	〃	ハケメ、ヨコナデ／ヨコナデ	浅黄橙	浅黄橙	赤褐・灰・黒・乳白・透明	外面スス
47	〃	〃	ハケメ、ヨコナデ／ハケメ、ヨコナデ	浅黄	黒褐	灰黄・赤褐・黒	内面全体炭化物多、底径7.1
48	〃	壺	口唇ナデ？／ヨコナデ？、タテナデ又はハケメ？／ヨコナデ？タテナデ？	浅黄橙	浅黄橙	赤褐・灰・黒・乳白・透明	内外面風化顕著、推定口径11.2
49	ＳＡ６＋８	甕	ヨコナデ、ハケメ、指押さえ／ナデ？ハケメ、指頭圧痕	にぶい橙・にぶい黄橙	にぶい黄橙・褐灰	褐・灰・茶・黒・透明	内外面全体風化顕著、外面スス、刻目にハケメ原体痕、口径28.6、器高35.8、推定底径6.3
50	ＳＡ６・14	〃	口縁・底部、ヨコナデ、ナデ、他不明一部ハケメ痕／ナデ？ヨコナデ、一部ハケメ残存	にぶい橙	にぶい橙・にぶい黄橙	灰・褐・橙・黒・透明	外面スス、内外面風化、推定口径14.5、器高17.6、底径4.9
51	〃	〃	ヨコナデ、一部ハケメ残存／ヨコナデ、ナナメナデ	灰白	淡黄	赤褐・灰褐・透明	外面スス、刻目にハケメ原体痕
52	〃	〃	ヨコナデ／ヨコナデ	にぶい橙	橙	赤褐・黒・透明	外面スス
53	ＳＡ７	〃	ヨコナデ、ハケメ／ヨコナデ、ハケメ、ナデ？	橙	橙	黒褐・灰白・黒・透明	外面全体スス、内面全体風化顕著、推定口径27.6
54	〃	〃	ハケメ、ナデ／タテナデ、一部ハケメ、ナデ	浅黄橙	にぶい黄橙・灰黄褐	赤褐・灰・黒・乳白・透明	底径5.8

表７　椎屋形第１遺跡Ａ地区　弥生土器観察表（２）

図番号	出土遺構	器種	器面調整	色調		胎土中の岩片・鉱物粒等の色	備考
			外面／内面（上から順に）	外面	内面		
第23図55	ＳＡ７	甕	ヨコナデ、ハケメ／ヨコナデ、ハケメ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	黒褐・灰白・透明・黒	外面スス、刻目にハケメ原体痕
56	〃	〃	ヨコナデ、ハケメ一部残存／ヨコナデ、ナナメナデ？	にぶい黄橙	にぶい橙	茶・灰・黒・透明	外面全体スス、内面風化顕著、刻目にハケメ原体痕
57	〃	〃	ハケメ、ミガキ／ハケメ、一部ミガキ、ナデ？	橙	橙	茶・灰・褐・乳白・黒・透明	内外面一部風化、底径9.1
第26図58	ＳＡ８＋10	〃	ヨコナデ、ハケメ／ヨコナデ、ハケメ	橙	橙	赤褐・灰・灰白・黒	外面スス、刻目にハケメ原体痕、外面全体風化顕著
59	ＳＡ８	〃	ヨコナデ／ヨコナデ	灰白	灰白	透明	
60	〃	壺	ヨコナデ／ヨコナデ	橙	橙	赤褐・灰褐・黒褐・灰白	推定口径21.9
61	〃	〃	ミガキ？、ハケメ？、丁寧なナデ／ミガキ？	橙	黒	褐・茶・灰・黒・白	内面剥離著しい、外面風化顕著、推定底径9.8
62	〃	高坏	ヨコナデ、丁寧なヨコナデ、一部ミガキ／ミガキ？、ヨコナデ	橙	橙	赤褐・黒・乳白・透明	外面スス？、瀬戸内系か
63	〃	〃	ハケメ、ヨコナデ／ケズリ、指頭痕？	淡黄・暗灰黄	黒褐・浅黄	褐・乳白・灰白	推定脚裾径9.8、瀬戸内系
64	ＳＡ９	甕	ヨコナデ／ヨコナデ、ハケメ	浅黄橙	浅黄橙	黄褐・灰褐・灰白・黒・金	外面スス、推定口径25.6
65	〃	〃	ヨコナデ、ハケメ／ヨコナデ、ナナメナデ	浅黄橙・灰黄褐	浅黄橙・にぶい黄橙	赤褐・黒・乳白・透明	外面スス、推定口径21.0
66	〃	〃	ヨコナデ？、ハケメ残存／ヨコナデ？、	橙	にぶい黄橙	茶褐・黒・白・透明	外面全体スス、内外面全体風化顕著
67	〃	〃	ヨコナデ、ハケメ／ヨコナデ、ナナメナデ、一部にハケメ原体工具痕	灰黄	灰黄	茶	外面スス、刻目にハケメ原体痕、口縁部内面にスス
68	〃	不明	タテナデの上に簾文風ミガキ／丁寧なヨコナデ？、ヨコヘラナデ？	黒褐	明黄褐	灰・白・乳白	鋭い刻みの中にハケメ原体痕様の細かな横筋が見られる
69	〃	壺	ヨコナデ／ヨコナデ、ヨコヘラナデ？	黄橙	浅黄橙	赤褐・灰・乳白・黒・透明	内外面風化顕著、推定口径19.1
70	〃	〃	ヨコナデ、ナナメナデ／ヨコナデ、丁寧なヨコナデ	浅黄橙	灰黄	灰褐・黄褐・黒・灰白・透明	内外面全体風化顕著剥離多、推定口径19.1
71	〃	〃	ヨコナデ、ミガキ？、ナデ？、丁寧なナデ？／ヨコナデ？、ナナメナデ？、ミガキ	浅黄橙・にぶい橙	黒褐・灰白	茶・茶褐・灰白・黒	内面全体風化顕著、外面下部剥離多、推定口径15.7、器高21.8、底径6.0
72	〃	〃	ヨコナデ、ナナメナデ？／ヨコナデ？、ミガキ？、ヨコナデ	浅黄橙	浅黄橙	赤褐・褐・灰・乳白・黒・透明	口縁部内面風化顕著、推定口径22.5
73	ＳＡ10	甕	ヨコナデ、ナデ？／ヨコナデ、指頭圧痕	橙	にぶい橙	灰・赤褐・乳白・黒・透明	外面全体剥離風化顕著、口径11.6
74	〃	〃	ハケメ？、ハケメ、ヨコナデ／ヨコナデ、指押さえ	明褐灰・褐灰	にぶい橙	赤褐・灰・黒・乳白	内面炭化物、胴部外面風化顕著、底径7.0
75	〃	壺	ヨコナデ？／ヨコナデ？	橙	橙	褐・白・透明	内外面丹塗り
76	〃	〃	ヨコナデ／ヨコナデ	橙	橙	褐・白・透明	内外面丹塗り
77	ＳＡ11	甕	ヨコナデ、ハケメ／ヨコナデ、ナナメナデ？	浅黄橙	浅黄橙	褐・茶・灰・黒・透明	外面全体スス、推定口径29.2
78	〃	〃	ヨコナデ、ヨコナデ？、ハケメ／ヨコナデ、ハケメ	橙	橙	灰赤・黒・白・透明	内面炭化物、外面スス、外面一部風化顕著、推定口径27.9
第29図79	ＳＡ11＋10	〃	ヨコナデ／ヨコナデ、ナデ？	橙	橙	赤褐・黒褐・黒・透明	外面全体風化顕著、刻目にハケメ原体痕、推定口径31.7
80	ＳＡ11	〃	ハケメ、ヨコナデ、ナデ／ハケメ、ヨコナデ	浅黄橙・黄橙	にぶい黄橙・灰黄褐	赤褐・灰・乳白・黒・透明	外面スス、外面一部風化顕著、内面全体風化顕著、底径7.1
81	〃	〃	ハケメ、ヨコナデ／ヨコナデ？	浅黄橙	黒褐	褐・灰褐・淡黄・透明	底径6.5
82	〃	壺	ヨコナデ、ミガキ、ナデ一部残存／ヨコナデ	にぶい橙	浅黄橙	褐・乳白・黒	内面全体風化顕著
83	〃	〃	ヨコナデ、ミガキ、何か丸いものの押圧痕／ヨコナデ、指押さえ	暗灰黄・橙	にぶい黄橙	黒・白・透明	
84	〃	〃	ミガキ、突帯部ヨコナデ／ヨコナデ？	黒褐	灰褐	赤褐・金	外面全体スス、内面全体風化顕著
85	〃	鉢	ヨコナデ、ハケメ、ミガキ／ヨコナデ、タテナデ、指押さえ	浅黄橙・褐灰	浅黄橙・明褐灰	赤褐・黒・褐・灰・乳白・透明	推定口径9.6、推定器高5.2、推定底径4.6
86	ＳＡ12	壺？	ヨコナデ／ヨコナデ	浅黄橙	にぶい黄橙	褐・灰褐・灰白・金	外面一部剥離
87	ＳＡ13	甕？	ヨコナデ／ヨコナデ	淡赤橙	明褐灰	褐・黒	内面全体剥離顕著、推定口径14.4
88	〃	壺	ヨコナデ、ミガキ／ヨコナデ？、指頭圧痕	暗灰黄	明黄褐	黒・白・透明	内外面全体風化顕著
89	ＳＡ15・16	甕	ヨコナデ、ハケメ／ヨコナデ、ナデ、ハケメ	灰黄	浅黄	茶・灰・黒	外面下部スス、刻目にハケメ原体痕
90	〃	〃	ヨコナデ、一部ハケメ／ヨコナデ	橙	橙	灰・茶・黒・透明	口縁部内外面スス、刻目にハケメ原体痕
91	〃	〃	ヨコナデ、ハケメ？、指押さえ／ヨコナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	茶・黒・白	外面スス
92	〃	壺	ハケメ、ヨコナデ／ヨコナデ	黄橙	浅黄橙	黒・赤褐・透明	推定口径12.8
93	〃	〃	ヨコナデ／ヨコナデ	橙	橙	褐・黒・灰・白	瀬戸内系
94	〃	鉢	ヨコナデ、指頭痕？／ヨコナデ、ハケメ	黄橙	浅黄橙	赤褐・黒・透明	外面スス、器高6.7、底径5.7
95	ＳＡ16	壺	ヨコナデ、ハケメ／ヨコナデ、ミガキ？、ナナメナデ？	黄橙	浅黄橙	灰褐・赤褐・黒褐・黒・金	
96	〃	〃	ミガキ／ヨコナデ	橙	橙	褐・白・透明	外面丹塗り
97	ＳＡ17	甕	口唇ヨコナデ／ハケメ？、ヨコナデ？／ヨコナデ、指頭痕？	黄橙	にぶい黄橙	黒褐・灰白・黒・透明	外面全体スス厚風化顕著
98	〃	〃	口唇ハケメ／ヨコナデ／ヨコナデ	浅黄橙	灰白	黒褐・赤褐・黒	外面スス
99	〃	〃	ナデ？、ハケメ、ヨコナデ、ナデ／ナデ	にぶい橙	褐灰	褐・乳白・黒・透明	外面一部風化、底径6.5
100	〃	〃	ハケメ残存、ヨコナデ／ヨコナデ、ナナメナデ	灰黄褐・にぶい黄橙	にぶい黄橙・黄灰	灰・褐・白・黒・透明	外面スス、内面全体炭化物、外面全体風化、推定底径7.4
101	〃	壺	ヨコナデ、ハケメ、ミガキ／ヨコナデ、ハケメ、指頭痕	赤・にぶい橙	褐灰・にぶい橙	褐・茶・灰・白・黒・透明	内外面風化剥離、口縁部内面スス？、推定口径26.1
102	〃	〃	ヨコナデ、ミガキ／ヨコナデ、ヨコナデ？、指押さえ	にぶい黄橙・にぶい橙・黒褐	黒褐・にぶい褐	赤褐・灰・黒・乳白・透明	
103	〃	〃	ミガキ、ハケメ一部残存、ナデ？／ミガキ	橙・明褐灰・淡橙	褐灰・黒	褐・茶・灰・黒・透明	外面スス一部風化、内面一部剥離、推定底径4,2
第30図104	ＳＡ19	甕	ヨコナデ、タテナデ、ハケメ？／ヨコナデ	橙	橙	茶・灰・黒・透明	外面全体スス、焼成後穿孔及び未貫通孔
105	〃	〃	ヨコナデ、ハケメ／ハケメ、ヨコナデ	にぶい黄橙	灰黄褐	茶褐・灰	
106	〃	〃	ハケメ、ヨコナデ、ナデ／ナナメナデ	灰黄褐	灰黄褐	茶褐・灰	内面炭化物、推定底径6.3
107	〃	〃	ヨコナデ、ハケメ／ヨコナデ、指押さえ、タテナデ	橙	橙	灰・黒	内外面全体風化顕著、外面全体スス厚
108	〃	壺	ヨコナデ？／ミガキ？、ハケメ一部残存	橙・黄橙	橙	黒・灰・乳白	内外面全体風化顕著、推定口径17.3
109	〃	〃	丁寧なナデ、ミガキ一部残存、ハケメ、ナデ／ハケメ、タテナデ？、ヨコナデ？	黄褐・黒	明黄褐・褐灰	褐・茶・灰・黒・透明	推定底径7.3
110	ＳＬ１	甕	ナデ？、ハケメ／ヨコナデ、指押さえ、ハケメ	橙	橙	赤褐・褐・灰白・黒・透明	外面全体口縁部内面風化顕著、推定口径24.8
111	ＳＣ２	〃	ヨコナデ、ハケメ／ヨコナデ、指頭痕、ハケメ	橙・にぶい橙・淡黄・黒	橙・にぶい橙・淡黄・黒	褐・茶・灰・淡黄・乳白・金	口径64.6、残存器高72.5



第34図　椎屋形第１遺跡Ａ地区　　住居跡出土石器実測図



第35図　椎屋形第１遺跡Ａ地区　住居跡出土石器・鉄器実測図

b　屈曲せずわずかに外反するだけのもの（73）

Ⅵ類　口縁部がくの字状に大きく屈曲し、胴部径が口縁部径とほぼ同じくらいに張る（87、110）。

Ⅶ類　口縁部が直立し、直下に刻目突帯を持つ（11、29）。

大甕

Ⅰ類　中窪みの台形状突帯を貼り付け、口縁直下にも台形状突帯を貼り付けたもの（111）。口縁部はやや起きる。

同類の突帯と思われるもの（12）。

甕底部

Ⅰ類　横に張り出さずほぼ直立する。

a　ほぼ平底に近いもの（74）

b　上げ底になるもの（14、33）

Ⅱ類　横に張り出すもの。

a　ほぼ平底になるもの（54、80、81、100）。54は若干厚手の底部である。

b　上げ底になるもの（15、47、99、106）

壺形土器

表８　椎屋形第1遺跡Ａ地区　弥生時代石器計測表

番号	種　別	出土遺構 取上番号	器　長 (cm)	器　幅 (cm)	器　厚 (cm)	重　量 (g)	石　材	備　考
1	石　皿	ＳＡ１－83	29.9	13.5	6.1	4150	砂　岩	
2	磨　石	〃　－147	7.2	5.6	2.9	167.2	〃	
3	砥　石	〃　－105	9.1	6.6	2.4	227.0	緑色岩類	
4	玉	〃　－136	3.5	3.1	0.8	8.0	不　明	
5	〃	〃　－13	3.7	3.0	0.8	4.4	〃	残欠か？
6	磨製石鏃	〃　－119	2.8	1.8	0.2	1.2	緑色岩類	
7	〃	〃　－１	2.2	2.0	0.3	1.2	〃	
8	〃	〃　－146	2.1	2.0	0.2	1.0	〃	欠損
9	〃	〃　一括	1.9	1.2	0.2	0.6	〃	未製品一部研磨痕
10	石庖丁	ＳＡ２－３	8.1	4.9	0.3	21.0	〃	未製品
11	磨製石鏃	〃　－11	2.1	1.2	0.2	0.7	〃	欠損
12	石　皿	ＳＡ３－113	19.2	19.4	4.8	2810.0	砂　岩	
13	凹　石	〃　－65	23.0	7.5	4.8	728.5	〃	
14	〃	〃　－40	9.5	7.4	4.1	410.4	〃	
15	砥　石	〃　－18	10.8	7.7	3.3	349.8	〃	
16	〃	〃　－139	7.9	5.4	1.2	83.7	緑色岩類	
17	〃	〃　－74	6.5	3.7	1.5	59.1	〃	
18	〃	〃　－89	8.6	5.9	1.6	78.3	〃	
19	〃	〃－ＮＷ	5.9	6.2	1.4	52.7	砂　岩	
20	〃	〃－ＮＷ	4.0	5.5	1.0	21.9	不　明	
21	不明石器	〃　－177	21.9	5.7	4.3	580.3	砂　岩	工具か？敲打と研磨で成形
22	〃	〃　－184	11.9	4.8	3.8	318.5	〃	
23	磨製石鏃	〃　－155	2.1	1.8	0.3	0.9	緑色岩類	
24	〃	〃　－α	2.8	2.1	0.2	1.3	〃	
25	〃	〃　－82	2.1	2.1	0.2	1.2	〃	欠損
26	〃	〃　－１	2.5	1.8	0.2	1.0	〃	〃
27	〃	〃　－31	2.7	1.3	0.3	1.1	〃	〃
28	〃	〃　－93	1.9	1.5	0.2	0.8	〃	未製品　研磨痕あり
29	〃	〃　－189	2.1	1.8	0.3	1.7	〃	〃　〃
30	〃	〃　－120	3.2	2.0	0.4	2.4	〃	〃　〃
31	〃	〃　－120	2.8	1.5	0.4	1.0	〃	〃　〃
32	〃	〃　－108	2.3	1.7	0.3	0.9	〃	〃
33	剥　片	〃　－96	2.9	2.6	0.4	2.0	〃	石鏃の石材か？
34	不明石器	〃　－43	2.6	0.9	0.4	1.0	〃	研磨痕のある石器
35	鉄鏃片	〃－ＮＥ	3.7	1.0	1.1	3.5	－	茎部か？
36	凹　石	ＳＡ４－16	14.7	11.0	2.6	621.0	砂　岩	
37	砥　石	〃　－４	5.9	1.6	1.1	13.8	緑色岩類	
38	不明鉄片	〃　－47	3.6	2.5	1.1	9.1	－	錆化著しい
39	磨製石鏃	ＳＡ５－50	1.6	1.7	0.2	0.6	緑色岩類	欠損
40	石　皿	ＳＡ７－19	37.4	20.8	7.4	7100	砂　岩	〃
41	局部磨製石鏃	ＳＡ８－６	1.9	1.9	0.3	1.0	流紋岩	
42	敲　石	ＳＡ９－５	8.0	8.3	6.5	693.0	砂　岩	
43	〃	〃　－35	17.5	8.3	5.8	1176.0	〃	
44	石　皿	ＳＡ10－４	35.1	31.4	10.8	12000	〃	
45	〃	〃　－11	27.6	15.1	14.1	9000	〃	
46	〃	〃　－６	22.7	16.7	6.9	2920.0	〃	
47	台　石	〃　－57	34.0	39.5	14.0	19600	〃	
48	凹　石	〃　－55	13.4	18.6	5.6	2078.0	〃	
49	敲　石	〃　－23	15.6	6.9	4.3	701.8	〃	
50	磨製石鏃	〃　一括	2.1	2.5	0.2	1.3	緑色岩類	欠損
51	不明石器	〃　－58	4.1	2.8	0.5	5.5	〃	研磨痕あり（磨製石鏃もしくは石庖丁片）
52	凹　石	ＳＡ11－１	10.0	10.4	6.9	980.7	砂　岩	
53	敲　石	ＳＡ13一括	7.2	5.5	3.3	183.7	〃	
54	磨製石鏃	〃　一括	1.8	2.2	0.1	1.1	緑色岩類	欠損
55	剥　片	〃　一括	2.9	2.1	0.2	1.4	〃	石鏃の石材か？
56	台　石	ＳＡ15床中央	27.2	40.0	9.5	14000	砂　岩	若干の磨面あり、黒色付着物あり
57	鉄器片	ＳＡ15･16一括	3.0	1.4	0.6	2.2	－	鈍か？

Ⅰ類　鋤先状を呈すると思われるもの（16、35、36）。

Ⅱ類　口縁部が大きく外反し垂れ下がるもの（37）。南九州系、鹿児島などに多く見られる。

これらⅠ～Ⅱ類の胴部～頸部と思われるもの（18、38、82、83、88）。

Ⅲ類　長い口縁部が朝顔状に大きく開くもの。次の2類に細分する。

a　口縁部が水平で、頸部に一条の三角突帯を持つ（101）

b　口縁端部がわずかに立ち、口唇が軽く窪むもの（41、60、72、95）

Ⅳ類　屈曲し外傾する短い口縁部を持ち、胴部中央に一条の刻目突帯が見られるもの（34）。

器壁が薄く成形され、突帯やプロポーション等から中九州系の土器と思われる。

Ⅴ類　強く外反する短い口縁部を持つ。2類に細分する。

a　頸部に一条の三角突帯を持つ（108）

b　突帯を持たない（48）

Ⅵ類　屈曲し外傾する短い口縁部を持つ。口縁端部は上方へわずかに立ちあがり、口唇に窪みが見られる。2類に細分する。

a　肩部に一条の突帯を有する（69）

b　突帯を持たない（71）

Ⅶ類　直線的に外傾する口縁部を持つ（92）。

Ⅷ類　長頸壺の口縁で、口縁直下に一条の三角突帯がめぐるもの（42）。

Ⅸ類　三角形に肥厚した口唇部に三条の凹線文が施される（93）。

Ⅹ類　小さなM字状突帯を有する北九州系の壺で、丹塗りの75、76、96と褐色を呈しミガキの見られる84がある。

鉢形土器

殆ど出土していない。大きくは1類のみ。

Ⅰ類　小型の椀状のもの（22、85、94）。

高坏

高坏も殆ど出土していないが、2類に分類できる。

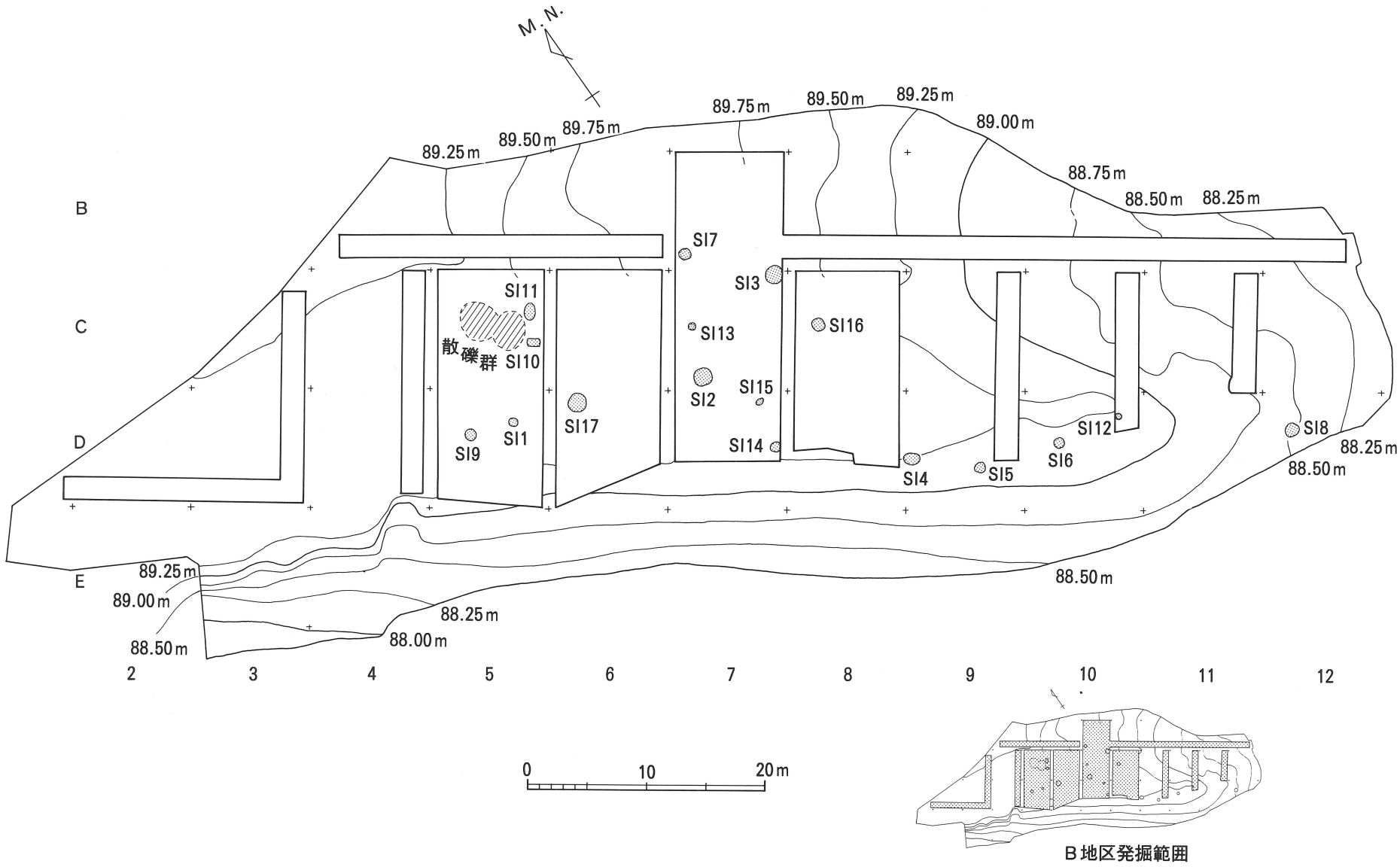
Ⅰ類　三角透かしと凹線文の脚部を持つ（63）。68は一条の沈線をまたいで縦方向の刺突が施される土器であるが、刺突の中にハケ目原体を刺突した様な横筋があり、宮崎市元村遺跡出土の瀬戸内系高坏の坏部に見られる刺突に近いものと思われ、あるいはこの類の坏部の可能性がある。

Ⅱ類　ミガキの丁寧な器面調整を施された断面三角形の脚裾部を持つ（62）。

以上、4器種について、最も多く出土した甕形土器を7類に、主に土坑出土の大甕1類、甕底部2類、量的には少ないがバラエティーに富む壺形土器を9類に、量の少ない鉢形土器1類、殆ど出土しなかった高坏を2類に分類した。

3　B地区の調査

1　縄文時代の遺構と遺物



第36図　椎屋形第1遺跡Ｂ地区　縄文時代早期遺構分布図

表9　椎屋形第1遺跡B地区　集石遺構一覧表

遺構番号	集石遺構の礫の範囲（cm）	土坑の有無と状況	礫の集積状況	焼石の状況	配石の有無と状況	炭化物の有無と状況	黒変礫の有無	焼土の有無	備考
SI1	85×80	なし	ほぼ水平に集積	殆ど砂岩、数点凝灰岩、赤変し割れたものが多い、河原石の原形のままのものもある、10cm大が多い	なし	礫の下で検出	少量	なし	トレンチャーで寸断
SI2	145×160	略円形の皿状深さ15cm	浅い皿状に集積	砂岩が多く凝灰岩その他が10点程混入、赤変し割れているが原形のままのものも多い、10～15cm大が多い	なし	土坑埋土中	不明	なし	トレンチャーで寸断
SI3	150×140	浅い皿状深さ10cm前後	浅い皿状に集積	殆ど砂岩、数点凝灰岩、赤変しいずれも割れた状態、10cm以下が多い	なし	土坑埋土中で検出（年代測定）	なし	なし	トレンチャーで寸断、Gak7930±120y.B.P.
SI4	130×90	なし	水平に集積	殆ど砂岩、数点凝灰岩、殆ど赤変し小さく割れている、変色のない原形のものが数点、5～15cm大	なし	礫下に少量	少量	なし	尾根上に位置する
SI5	おおよそ90×90	なし	水平に集積	砂岩の割れた礫が20個程度	なし	礫下に少量	なし	なし	図面記録なし
SI6	90×85	なし	水平に集積	河原石の原形を残すものが多い、100個程度、5～15cm大	なし	なし	少量	なし	尾根上に位置、入戸火砕流（シラス）直上
SI7	100×95＋α	浅い皿状深さ10cm前後	浅い皿状に集積	殆ど砂岩、数点凝灰岩、割れたものが多い、原形を残すものもある、5～15cm大	なし	土坑埋土中検出（年代測定）	少量	なし	トレンチャーで寸断、Gak8160±120y.B.P.
SI8	125×105	なし	水平に集積	砂岩、赤変し割れたものが多い、原形を保つもの少ない、15cm以上のもの5～6点、殆ど3cm以下	なし	なし	あり	なし	尾根上に位置する
SI9	100×80	浅い皿状、不明瞭径60cm程	若干レンズ状に集積	赤変しヒビ割れた原形の河原石や割れた礫	なし	土坑埋土中で検出	不明	なし	トレンチャーで寸断、図面記録なし
SI10	100×70＋α	椀状深さ15cm程	レンズ状に集積	殆ど砂岩、1点凝灰岩、赤変し割れている、原形を保つものは数点、10～20cm大の大きめの礫が多い	なし	土坑埋土中で検出	不明	なし	トレンチャーで両側破壊
SI11	表面に礫が少々	平面形洋梨状、深さは計測値なく不明、径145×85cm	土坑内にぎっしりと集積	赤変した拳大以上の礫が100個以上	中央に人頭大の河原石、周囲に拳2個分大の礫を花弁状に配置	土坑埋土中で検出	不明	不明	検出時は土坑の輪郭のみ、図面記録等なし
SI12	小さい30×30	なし	少量が1カ所に集積	殆ど砂岩、その他数点、赤変し割れたものや原形を保つものが15個程集積、3～8cm大	なし	礫下に少量	あり	なし	尾根上に位置、シラス直上
SI13	55×40程度	なし	水平に集積	赤変し割れた礫が40個程度	なし	なし	なし	なし	トレンチャーで寸断、図面記録なし
SI14	65×75	なし	水平に集積	殆ど砂岩、割れたものが多い、5～10cm大	中央に20cm大の大きめの河原石が3～4個	少量あり	少量の黒色付着物	なし	尾根上に位置する、集石遺構の下部が残存か
SI15	80×不明	なし	水平に集積	砂岩、赤変し割れている、35個程度、15cm大の大きめの礫が4個	なし	なし	あり	なし	トレンチャーで両側破壊、図面記録なし
SI16	100×90	浅い皿状、不明瞭、径80cm	水平に集積	赤変しヒビ割れてもろいものと原形を保つものが半々程度80個程度	なし	土坑中に多い	あり	なし	トレンチャーで寸断、土坑内に礫は殆どない、図面記録なし
SI17	110×130	なし	水平に集積	焼けた小礫が多い	なし	不明	不明	不明	図面記録なし

B地区は、基本層序のⅡ層黒色土が既に耕土化されており、表土の直下にアカホヤ層が見られた。そこで、表土剥ぎの際にバックホーによりアカホヤ火山灰層上面に達する多数のトレンチを開けて遺構の有無の確認を行った。その結果、何らの遺構・遺物も検出されず、また、表面採集でもアカホヤ火山灰降灰以降の遺物は採集されていなかったため、アカホヤ火山灰層までを一挙に除去した。

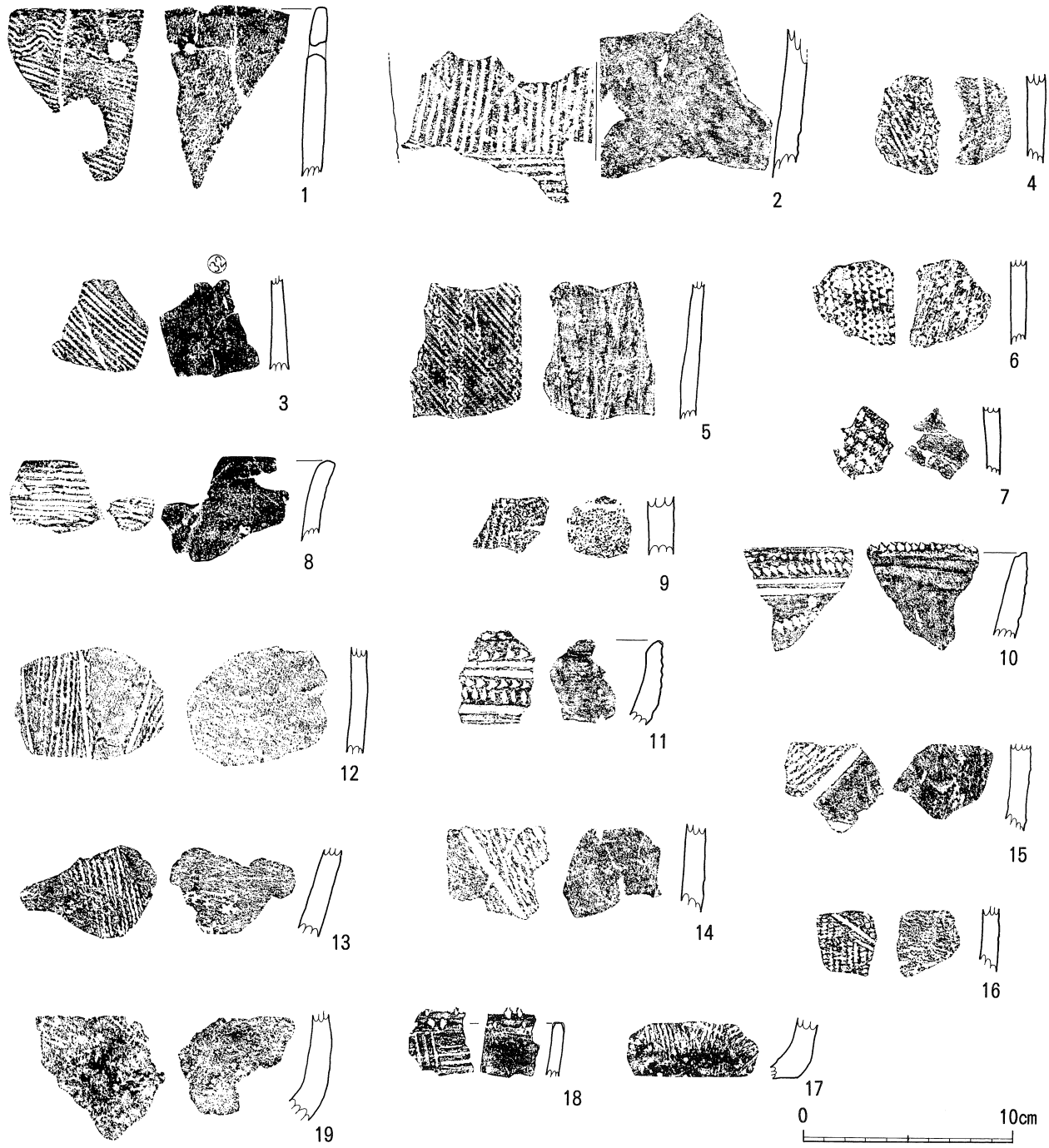
調査は、時間的な制約上、露出したⅣ層に一定間隔でトレンチを入れて遺構等を確認し、検出された箇所を中心にさらに掘り広げるという方法で実施した。出土した遺物は、時期的には早期に限られる。

（1）早期

早期の遺構・遺物は、Ⅳ層下部から下にかけて確認された。このⅣ層の下層はA地区とは異なり数層自然層の堆積が見られず、褐色土の次に入戸火砕流（シラス）層が堆積している。遺構は、このシラス直上にも見られる。トレンチャーによる破壊は深くにまで及び、遺構は寸断された状況で検出された。

調査の結果、集石遺構（ＳＩ）が17基、焼石の散礫群が１カ所確認された（第36図）。集石遺構は限られた時間の中で可能な限り図化に努めたが、本報告では紙面の都合で掲載できなかった。また、現地での記録方法に混乱もあったためすべてを写真に記録できなかったが、集石遺構一覧表（表９）と図版とを参照していただければ幸いである。

なお、これら集石遺構のうちＳＩ３とＳＩ７から小炭化物を採集して参考のため炭素年代測定に出している。後述の自然科学分析調査の結果を参照されたい。遺構内からの遺物の出土はまれであるが、同集石遺構からはともに塞ノ神式土器が出土している（第37図10・12）。



第37図　椎屋形第１遺跡Ｂ地区　早期土器実測図

表10　椎屋形第１遺跡Ｂ地区　縄文時代早期土器観察表

図番号	遺物番号	土器注記番号	器種	部位	文様及び調整		焼成	色調		胎土の特徴	分類	備考
					外面	内面		外面	内面			
第37図	1		深鉢	口縁部～胴部	口縁部は波状貝殻条痕文、下位は斜め貝殻条痕文	ヨコナデ	良好	淡黄（2.5YR8／3）	にぶい黄（2.5YR6／3）		Ⅰ類	補修孔１あり前平式
〃	2	188	深鉢	胴部	上位は縦方向・下位は横方向の貝殻条痕文	ナデ	良好	橙（５YR6／8）	明赤褐（５YR5／8）	１～２㎜の白色砂粒を多く含む	Ⅰ類	前平式
〃	3	172	深鉢	胴部	斜め方向の貝殻条痕文	ていねいなナデ	良好	浅黄橙（10YR8／3）	浅黄橙（10YR8／3）		Ⅱ類	角筒？加栗山式
〃	4	176	深鉢	胴部	斜めに貝殻条痕文、その上から縦に貝殻腹縁刺突文	ナデ ススス（炭化物？）付着	良好	橙（7.5YR7／6）	黒褐（7.5YR3／1）		Ⅱ類	角筒？加栗山式
〃	5	87	深鉢	胴部	斜めに貝殻条痕文、その上から縦に貝殻腹縁刺突文	縦にケズリ	良好	明黄褐（10YR7／6）、橙（7.5YR7／6）	橙（５YR7／6、6／8）		Ⅱ類	角筒加栗山式
〃	6	7	深鉢	胴部	貝殻腹縁刺突文	ナデ（風化）	良好	にぶい黄橙（10YR6／4）	にぶい黄橙（10YR7／4）	１㎜程度の砂粒を多く含む	Ⅲ類	吉田式
〃	7	184	深鉢	胴部	斜めに貝殻腹縁刺突文、貝殻文間はていねいなナデ	ナデ	良好	にぶい黄（2.5YR6／3）	黒褐（2.5YR3／2）		Ⅳ類	下剥峰式
〃	8	9	深鉢	口縁部	横方向に貝殻条痕文	ていねいなナデ	良好	淡黄（2.5YR8／3）	淡黄（2.5YR8／3）		Ⅴ類	条痕文土器
〃	9	193	深鉢	胴部	刺突列点文（等間隔）	ナデ	良好	にぶい赤褐（５YR5／4）	灰褐（7.5YR4／2）	２㎜以下の淡黄色粒が目立つ（やや多く含む）	Ⅵ類	刺突列点文土器（押型文土器と同様な原体回転か）
〃	10	SI 7	深鉢	口縁部	口唇部刻み目、以下沈線文と列点文の組合せ	ナデ	良好	にぶい橙（7.5YR7／4）	にぶい橙（7.5YR7／4）		Ⅶ類	塞ノ神式
〃	11	21	深鉢	口縁部	口唇部刻み目、以下沈線文と列点文の組合せ	ナデ	良好	橙（7.5YR7／6）	にぶい橙（５YR6／4）	１～２㎜の白色粒を多く含む	Ⅶ類	塞ノ神式
〃	12	SI 3	深鉢	胴部	画線内に撚糸文	粗いナデ	良好	にぶい橙（7.5YR7／4）	にぶい橙（7.5YR7／4）		Ⅶ類	塞ノ神式
〃	13	134	深鉢	胴部	撚糸文	粗いナデ	良好	にぶい橙（５YR6／4）	にぶい橙（５YR6／4）、黒褐（５YR2／1）		Ⅶ類	塞ノ神式
〃	14	51	深鉢	胴部	画線内に撚糸文	ていねいなナデ	良好	橙（7.5YR7／6）	にぶい黄橙（10YR7／4）	１～２㎜の白色粒を多く含む	Ⅶ類	塞ノ神式
〃	15	104	深鉢	胴部	画線内に撚糸文	ナデ	良好	明黄褐（10YR6／6）	橙（５YR6／6）	１㎜程度の白色砂粒を多く含む	Ⅶ類	塞ノ神式
〃	16	6	深鉢	胴部	画線内に縄文	粗いナデ	良好	明黄褐（10YR7／6）	にぶい黄橙（10YR7／4）		Ⅶ類	塞ノ神式
〃	17	64	深鉢	底部	撚糸文	粗いナデ	良好	にぶい橙（５YR6／4）	にぶい橙（５YR7／4）		Ⅶ類	塞ノ神式
〃	18	179	鉢	口縁部	口縁端部に刻み目、縦・横方向の条痕文	口縁端部に刻み目、下位はナデ	良好	橙（7.5YR7／6）	にぶい黄橙（10YR7／4）		Ⅷ類	轟Ａ式
〃	19	54	深鉢	底部付近	無文	ナデ	良好	橙（7.5YR7／6）	橙（５YR7／6）		Ⅸ類	

遺物は、調査区全体のトレンチに見られた。その殆どはチップや小土器片である。分布状況は、特に集中した箇所はなく、また、特に遺構周辺に多く見られることもなく、全体に散布しているという状況であった。遺物は量的にはそう多くない。

土器はその主なものを図化し第37図に掲載した。前平式土器や塞ノ神式土器等が見られる。個々の土器については、表10の早期土器観察表を参照していただきたい。また、石器は打製石鏃等が出土しているが、時間の都合で割愛した。図版を参照されたい。

4　自然科学分析調査の結果

古環境研究所

Ⅰ　　椎屋形第１遺跡Ａ地区のテフラ検出分析

1　はじめに

宮崎市周辺には、霧島火山や姶良カルデラなどに起源をもつテフラ（tephra）が多く堆積している。テフラとは火山噴出物のうち溶岩流と火山ガスを除いたものの総称で、「火山砕屑（さいせつ）物」の同義語である。テフラという語の方が簡単で世界的にも広く用いられていることから、最近では「テフラ」がよく使われている。なお同じ様な意味をもつ用語に広義の「火山灰」という用語があるが、火山学では径２mm以下の粒子を指すため適当ではない。

さてテフラの中には、放射性年代測定法や標準的な地形面さらに考古遺物との層位学的な資料などから、その噴出年代が明らかになっているものがある。これらのテフラは「示標（しひょう）テフラ」と呼ばれ地質学や地形学、さらに考古学などの編年学的研究に盛んに利用されている。椎屋形第１遺跡の発掘調査においても火山灰土中の数層準にテフラが認められた。このことからテフラを利用した編年学的な研究が可能と考えられた。ここでは、野外地質調査により火山灰土の層序を明らかにするとともに、テフラ検出分析を行って野外地質調査で確認できない示標テフラの検出を試みる。

2　層序

野外地質調査を行った時点での火山灰土の層序を図１に示す。これらの土層の下位に、下位より褐色火山灰土（Ⅶ層）、黒褐色火山灰土（Ⅵ層）、黒褐色火山灰土（Ⅴ層）が存在する。Ⅴ層の上位にある暗褐色火山灰土（Ⅳ層，層厚22cm）からは爪形文あるいは隆帯文土器が出土している。さらにこの上位に褐色火山灰土（層厚21cm）、黄色や橙色軽石が混じる暗褐色火山灰土（層厚８cm）、黒褐色火山灰土（層厚15cm）、成層した黄橙色火山灰層（層厚22cm）、暗褐色火山灰土（層厚11cm）、黒色火山灰土（層厚22cm以上）と連続している。

これらの土層のうち黄橙色火山灰層は、下部の降下軽石層（層厚５cm）と上部の細粒でガラス質の降下火山灰層（層厚17cm）に区分される。軽石層に含まれる軽石の最大径は４mm、石質岩片の最大径は３mmである。軽石は繊維束状によく発泡している。このテフラは層相から約6,300年前に鬼界カルデラから噴出した鬼界アカホヤ火山灰（K-Ah，町田・新井，1978）に同定される。

3　テフラ検出分析

（１）分析試料と方法

黄色や橙色軽石が混じる暗褐色火山灰土より下位の土層について、テフラ粒子の特徴を記載するとともに野外地質調査で確認できないテフラの検出を目的としてテフラ検出分析を行った。分析の対象とした試料は、10点である。なおⅦ層、Ⅵ層、Ⅴ層については発掘調査担当者より採取、送付された試料を対象とした。

分析の手順は、次の通りである。

１）試料10ｇを秤量。

2）超音波洗浄装置により、泥分を除去。

3）80℃で恒温乾燥。

4）実体顕微鏡下で、テフラ粒子の特徴を観察。

（2）分析結果

分析結果を表1に示す。黄色軽石や橙色軽石が認められた試料番号4には、最大径1.9mmの軽石が含まれている。軽石の発泡はあまりよくない。またV層およびVI層には最大径4mm程度の橙色や黄色の軽石が認められた。軽石の発泡はあまりよくない。スコリア（色が黒っぽい軽石）は試料番号1、3、4、5、VII層で認められたがいずれの量も少ない。

4　考察

椎屋形第1遺跡A地区においてテフラ検出分析を行った結果、3層準にテフラが認められた。最下位のテフラは、爪形文土器および隆帯文土器の出土層準の下位の火山灰土（V層およびVI層）中に散在する橙色および黄色軽石である。軽石の発泡はあまりよくない。これらの軽石は、岩相から15,750±270y.B.P.より新しく約1.0万年前より古い時代に霧島火山韓国岳から噴出した霧島－小林軽石（Kr-K，町田ほか，1984）に由来する可能性が考えられる。なおKr-Kは約1.0－1.1万年前に桜島火山付近から噴出した桜島－薩摩テフラ（Sz-S，町田ほか，1984）の下位にあることが知られている（井村・小林，1991）。

また、爪形文および隆帯文土器の出土層準の上位にある黄色および橙色軽石は、約9,000年前に霧島火山新燃岳から噴出したと考えられる霧島－瀬田尾軽石（Kr-STP:井ノ上，1988，井村・小林，1991）に由来する可能性が考えられる。なお、Kr-STP直下の腐植層からは、9,130±830y.B.P.（GaK-15329）の^{14}C年代が得られている。さらに最上位のテフラは、前述のように層相から約6,300年前に鬼界カルデラから噴出した鬼界アカホヤ火山灰（K-Ah）に同定される。

以上のことから、爪形文土器および隆帯文土器の出土層準は、15,750±270y.B.P.より新しく約1.0万年前より古いKr-Kの上位、さらに約9,000年前のKr-STPの下位にあると考えられる。今後^{14}C年代測定法などによるKr-Kの噴出年代を明らかにするとともに、Kr-STPについて野外地質調査を行いその分布を明らかにし、岩石記載的な特徴を把握して示標テフラとしての特徴を記載する必要がある。

5　まとめ

宮崎市椎屋形第1遺跡A地区において野外地質調査とテフラ検出分析を合わせて行った結果、下位より15,750±270y.B.P.より新しく約1.0万年前より古い霧島－小林軽石に由来すると思われる軽石の濃集層準、約9,000年前の霧島－瀬田尾軽石に由来すると思われる軽石の濃集層準、約6,300年前の鬼界アカホヤ火山灰が検出された。これらのテフラとの層位関係より爪形文土器および隆帯文土器の出土層準は、霧島－小林軽石と霧島－瀬田尾軽石の間の層準にあることが推定された。

一方今回の分析では、南九州地方において縄文時代草創期の重要な示標テフラとされている桜島－薩摩テフラ（Sz-S）は検出されなかった。本地域はSz-Sの分布の北限に近いと考えられるためその検出は難しいと考えられるものの、さらに詳細な野外地質調査と火山ガラスの形態分析など室内分析を行うことにより検出が可能かもしれない。

文　献

町田　洋・新井房夫（1978）南九州鬼界カルデラから噴出した広域テフラーアカホヤ火山灰．第四紀研究，17，p.143-163.

町田　洋・新井房夫・小田静夫・遠藤邦彦・杉原重夫（1984）テフラと日本考古学ー考古学研究と関係するテフラのカタログー．古文化財編集委員会編「古文化財に関する保存科学と人文・自然科学」，p.865-928.

井村　隆介・古賀政行（1992）霧島火山および入戸火砕流の^{14}C年代．火山，第2集，37，p.99-102.

井村　隆介・小林哲夫（1991）霧島火山新燃岳の最近300年間の噴火活動．火山，第2集，36，p.135-148.

井ノ上幸造（1988）霧島火山群高千穂複合火山の噴火活動史．岩石鉱物鉱床学会誌，83，p.26-41.

表1　椎屋形第1遺跡A地区のテフラ検出分析結果

試料	軽石			スコリア		
	量	色調	最大径	量	色調	最大径
1	＋	白	1.1	＋	灰	2.0
3	－	－	－	＋	灰	1.9
4	＋＋	黄，橙	1.9	＋	灰	1.8
5	＋	白	1.2	＋	灰	1.4
7	＋	白	0.9	－	－	－
9	＋	白	1.2	－	－	－
11	＋	白	1.1	－	－	－
Ⅴ層	＋＋	黄，橙	3.9	－	－	－
Ⅵ層	＋＋	黄，橙	3.8	－	－	－
Ⅶ層	＋	灰白	1.3	＋	暗灰	1.9

＋＋＋＋：特に多い、＋＋＋：多い、＋＋：中程度、＋：少ない、－：認められない、
最大径の単位は、mm。

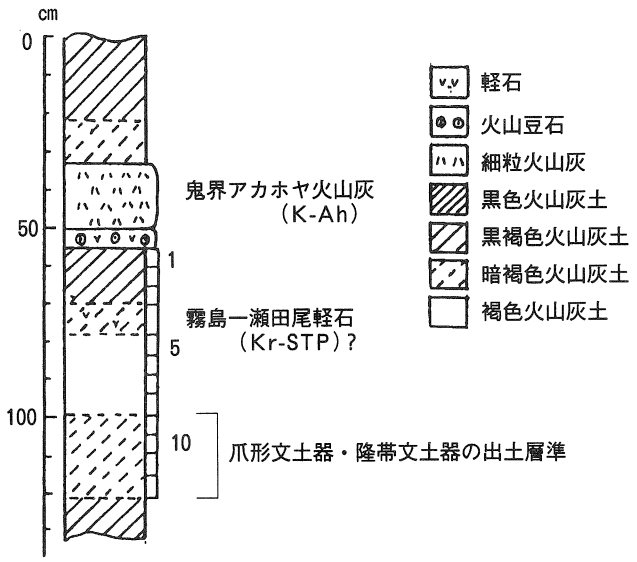


図1　宮崎市椎屋形第1遺跡A地区のテフラ層序　　数字は、テフラ検出分析番号

Ⅱ　椎屋形第１遺跡Ａ地区出土の種実

試料は、椎屋形第１遺跡Ａ地区ＳＡ17の焼土付近から出土した種実である。同定の結果と記載を以下に示す。主要なものを写真に示した（図版１）。

試　料	分類群　学名	和　名	部位	個
ＳＡ17の焼土 No.１付近出土	*Castanopsis cuspidata* (Thunberg) Schottky	ツブラジイ	炭化 子葉	35

ツブラジイ *Castanopsis cuspidata* (Thunberg) Schottky　子葉

堅果から果皮、種皮のとれた子葉にあたる部分で著しく炭化したものである。長さ８mmぐらいで丸みをおび、先端が尖る。コナラ属とシイ属の堅果の内部の子葉は、類似するが本試料は著しく小型であることと丸みをおびることから、ツブラジイと同定した。数えられる試料は35個であるが、他に破片が多数ある。

ツブラジイは関東地方以南の本州・四国・屋久島までの九州および済州島に分布する暖温帯を構成する主要常緑広葉樹の一つで内陸部に多い。ツブラジイは渋抜きなしで食用となる堅果類である。

Ⅲ　放射性炭素年代測定結果

椎屋形第１遺跡Ｂ地区ＳＩ３およびＳＩ７の下部の掘込みから出土した試料について年代測定を行った。その結果を次表に示す。なお、年代値は1950年よりの年数（B.P.）である。

年代値の算出には^{14}Ｃの半減期としてLIBBYの半減期5570年を使用している。また、付記した誤差はβ線の計数値の標準偏差σにもとづいて算出した年数で、標準偏差（ONE SIGMA）に相当する年代である。また、試料のβ線計数率と自然計数率の差が２σ以下のときは、３σに相当する年代を下限の年代値（B.P.)として表示してある。また、試料のβ線計数率と現在の標準炭素（MODERN STANDARD CARBON）についての計数率との差が２σ以下のときは、Modernと表示し、σ^{14}Ｃ％を付記してある。

椎屋形第１遺跡Ｂ地区集石遺構出土試料の放射性炭素年代測定結果

試料No.	出土地点	種　類	年　代　値	コードNo.
No. 1	ＳＩ３	炭化物	7930±120（5980 Ｂ.Ｃ.）	GaK－16266
No. 2	ＳＩ７	炭化物	8160±120（6210 Ｂ.Ｃ.）	GaK－16267

第3節　まとめ

椎屋形第1遺跡では、縄文時代草創期・早期及び弥生時代の遺構・遺物が確認された。そこで、その成果について若干のまとめを行いたい。

まず、縄文時代については十分な調査を行えなかったが、特に草創期の遺物は出土例も少ないため簡単に触れておきたい。県内では既に述べたとおり宮崎市堂地西遺跡でⅣ・Ⅴ類の隆帯文・爪形文土器が纏まって出土したことがある。しかし、同遺跡ではⅤ類が少なくⅣ類隆帯文土器が多いのに比べ椎屋形第1遺跡ではⅤ類の爪形文土器が主体を占めている。現在の編年観から言えば、堂地西遺跡と椎屋形第1遺跡とは主体となる時期に時期差がある。

椎屋形第1遺跡の爪形文土器には、Ⅴａ類とした器壁に薄く粘土帯を貼り付けて爪形文を施したと考えられるような土器が見られた。Ⅳ類は12の様に隆帯をわずかに離して貼り付けたものも見られるが、多くは隆帯が接して貼り付けられている。この中で特に18は個々の隆帯が分かり辛いほど粘土帯が接しすぎている。これがさらに簡略化されるとⅤａ類の様に粘土帯の貼り付けとなると考え今回レイアウトした。ただ、Ⅳ類の爪先圧痕文（爪形文）とⅤ類の爪形文（爪先圧痕文）とには文様としての意識の仕方に開きがあると思われ（Ⅳ類は指先による摘まみの結果としての爪先圧痕、Ⅴ類は爪先の刺突による爪先圧痕）、直ちにつながるものとは考えていない。また、Ⅴ類の爪形文の施文方法としては、一見半截竹管状あるいはヘラ状の工具を使用したと思われるものも見られる。しかし、その断面を観察すると、器壁側が滑らかな曲線を描き先端は鋭く尖る（平面的には先端は弧状を描く）、そしてその外側は若干の乱れを生じさらに外側はわずかに窪むなど指先の爪のあたりの圧痕と考えられるものが見られる。ただ、確かに一部に判断のつかないものもある。一概にヘラ状工具の使用を否定することもできない。本遺跡の草創期土器には外面に厚くススが付着するものが見られた。また、磨石や台石、石斧など定住生活を思わせる遺物や打製石鏃の多さなど縄文時代を特徴付ける遺物の出土があった一方で細石刃など旧石器的な遺物を伴わない事等が特徴として指摘できる。

次に、弥生時代について簡単に述べたい。出土土器の時期については、現在一般に石川悦雄氏による編年案が用いられている。先に出土土器の各器種毎の形態分類を行ったが、甕形土器Ⅰ・Ⅱ類の様に、あるいは壺形土器Ⅰ類の様に、一部に逆Ｌ字状口縁や鋤先口縁という古い様相を示す少量の遺物はあるものの、くの字口縁化した甕や大甕の口縁部の形態等、また、壺・高坏という特定の瀬戸内系土器の共伴等、総体的には石川氏編年のⅣａ期（中期末～後期初頭）あたりに位置付けられるであろう。これと同様の状況が、宮崎市南部の堂地東遺跡や県中央部の新富町新田原遺跡等で見られるが、甕Ⅶ類が主体を占める新田原遺跡よりはⅢ類が主体を占める堂地東遺跡の様相により近い。

今回の調査では、圃場整備の範囲内でしかも調査区外に遺構が広がるという状況はあったが、ほぼ台地の端部付近までは調査を行えたと考えられる。そこで遺構の分布状況を見たとき、中央には掘立柱建物跡群と磨製石鏃等の工房的な大型竪穴住居（ＳＡ２は主柱穴の配置の類似からＳＡ３のように大型の竪穴住居になる可能性がある）が、そしてそれらの両側にやや離れて間仕切り区画を有する住居等が、南西～東側の標高の低い方には小型の竪穴住居あるいは厨房的な施設等が、また、西側の離れた位置には土壙や周溝状遺構が配置されるという計画的な土地の利用状況がうかがえよう。

それぞれの遺構においては、大型住居や掘立柱建物跡の主柱の掘方に見られる立て替えや間仕切り壁の削平に見られる住居の拡張あるいはＳＡ18・19の様に連続的な使用状況が見られる一方、ＳＡ６・14、ＳＡ15・16の様に切り合いもあるなどある程度の住居の変遷も考えられ、これらが土器に見られる新旧の様相とどう関係するのかの課題が残る。また、離れた位置にあった「箱式土器棺墓（適当な名称がないためこう仮称する）」は、県内での弥生時代の埋葬遺構例があまり多くない中で貴重な例となった。この土器棺は内法が80cm足らずの長さであり、棺としては小児用と考えられる。この大甕を復元すると小児の屈葬なら何とか埋葬できる大きさにもかかわらず破片を利用して（この破片も適当に割れたものを使用したというよりある程度計画的に割ったものを用いたと思われる程うまく利用されている）箱式石棺状に組み合わせてあったが、この当時の墓制を知るうえで興味深い遺構であり、今後の類例が待たれるところである。

本報告では編年資料として重要と思われる縄文草創期土器及び弥生土器の資料化に努めた。時間的に考察に及ぶことができなかった上に石器等はかなり割愛してしまった。筆者の力不足で十分な記録がなし得なかったことは、諸般の事情があったとは言え遺憾なことである。

なお調査期間中、いろいろとご協力戴き無理を聞いて戴いた地元の皆さん、整理期間中に草創期土器等について種々ご教示ご助言を戴いた小林謙一、宮坂孝宏、児玉健一郎、前迫亮一の各氏をはじめとする研究者の方々には謝意を表するとともに筆者の能力不足故にその期待に添えられなかったことをお詫び申し上げます。また、県文化課の岩永哲夫･飯田博之・石川悦雄・谷口武範の各氏には多大のご協力ご助言を戴いたことを感謝申し上げます。

参考文献

南九州における縄文時代草創期の諸問題　資料集　宮崎考古学会・南九州の縄文時代草創期を考える会　1993

今回、この資料集に掲載した図の加筆等を行ったのでご了承願いたい。全面的な訂正ではない。また、この資料集にはない県内の遺跡のうち隆帯文土器が下記の浦田遺跡と天神河内第１遺跡で各１点、爪形文土器が浦田遺跡で１点出土している。

浦田遺跡　『宮崎学園都市遺跡発掘調査報告書第２集』　宮崎県教育委員会　1985

天神河内第１遺跡　『大淀川右岸農業水利事業国営天神ダム建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』　宮崎県教育委員会　1991

堂地西遺跡　『宮崎学園都市遺跡発掘調査報告書第２集』　宮崎県教育委員会　1985

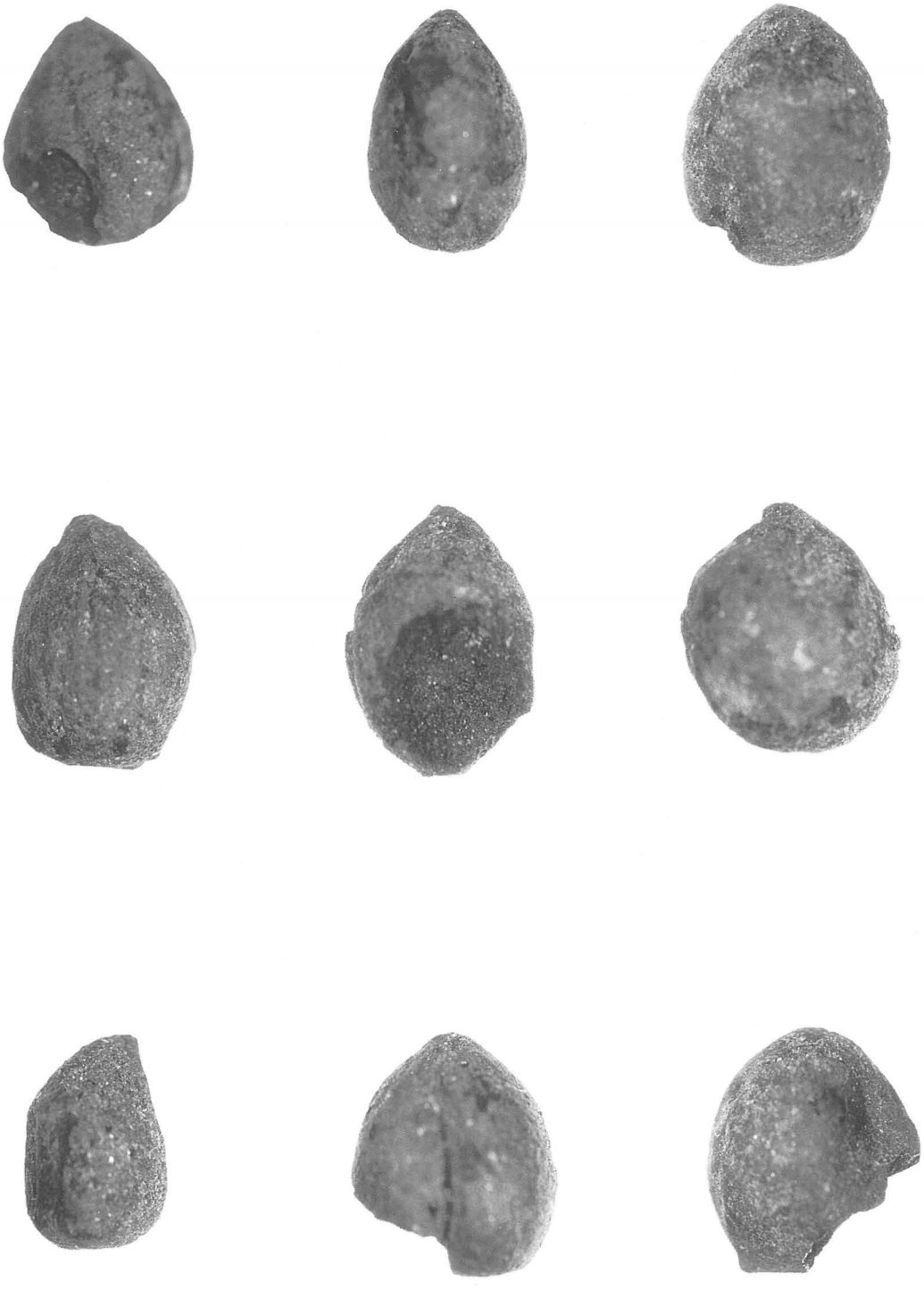
堂地東遺跡　『宮崎学園都市遺跡発掘調査報告書第２集』　宮崎県教育委員会　1985

新田原遺跡　『宮崎県児湯郡新富町文化財調査報告書第４集』　新富町教育委員会　1986

宮崎平野における弥生土器編年試案－素描（Mk.Ⅱ）　石川悦雄　『宮崎考古第９号』　宮崎考古学会　1984

七又木地区遺跡　『新富町文化財調査報告書第13集』　新富町教育委員会　1992

白鳥平Ｂ遺跡　『熊本県文化財調査報告第142集』　熊本県教育委員会　1994



ツブライ炭化子葉 ———— 5 mm

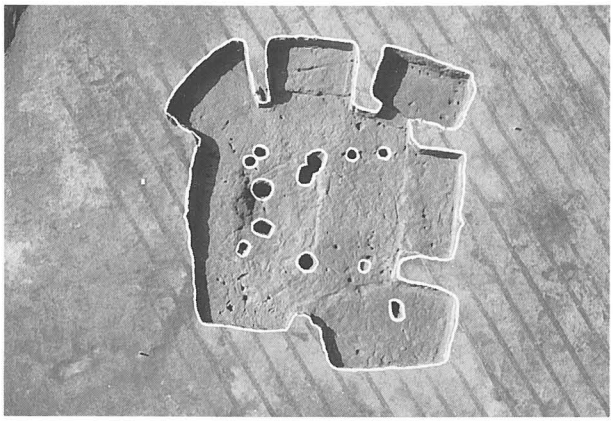
椎屋形第１遺跡Ａ地区　ＳＡ17出土種実

図版 2

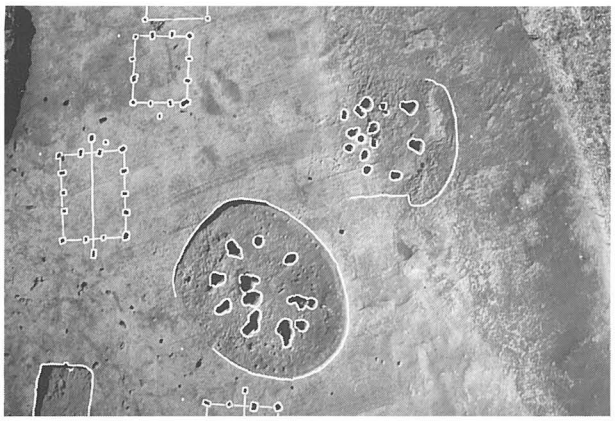
A地区及び西側工事区全景

A地区全景

草創期遺物出土状況



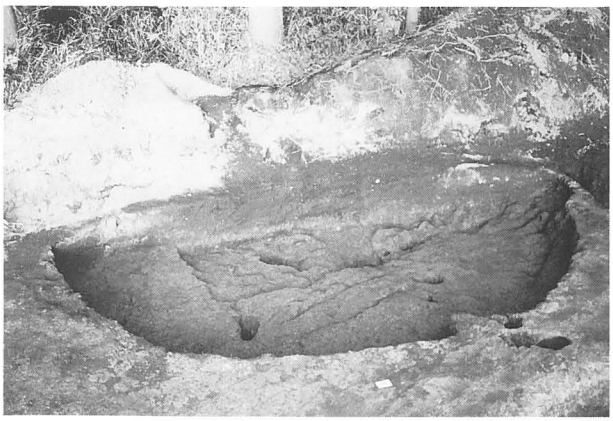
SA1



SA2・3、SB2・3ほか

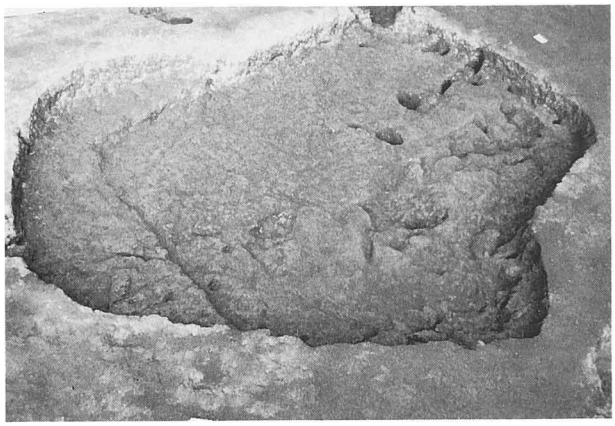
SA3

SA4



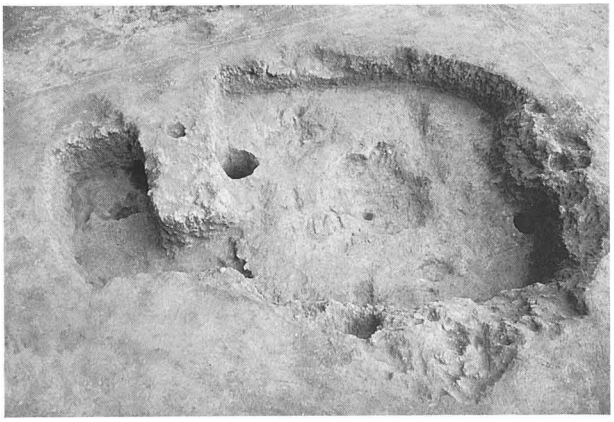
SA5

椎屋形第1遺跡A地区



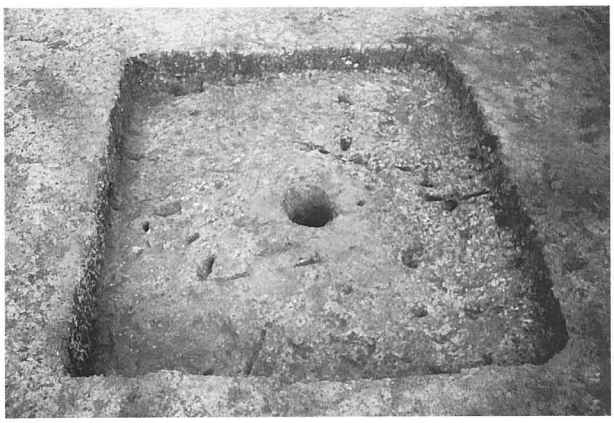
SA6・14

SA7

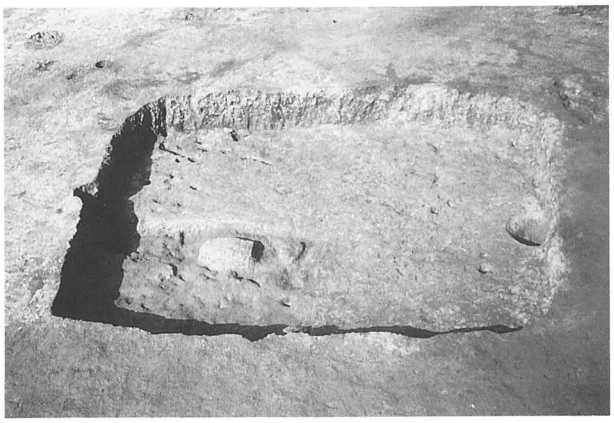


SA8

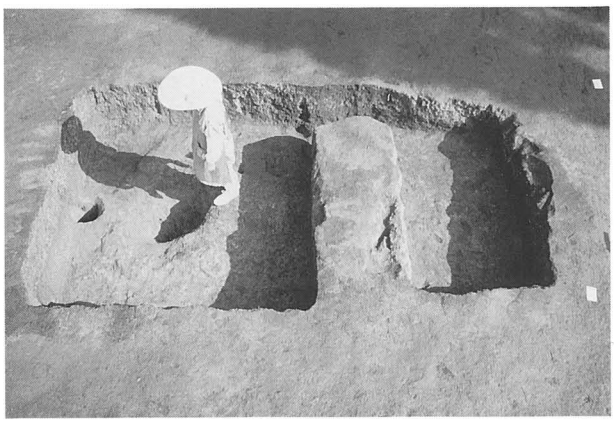
SA9



SA10



SA11



SA12

SA13

椎屋形第1遺跡　A地区

図版 4

ＳＡ15・16

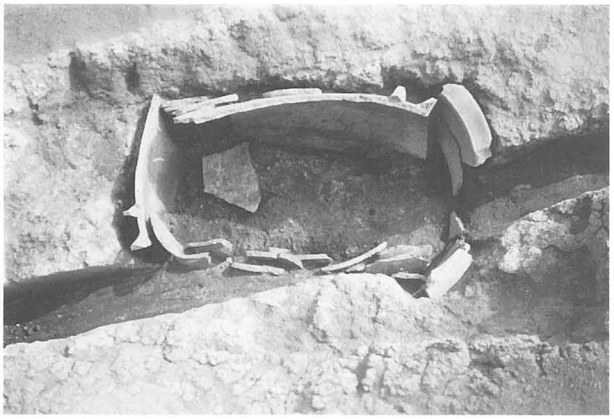
ＳＡ18

ＳＡ19

ＳＡ19　小ピット列

ＳＡ19　焼土及び階段状土盛り

ＳＣ２　蓋部分（南から）



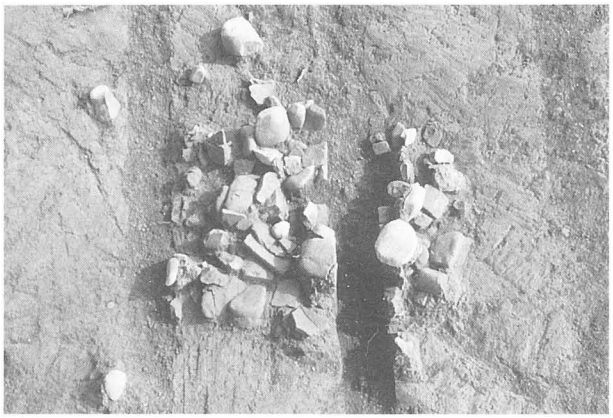
ＳＣ２（北から）

ＳＣ２　完掘状況（北から）

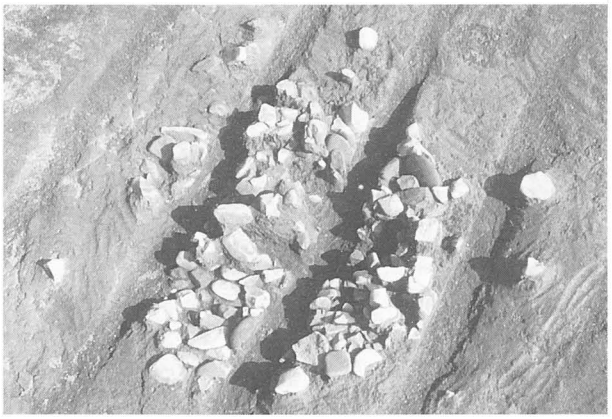
椎屋形第１遺跡　Ａ地区

A地区　ＳＬ１

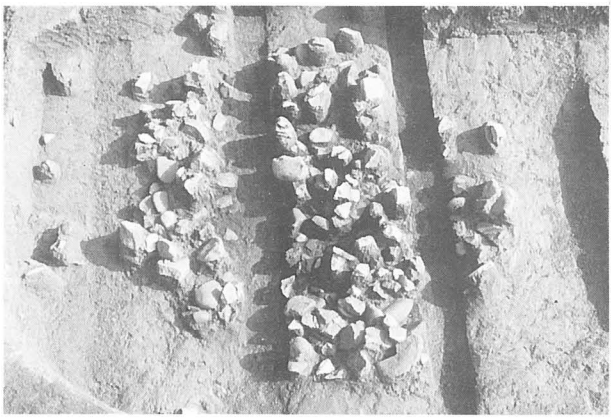
B地区　全景



B地区　ＳＩ１

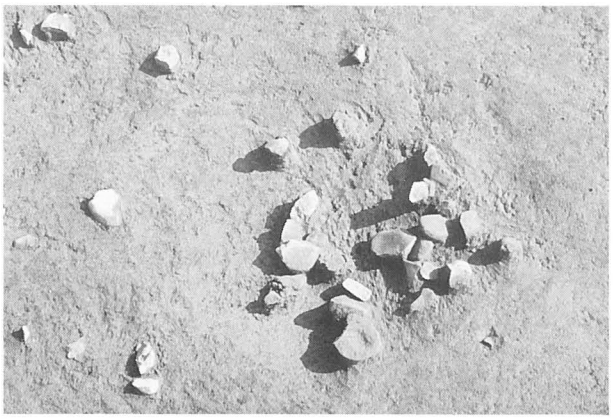


ＳＩ２



ＳＩ３

ＳＩ４



ＳＩ５

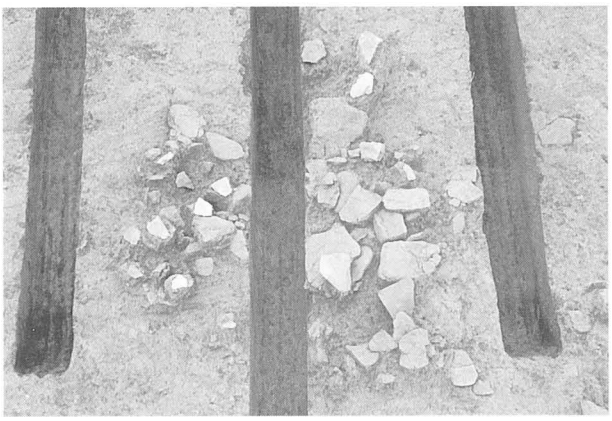
ＳＩ６

椎屋形第１遺跡　Ａ地区及びＢ地区

図版 6

S I 7

S I 8

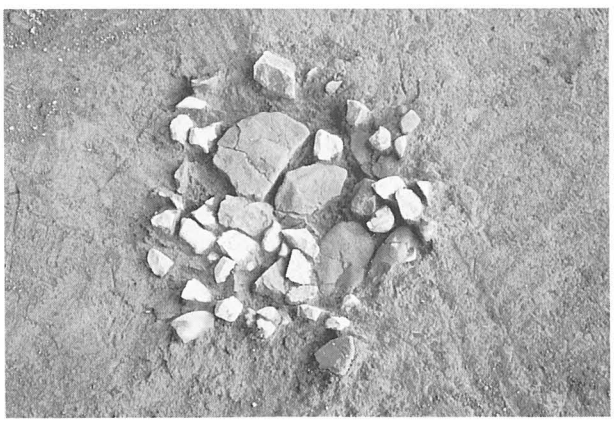


S I 9

S I 10

S I 11 土坑部分

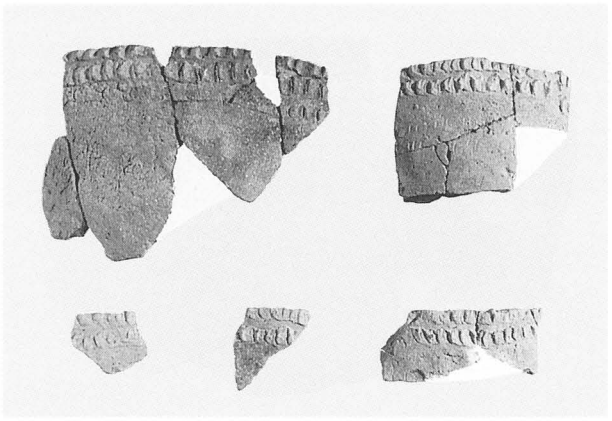
S I 13



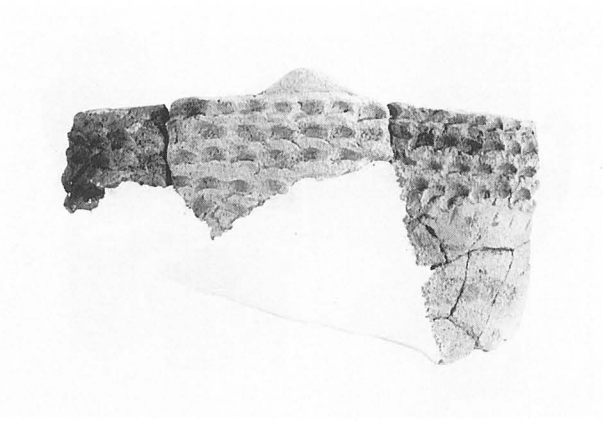
S I 14

礫群及びS I 10・11（右端側）

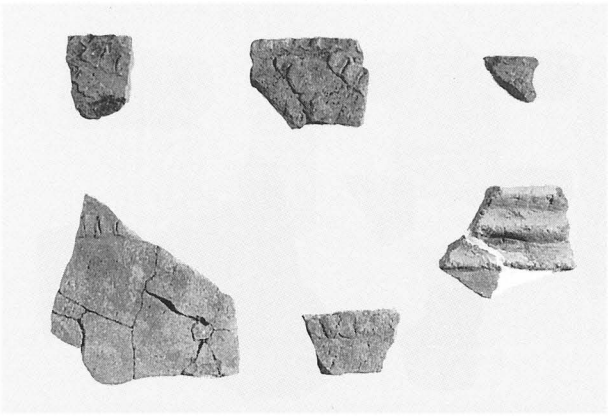
椎屋形第1遺跡　B地区



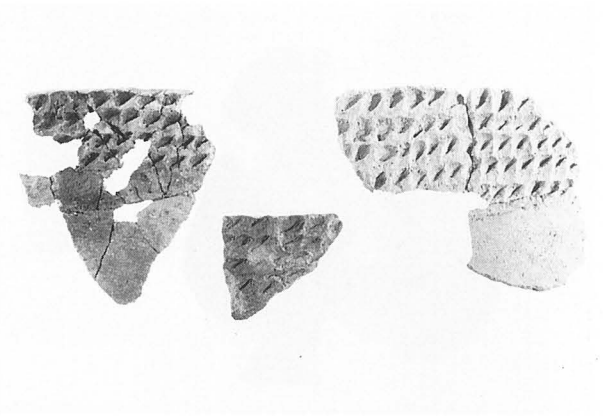
1～2　同一個体



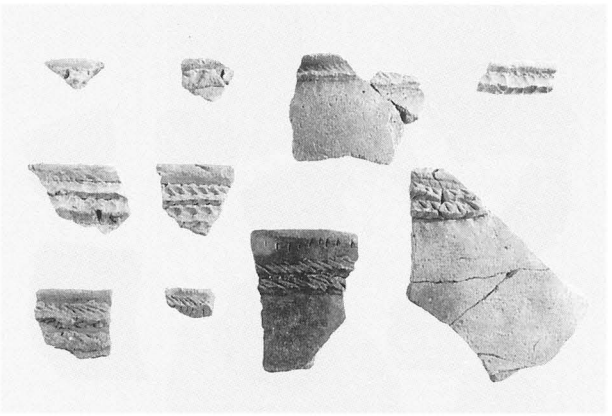
23



3～5　同一個体

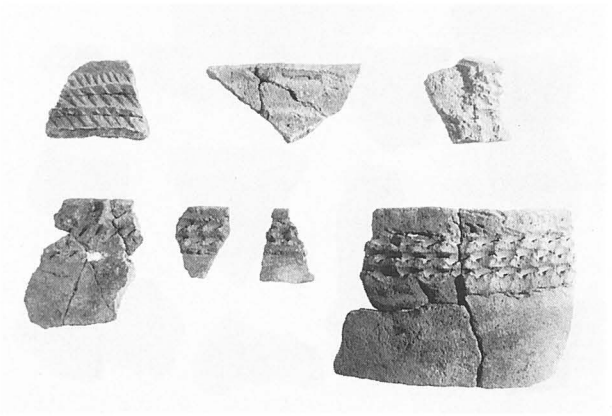


24～26

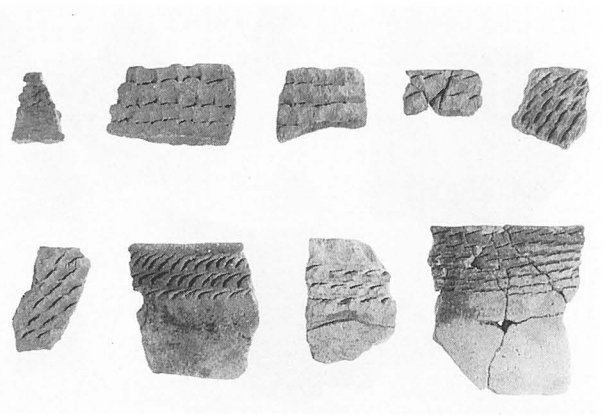


6～15

27

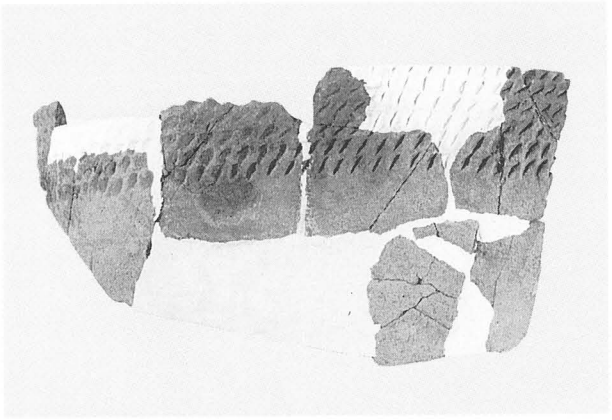


16～22

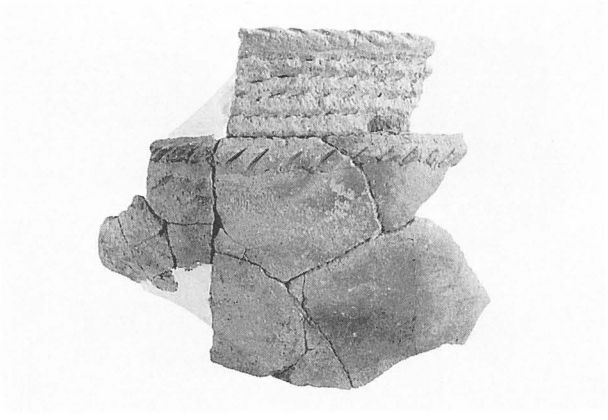


28～36

椎屋形第１遺跡Ａ地区　縄文時代草創期土器（１）　※左から右、上から下の順

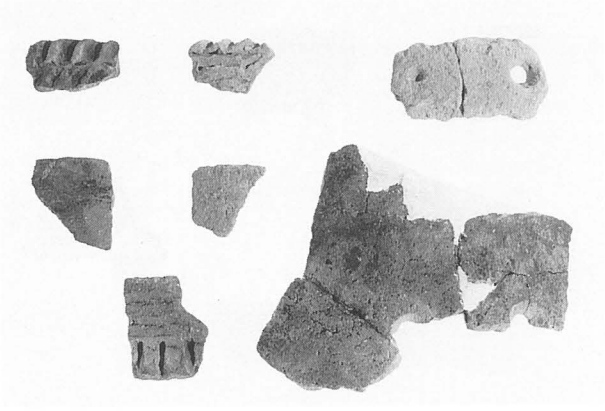


37

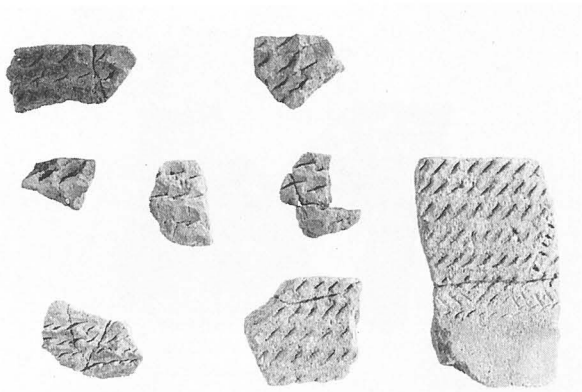


48

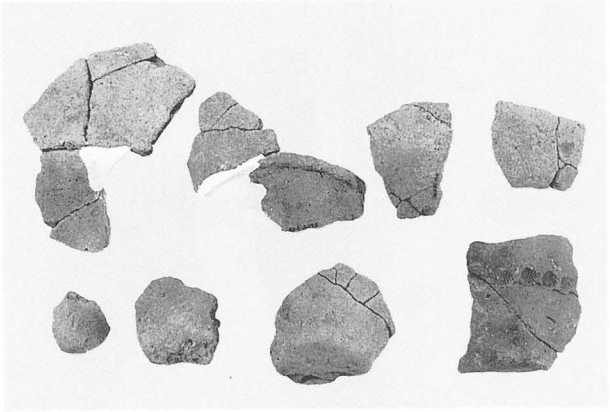
38



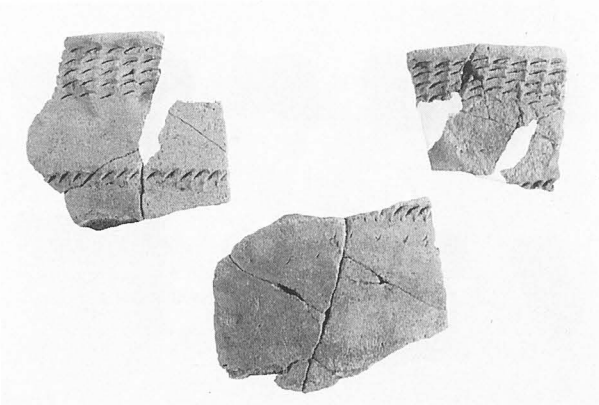
49～55



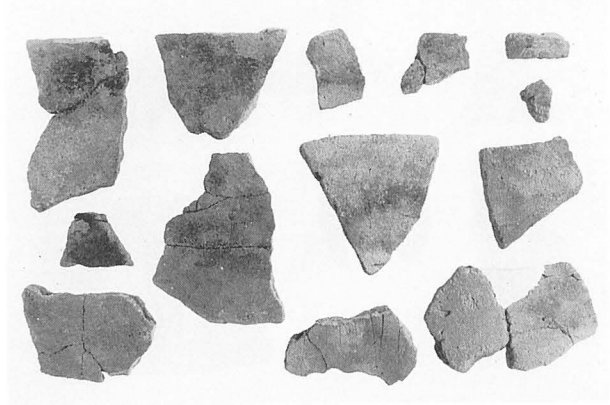
39～46



56～63



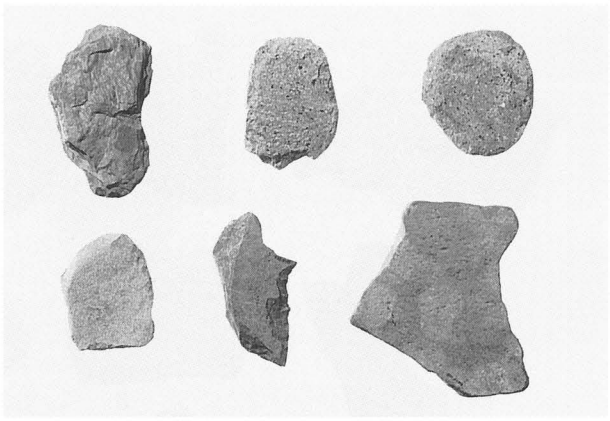
47　同一個体



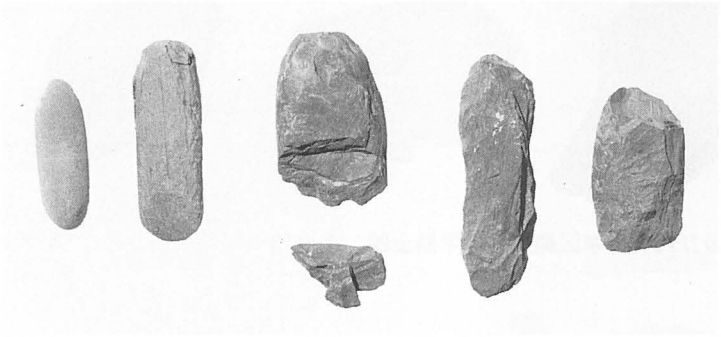
主な胴部片

椎屋形第１遺跡Ａ地区　縄文時代草創期土器（２）

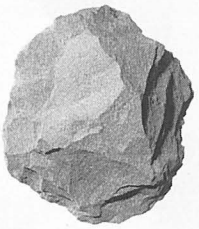
1～2

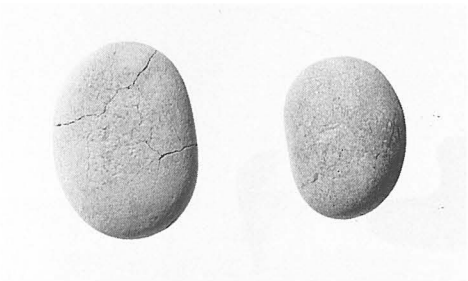


10～14・27

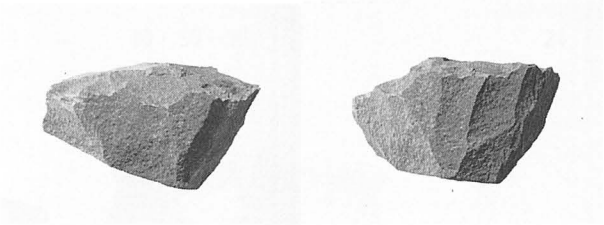


5～9

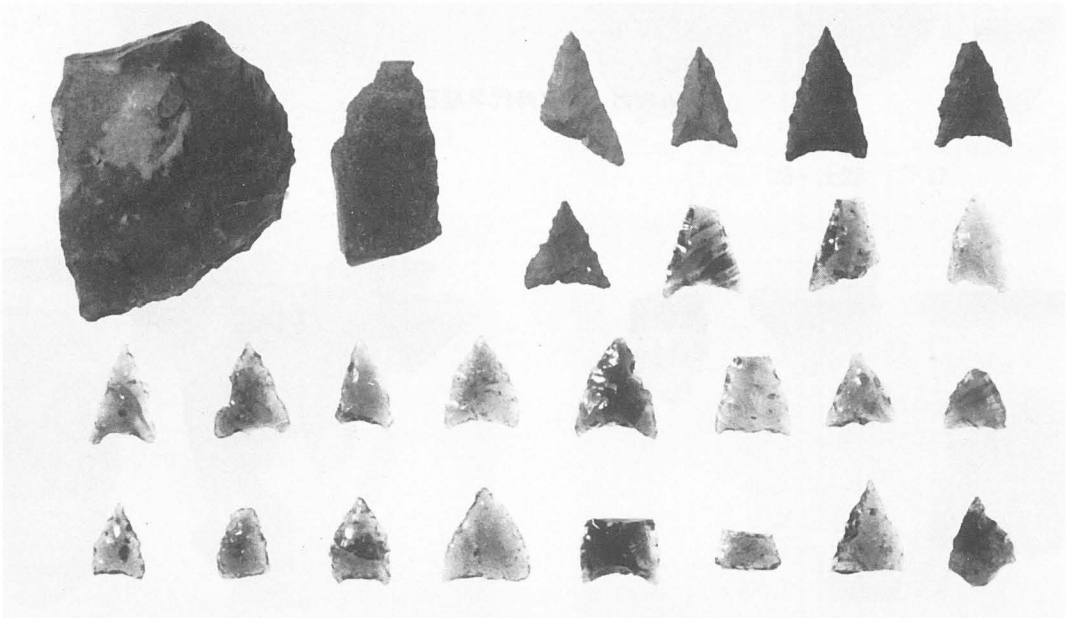




3～4



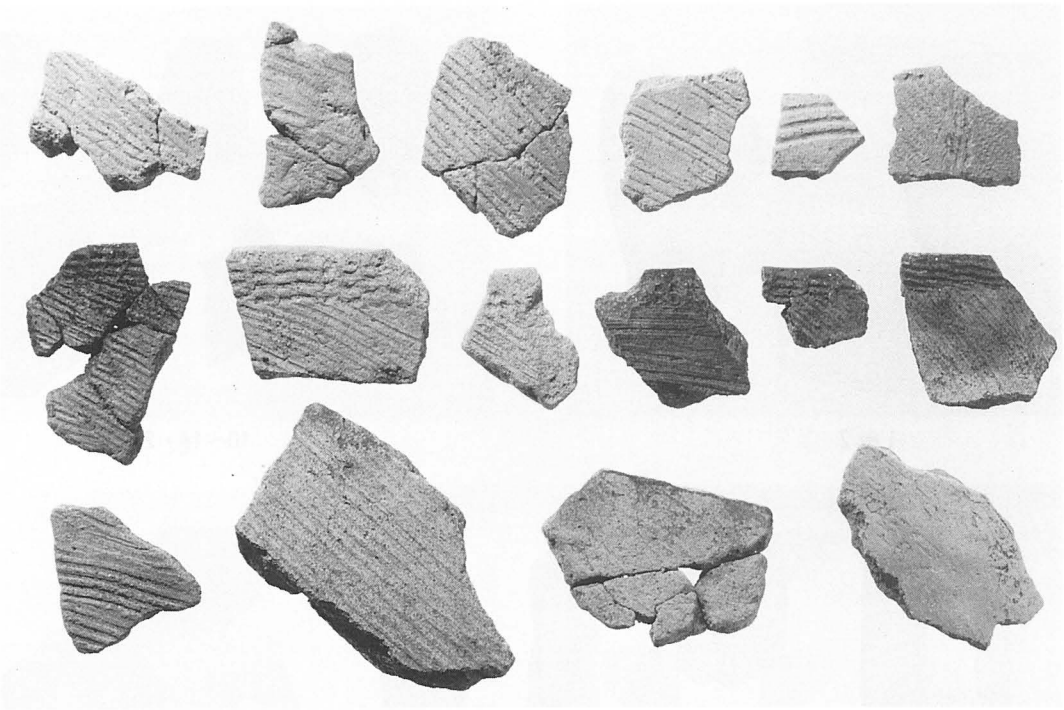
24



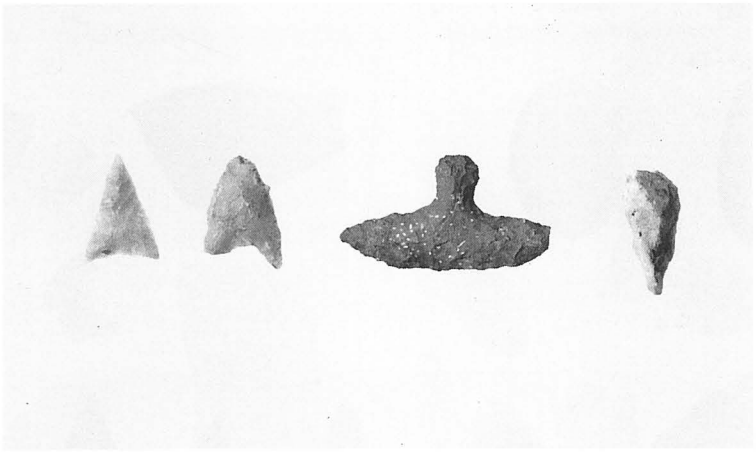
15～16・28～51

椎屋形第１遺跡Ａ地区　縄文時代草創期石器

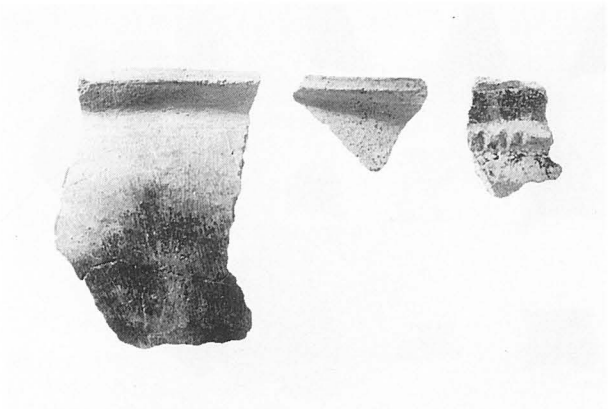
図版 10



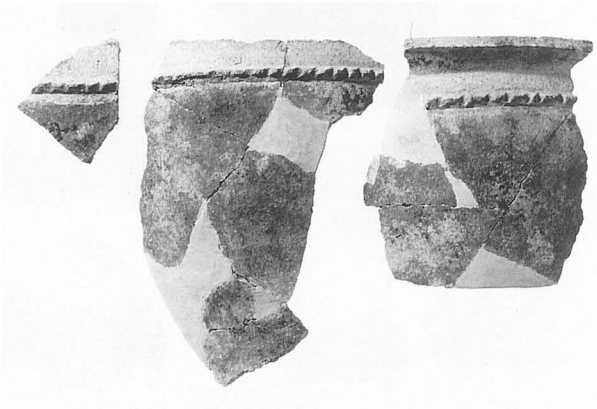
A地区及び西側工事区縄文時代早期土器　1～16



A地区　縄文時代早期石器



SB6周辺　1～3



SA1　10・同一個体・1

椎屋形第1遺跡A地区　縄文時代早期土器・石器及び弥生土器（1）

2

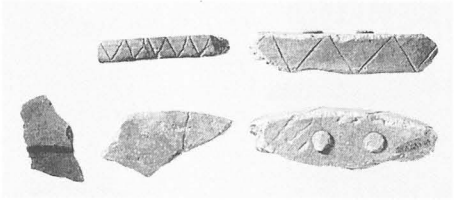
6

7

3

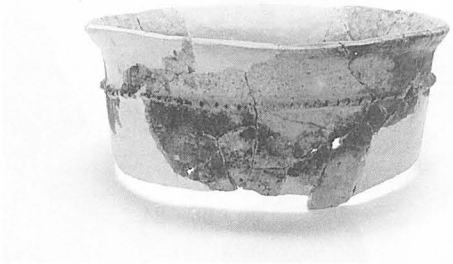
11・29

17・42

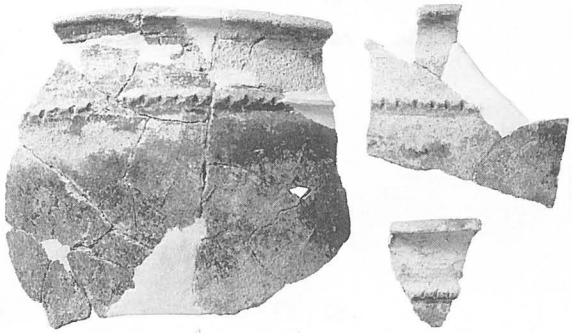


16・35・36

21



4



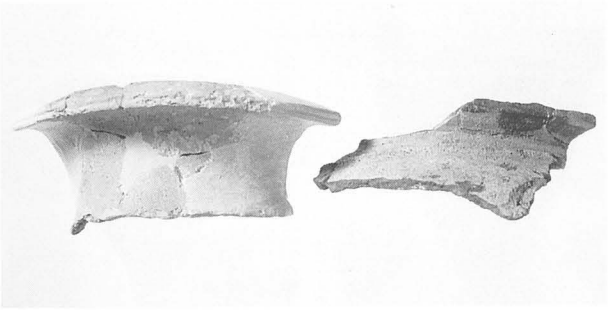
25・上26 ・下27

5

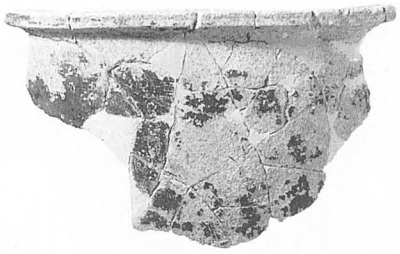
34

椎屋形第１遺跡　Ａ地区　弥生土器（２）

図版 12

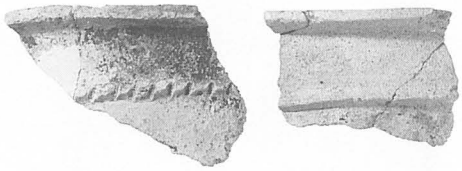


37・69

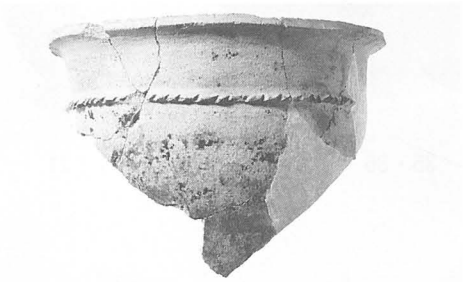


53

51・55・56

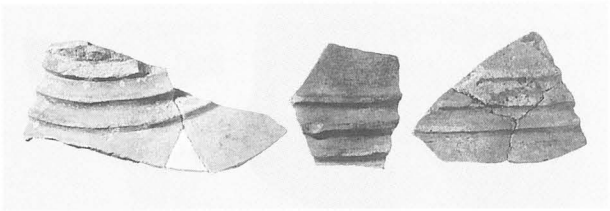


58・64

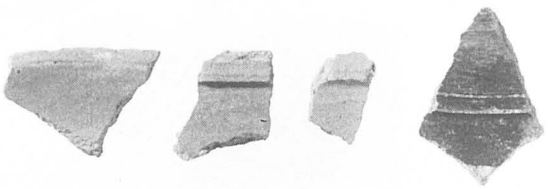


44

62・63・93　　68



82・83・88



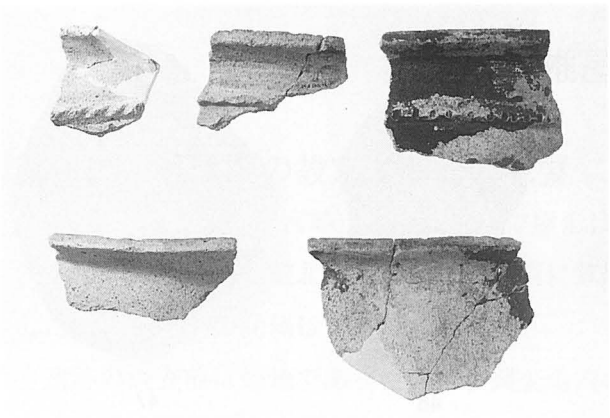
75・76・96・84

49

50

65

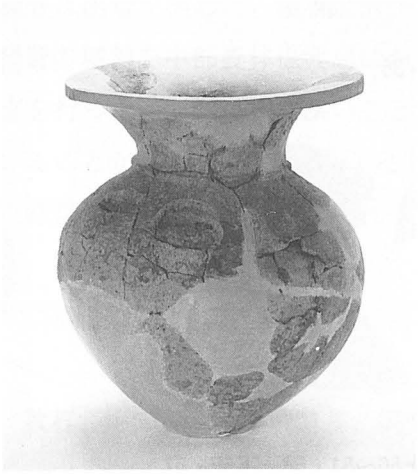
椎屋形第１遺跡　Ａ地区　弥生土器（３）



上89・90・97　下105・107

上91・92・104　下108・110

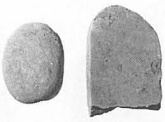
71



101

111

1



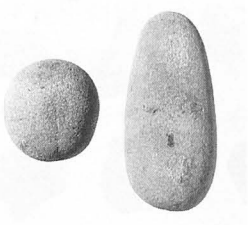
2・3

36

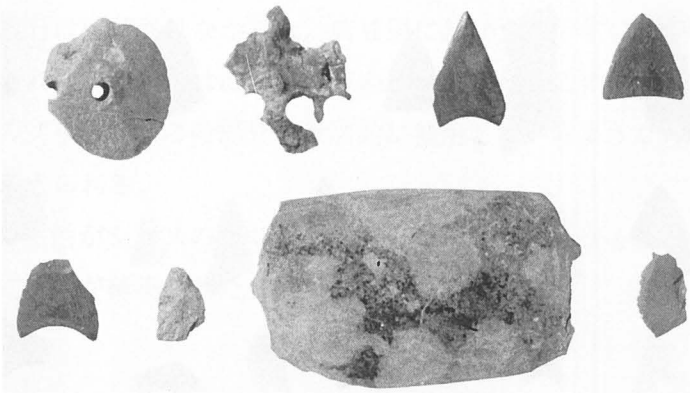
12

13・14・15

21・22



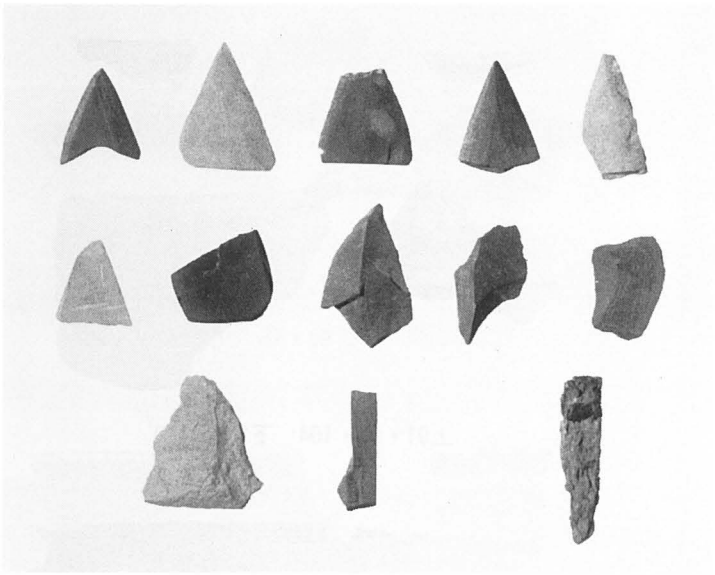
42・43



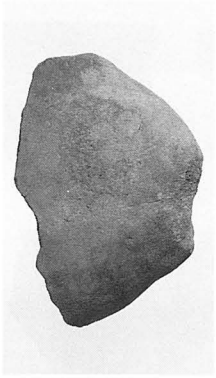
上4～7　下8～11

椎屋形第1遺跡　A地区　弥生土器（4）及び石器（1）　（石器は計測表の番号）

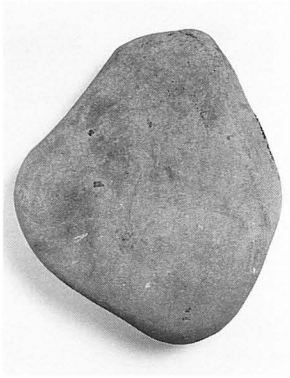
図版14



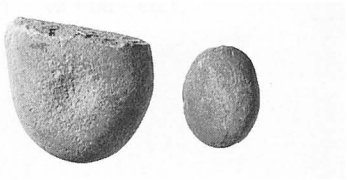
上23～27　中28～32　下33～35



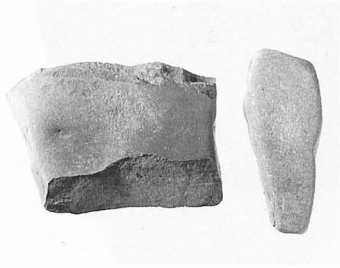
46



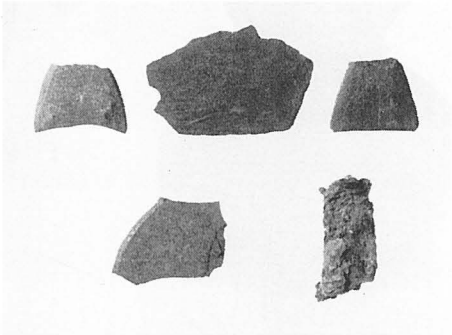
47



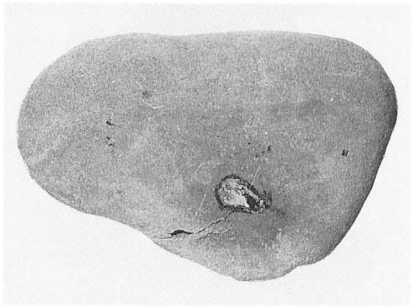
52・53



48・49

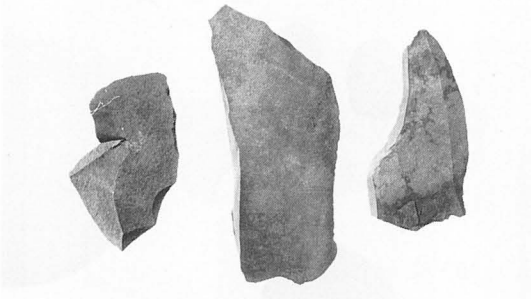


上50～51・54　下55・57

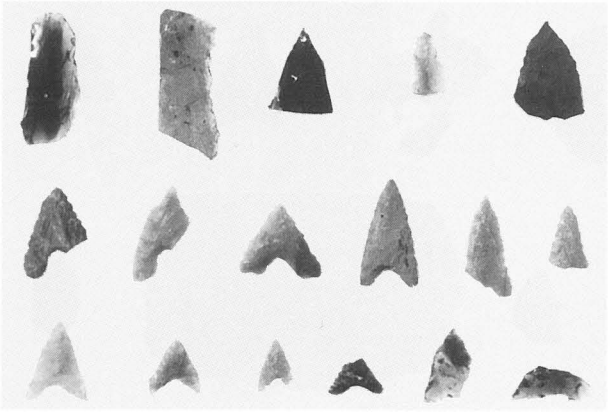


56

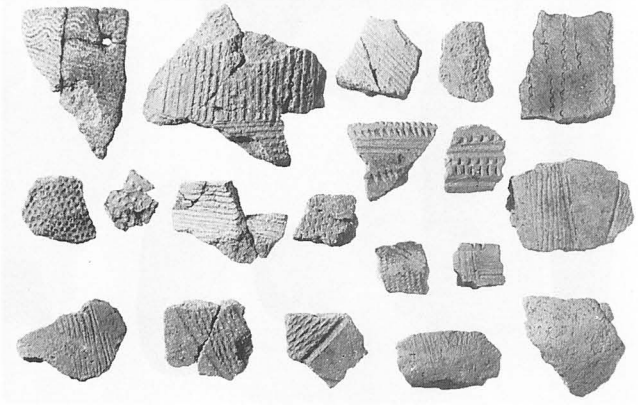
B地区　1磨製石斧　2石匙



B地区　3剥片　4～5 使用痕のある剥片



B地区　6～22（6～9 スクレイパー　10～22 石鏃）



B地区　出土土器　1～19

椎屋形第1遺跡A地区　弥生時代石器（2）及びB地区 縄文時代早期出土遺物

第Ⅲ章　椎屋形第２遺跡の調査

第１節　調査区の設定と調査の概要

椎屋形第２遺跡は宮崎市大字細江字椎屋形にある。遺跡は標高100m程度である。調査は、グリッド法を用いて行った。磁北を基準とし、東西に算用数字、南北をアルファベットを用いてグリッドを設定した。グリッドの間隔は10mである。

遺跡の調査前は畑地であったので、調査地内のほとんどがアカホヤ層まで削平されていた。当初予想された遺構は、集石遺構であった。試掘調査時に確認されていたためである。表土層を剥いだときにすでに散石遺構が見られた。集石遺構は散石遺構の下に確認されたので、集石遺構をメインとする調査を行った。集石遺構の数が多く調査は困難を極めた。集石遺構が終了間際になり、その下から炉穴が見つかり、終了予定日の延長と、経費の増額を中部農林振興局にお願いし、炉穴の調査を行うこととした。

炉穴は当初、土坑と思い調査を行ったが、幅が狭く深いことが不自然であった。そのうちに、炉部を検出し、ブリッジも遺存していることが判明したため、「連穴土坑」として扱った。

しかし、その後検討を重ねた結果、関東地方でよく使われる「炉穴」の名称を用いるのが妥当との見解に至った。

県内でこれだけ大規模な炉穴の調査は始めてであり、集石遺構の下から炉穴が検出されることを確認できた意義は大きい。

調査の結果、集石遺構69基、散石、炉穴23基、土坑21基、縄文時代早期の土器・石器多数が出土した。

第２節　調査の記録

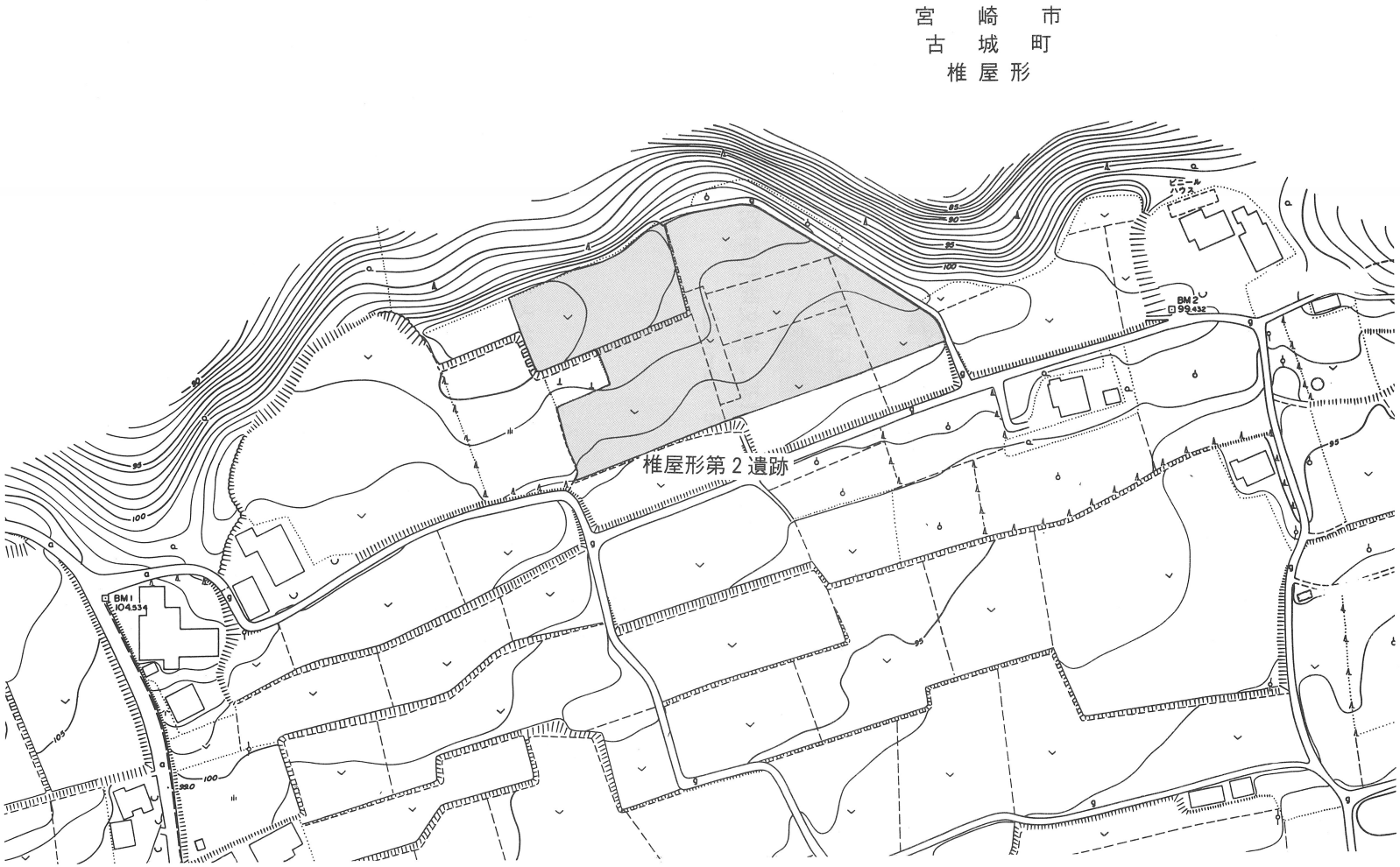
１　層序（第39図）

椎屋形第２遺跡の基本土層は第39図のとおりである。

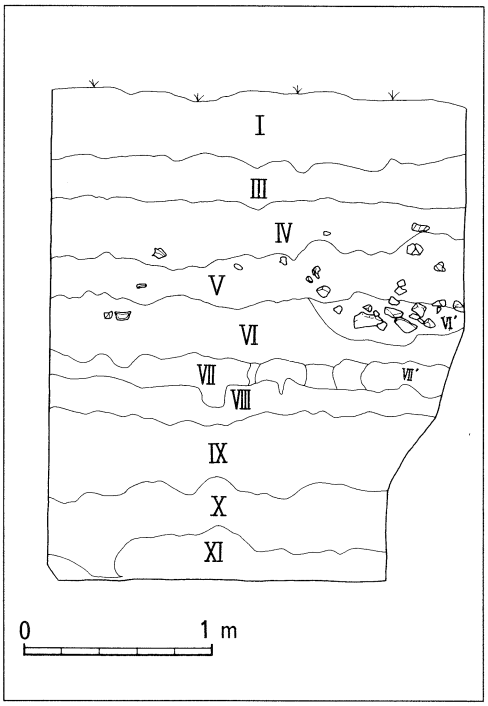
椎屋形第２遺跡では、火山灰の分析を行い、時期決定の一助とした。分析の結果は第３節に掲載したのでご一読いただきたい。

遺物包含層は第Ⅴ層である。暗褐色硬質土の中に遺物が多く含まれていた。集石の掘り込み面もこの層である。この層の上に光沢のある粒子を含む火山灰を含む層がある。その火山灰は霧島－蒲牟田スコリアの可能性が考えられる。蒲牟田スコリアは層序としてはアカホヤ降下後が確認されている。椎屋形第１遺跡で可能性が考えられた霧島－瀬田尾軽石は確認されなかった。第Ⅶ層に約15,000年前に降下したと考えられる小林軽石を多く含む層が確認された。この層は旧石器時代の層になるが、この層からの遺物の出土は見られなかった。しかし、炉穴のブリッジはこの部分を意図的に使用しているようである。この層は非常に硬く、それを利用したものと考えられる。

遺跡の北側では、土層の堆積が悪く、早期の生活がシラスの上で営まれていた。南側に下がるにつれて土層の堆積は急激に厚くなっており、そこに炉穴が構築されたものである。



第38図　椎屋形第２遺跡　周辺地形図



第39図　椎屋形第２遺跡　基本土層図

Ⅰ層：暗褐色軟質土　耕作土である。軟らかく粘性が少ない。直径２～３mmのアカホヤ粒をまばらに含む。

Ⅱ層：漆黒色軟質土　やや粘性を帯びて軟らかく、黒味の強い層である。遺存状況は悪く遺跡内では部分的にしか残っていない。

Ⅲ層：黄褐色硬質土　プライマリーなアカホヤ層である。

Ⅳ層：黒褐色硬質土　ローム層である。この層の下半部に白い粒子と光沢のある粒子を多く含む火山灰が混じる。

Ⅴ層：暗褐色硬質土　遺物包含層である。Ⅳ層よりも明るい色をしており、Ⅵ層をブロック状に含む。

Ⅵ層：褐色硬質土　ローム層である。粘性が高く硬い。小さなパミスをまばらに含む。場所によりⅦ層をブロック状に含むところがある。

Ⅵ′層：黒褐色軟質土　集石掘込の埋土である。炭化粒や白いパミスをまばらに含む。粘性は弱くⅥ層に比べると黒味が強く軟らかい。

Ⅶ層：明黄褐色硬質土　小林軽石を多く含みやや粘性を帯びている。基層はローム層である。

Ⅶ′層：明黄褐色硬質土　基本的にはⅦ層と同じローム層であるが、小林軽石をほとんど含まない。

Ⅷ層：明褐色硬質土　粘性が強く明るい色のローム層である。小林軽石をまばらに含む。細かな炭化粒をまばらに含む。

Ⅸ層：明黄褐色軟質土　粘性が強く軟らかいローム層である。パミス、スコリアを含まない。土の粒子は非常に細かく、柔らかな手触りである。

Ⅹ層：明褐色硬質土　Ⅸ層に較べてやや色が暗く、硬い。下部に直径１～２mm程度のパミスを含む。土の粒子もⅨ層に較べて粗くなり、ややざらつく。

ⅩⅠ層：明淡黄褐色軟質土（シラス）　やや土壌化したシラス層である。５mm程度のパミスをまばらに含む。土の粒子はⅩ層よりも大きくザラザラしている。粘性は少ない。

2　縄文時代早期の遺構と遺物

1　　土坑（第41～第44図）

土坑は、調査区の中央部部分に集中して分布する。C－11・D－11グリッド付近は尾根に近い部分なので土の堆積状況が悪く、開墾により削平も受けているので、遺構の残りは良好ではない。

椎屋形第2遺跡の土坑には、いくつかのタイプが存在する。

1型：円形の土坑。2号・42号・20号

2型：楕円形の土坑。1号・3号・11号・12号・15号・22号

2ａ：長径の短いもの

2ｂ：長径の長いもの

3型：隅丸方形土坑。10号・26号

3ａ：大型のもの

3ｂ：小型のもの

4型：足場と炉部を持ち、その境界にはブリッジを持つもの。または、持っていたと思われるもの「炉穴」という。

5型：不定型な土坑。16号・18号

炉穴は、今までスプーン状土坑・連穴土坑と呼ばれていたものである。これまで、関東で多く見つかっている炉穴と類似する事が指摘されていたが、同一のものかどうかが疑問視されていた。今回調査して、時期的には若干の差はあるものの、形態的に同一のものと考えて良いと思われる。

本来ならば、独立して炉穴の項を設けるべきであったが、整理の都合上土器の注記が調査時に付けた番号で付されていたために今後の混乱を避けるため、あえて調査時に付した土坑としての番号で報告するものである。

第41図の土坑実測図はD－11グリッドに分布する土坑群である。D－11は調査区内でも土層の堆積の薄い部分に当たり、遺構の残存状況は良好とは言えない。

1号土坑

長径が149cm、短径が130cmのだ円形を呈する。東側にテラス状部分を有する。断面形はすり鉢状を呈し、もっとも深い部位分の検出面からの深さは47cmである。

2号土坑

長径が160cm、短径が132cmの円形を呈する。深さは約30cmである。1号土坑に切られている。

10号土坑

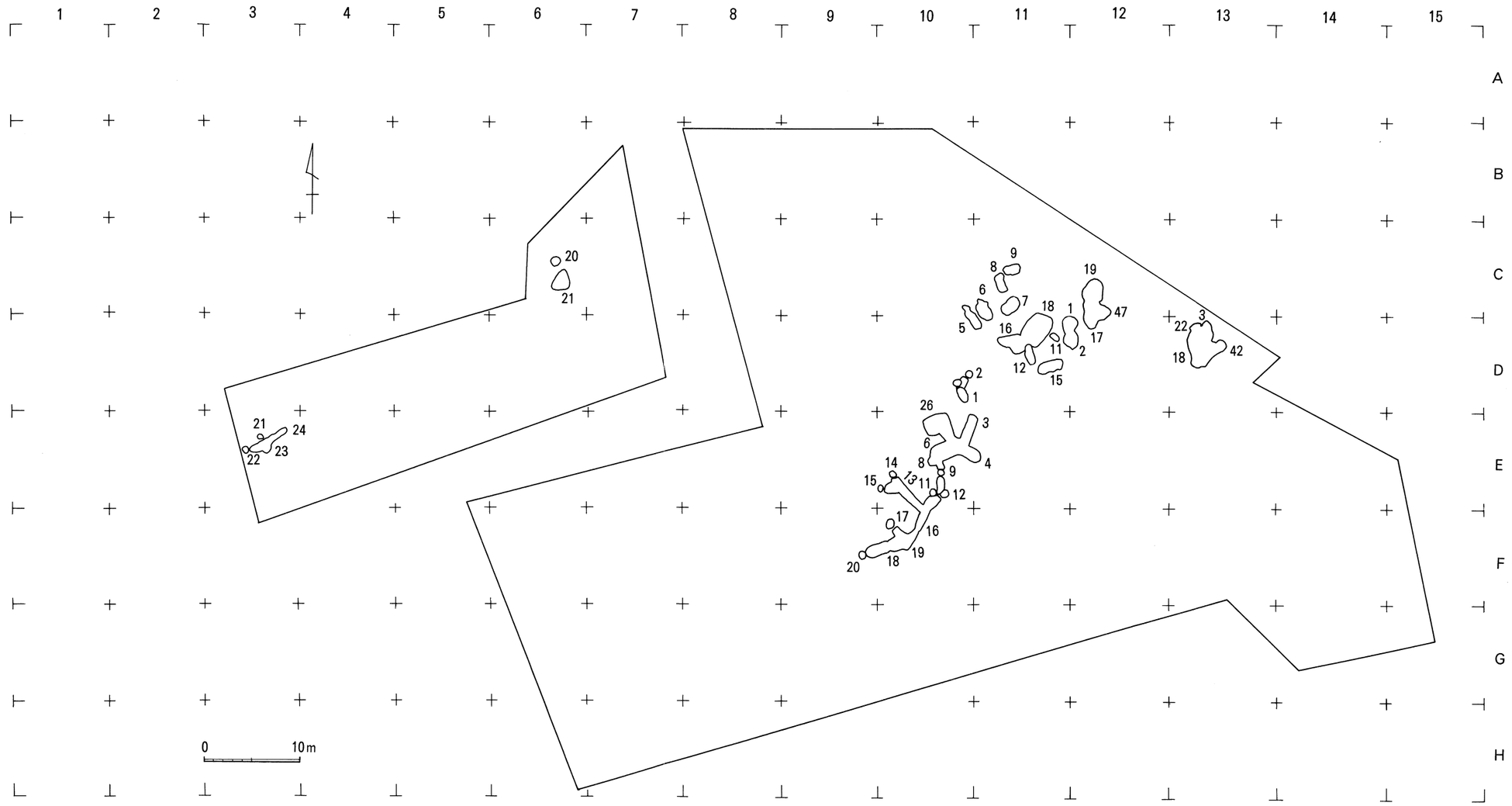
大型の方形の土坑である。長径は308cm、短径は213cm、深さは約20cmである。土坑内に柱穴は確認されなかったので土坑とした。土坑の周囲にも柱穴は確認されなかった。底面は平坦で踏みしめられてはいなかった。

11号土坑

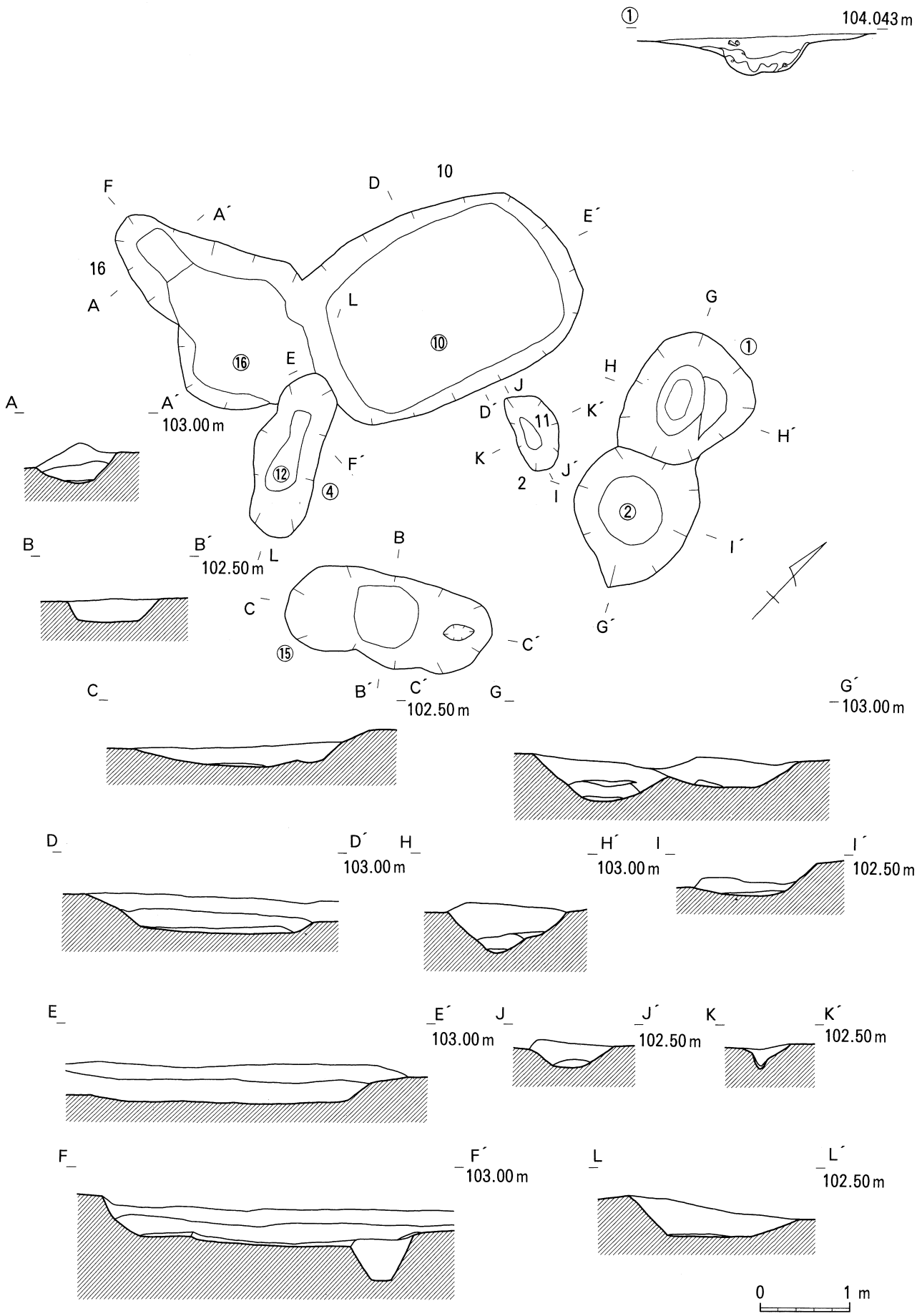
楕円形を呈する土坑である。長径は92cm、短径は50cmである。深さは約20cmで底面は細長く狭い。

12号土坑

長径は188cm、短径は70cm、深さは約45cmの楕円形を呈する。



第40図　椎屋形第２遺跡　土坑・炉穴分布図



第41図　椎屋形第２遺跡　土坑実測図（１）

15号土坑

長径は230cm、短径は100cm、深さは約36cmの楕円形を呈する。東側にテラス状部分を有する。

16号土坑

不定型な土坑で長径が260cm、短径が短いところで78cm、長いところで176cm、深さが約38cmである。この土坑は形態から崩壊した炉穴の可能性も考えられたが、この場所は遺跡が営まれた当時から土の堆積が悪く、褐色土層が薄かったと考えられるため、炉穴を構築するために十分な深さの確保は難しかったと思われる。このことから、16号土坑は炉穴の可能性は極めて薄いと考えられる。16号土坑は、12号土坑に切られているが、10号土坑との切りあいの前後関係は把握できなかった。

第42図はD－13グリッドに分布する土坑群である。

3号土坑

長径は173cm、短径は97cm、深さは約40cm～約66cmの楕円形を呈する。

18号土坑

長径が334cm、短径が234cm、深さは約30cmの不定形で大型の土坑である。中央に長径73cm、短径66cmの落ち込みを持つ。18号土坑は、3号・22号・42号土坑に切られている。

22号土坑

長径は122cm、短径は74cm、深さは約20cmの楕円形を呈する。18号土坑を切っているが、3号土坑に切られている。

42号土坑

長径が110cm、短径が92cm、深さは約20cmの楕円形を呈する。

5号土坑

長径は334cm、短径は102cm、深さは約63cmの長楕円形を呈する。長径の方向は北北西である。中央部にすり鉢状の深い部分を有する。

6号土坑

長径は266cm、短径は144cm、深さは約38cmの長楕円形を呈する。長径の方向は北北西である。南側に向かってなだらかに立ち上がる。5号土坑と6号土坑はC－10グリッド・C－11グリッドにかけて並んで分布する。

7号土坑

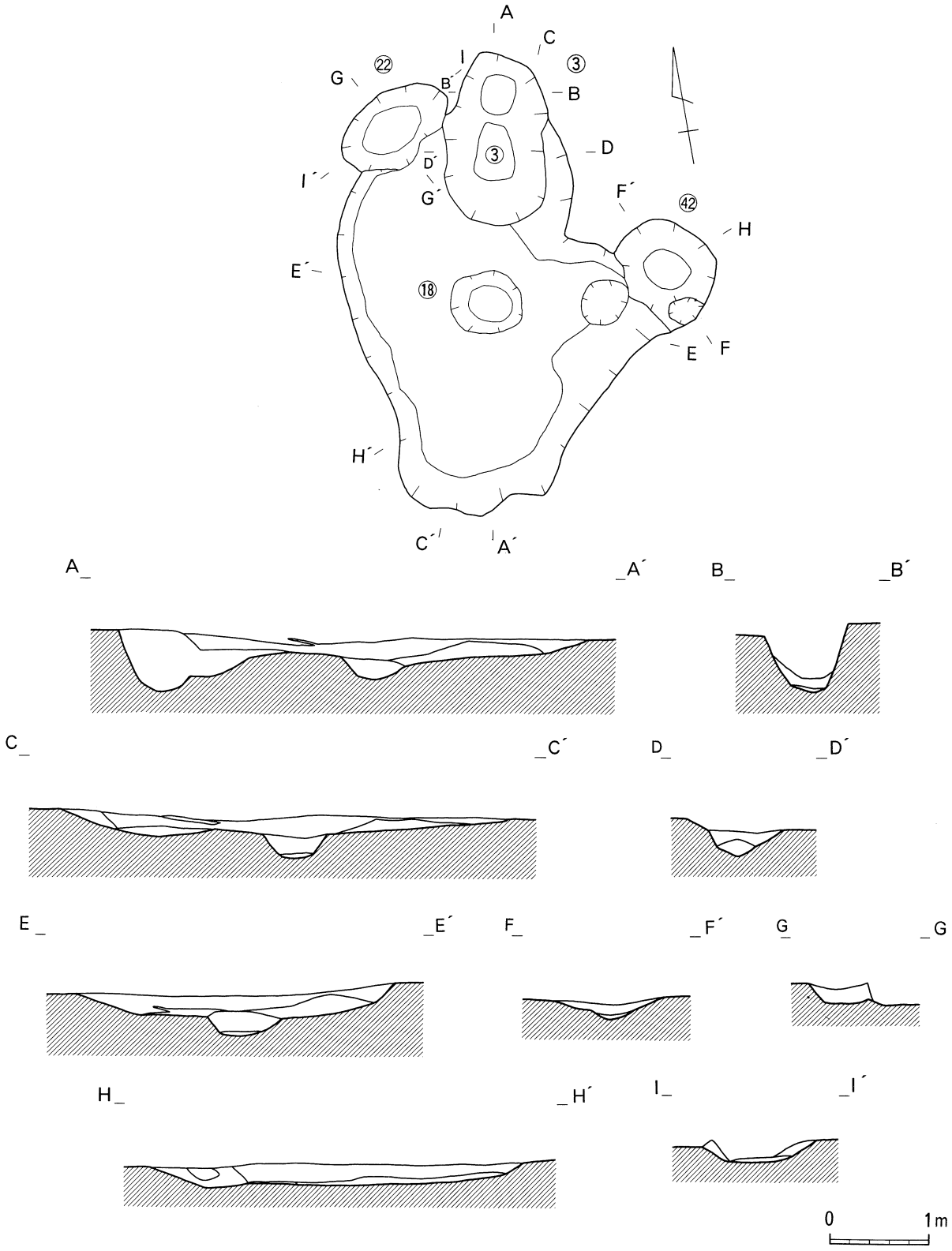
6号土坑の東約1mのところに位置する。長径は246cm、短径は138cm、深さは約32cmの隅丸方形を呈する。底面は平坦である。底面にも周囲にも柱穴は確認されなかった。長径の方向は東北東である。

8号土坑

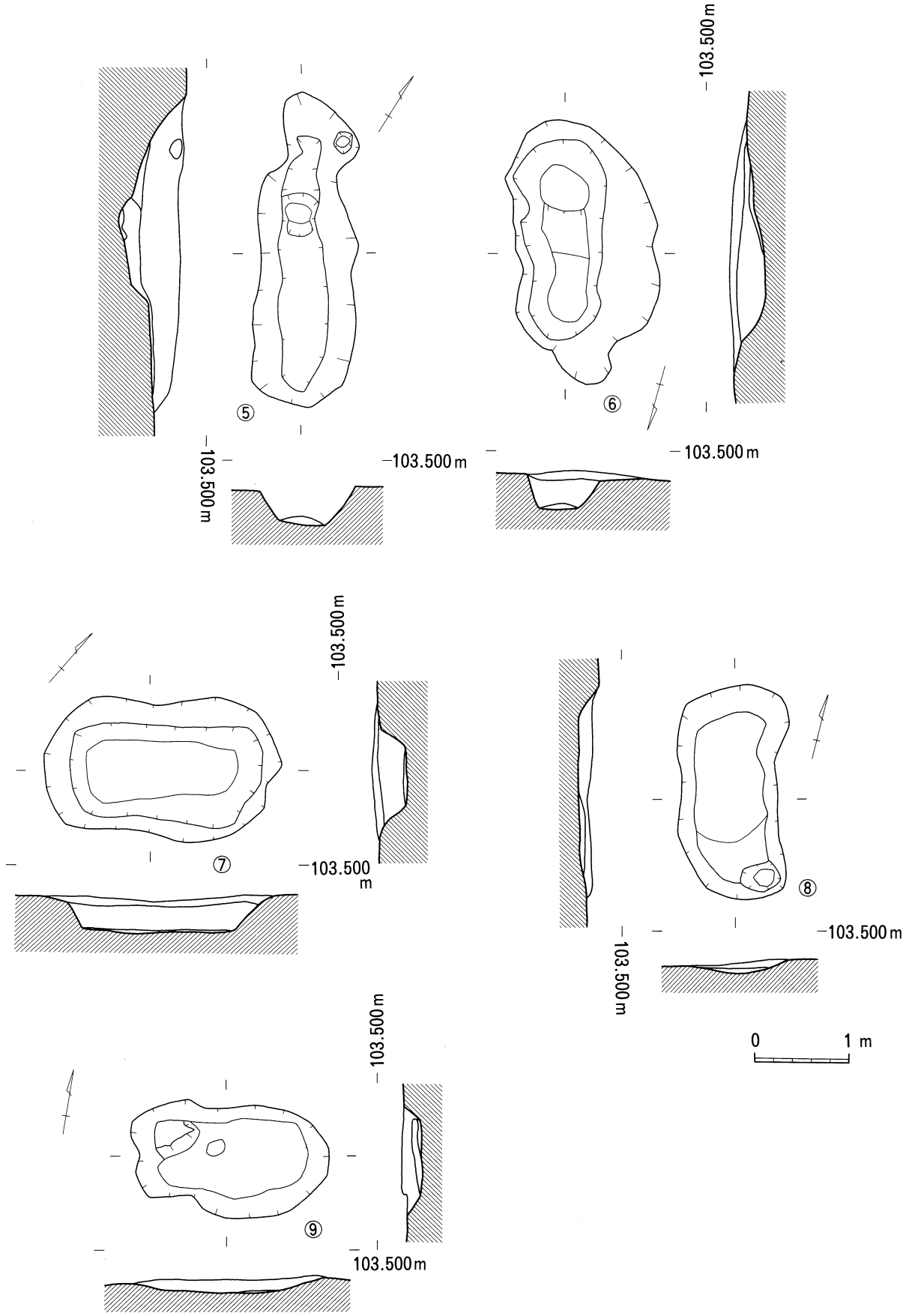
7号土坑の約1m北側に位置する。長径は226cm、短径は102cm、深さは約20cmの隅丸方形を呈する。長径の方向は、北北西である。南側端に長軸42cm、短軸32cmの落ち込みが見られる。

9号土坑

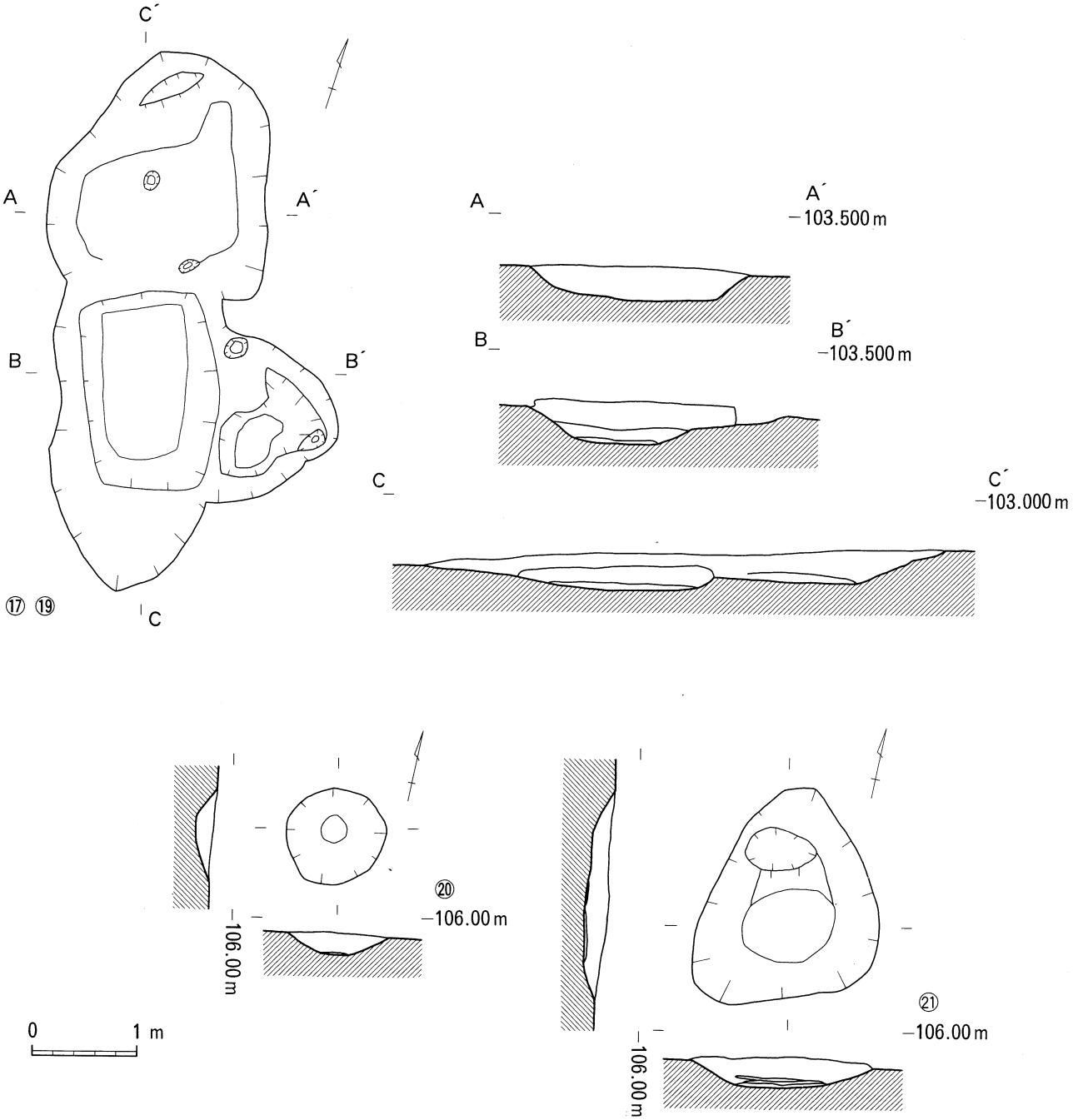
8号土坑のすぐ隣に位置する。長径方向は西で8号土坑と直交する。長径は200cm、短径は118cm、深さは約20cmの隅丸方形を呈する。西側端に落ち込みを持つ。7～9号土坑はC－11グリッドに位置し、5号・6号土坑と近い。7号土坑の約2m南側に16号土坑が分布する。



第42図　椎屋形第２遺跡　土坑実測図（２）



第43図　椎屋形第２遺跡　土坑実測図（３）



第44図　椎屋形第２遺跡　土坑実測図（４）

17号土坑

Ｃ－12グリッドに位置する。長径は189cm、短径は129cm、深さは約15cmである。大型の隅丸方形を呈する。すぐ脇に47号土坑がある。

19号土坑

17号土坑のすぐ北側にあり、17号土坑に切られている。長径が209cmで長径方向が東北東を向いている。17号土坑の長軸方向は北北西なので２基の土坑の長軸は直交する。２基の土坑の中に３個の柱穴が見られるが、土坑に伴うものではないと考えられる。土坑よりも新しい時期のものと考えられる。

20号土坑

Ｃ－６グリッドに位置する。長径・短径共に95cmの円形の土坑である。深さは約20cmである。すぐ隣に21号土坑がある。

21号土坑

長径は200cm、短径は174cm、深さは約38cmの楕円形を呈する。長径方向は北北西で北側にテラス状部分を有する。

2　炉穴（第45図～第46図）

第45図は「炉穴」の実測図である。この炉穴は、後述する集石遺構に完全にパックされた状態で残されていた。当初炉穴の存在は予想されなかったが、常々集石遺構の下には何か遺構が有るのではないかとの指摘があった。図らずもこの調査によってその指摘は正しかったことが証明された。遺構の確認は偶然からであった。集石遺構の掘り込みを確認中、異常に深い掘り込みを発見し、さらにそれが横方向に伸びはじめたことが炉穴発見の糸口となった。このため、遺構検出のために遺構の上部がカットされることなしに遺構が検出されることとなった。遺構は23号土坑から検出された。当初ブリッジや焼土は確認されておらず、深い通路状の遺構かと思われたが、同時に検出した13号・14号土坑にブリッジが残ったこと、炉部から煙道部分に焼土が確認されたことから炉穴であることが確認された。このとき、鹿児島県文化課の新東晃一氏ほか多くの方のご教示をいただいた。

炉穴は、大きく３つのブロックに分かれて検出された。１カ所はヤツデ状に炉穴が集中しているＥ－10・Ｆ－10グリッドである。その隣のＤ－10グリッドにブリッジを持つものが２基切り合って検出された。調査区の西端のＥ－３グリッドでは４基切り合って検出された。炉穴は合計24基確認された。単独で存在するものはなく、すべて切り合っていた。埋土はどの遺構も硬く締まっており、地山のほうが軟らかいという特徴を持っている。ブリッジは崩落したものも多いが、遺存したものもあった。この場合、小林軽石を含む層をブリッジとしていたことが確認された。小林軽石を含む層は外の層よりも硬く、掘り込み面から適当な深さを持っていたためにブリッジとされたと考えられる。

３号炉穴（23号土坑）

幅100cm、深さ約140cmを測る。ブリッジは残っておらず、足場の先端から煙道の端まで320cmを測る。炉部の煙道の真下部分に焼土が見られた。

４号炉穴（24号土坑）

幅120cm、長さ200cm、深さ100cmを測る。23号土坑の足場の延長上に焼土が確認された。

５号炉穴（25号土坑）

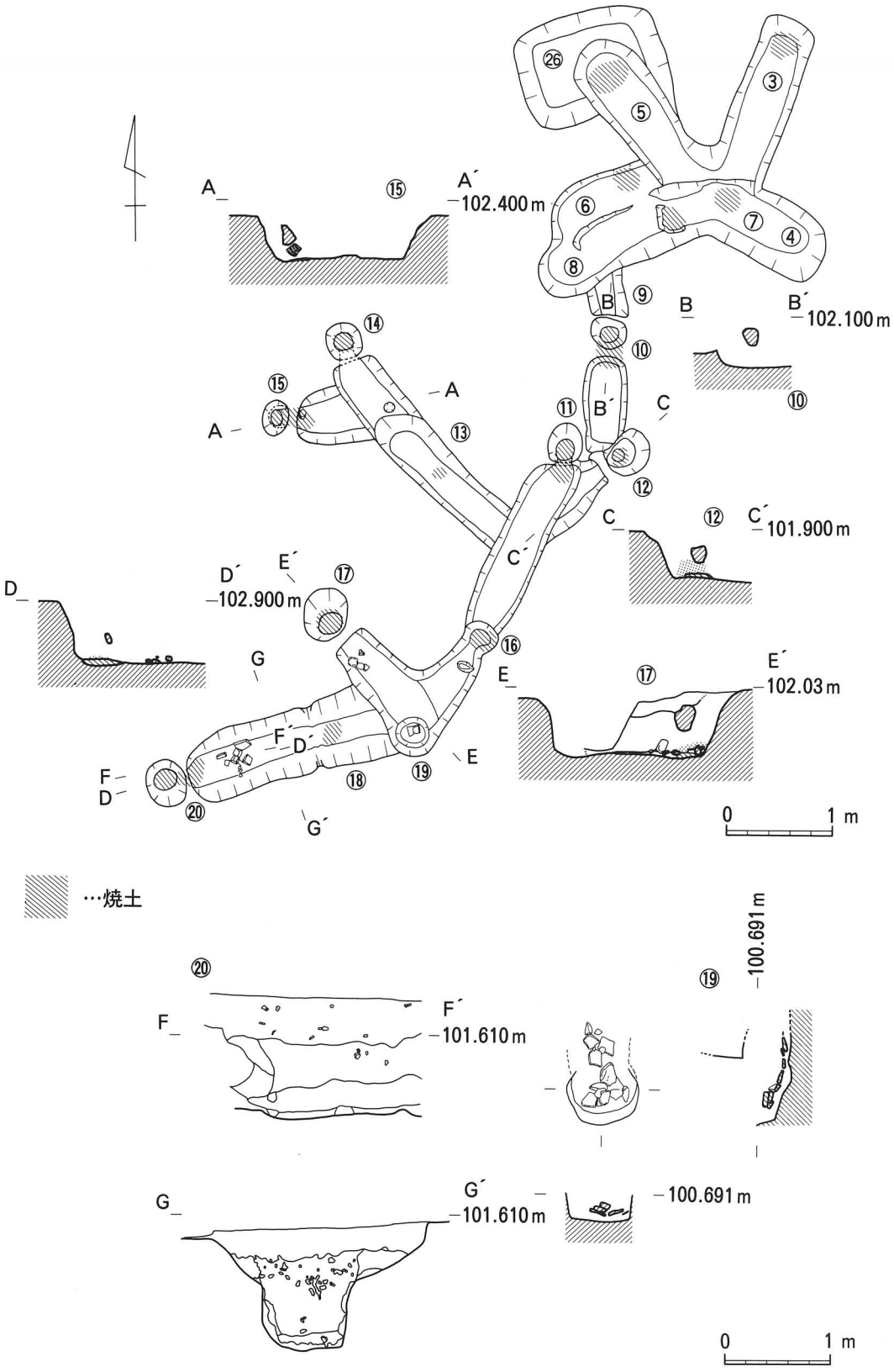
幅120cm、長さ310cm、深さ118cmを測る。26号土坑を切っており、その部分に焼土が見られる。

26号土坑

大型の方形の土坑で長径が280cm、短径が200cm、深さ80cmを測る。土坑内に柱穴は確認されなかった。土坑の周囲の柱穴は時間的余裕が無かったため未確認である。

６号炉穴（27号土坑）

幅75cm、長さ210cmを測る。25号土坑の足場付近に焼土が見られる。



第45図　椎屋形第２遺跡　炉穴実測図（１）

7号炉穴（28号土坑）

24号土坑と27号土坑の間に焼土を伴うわずかなくぼみとして確認された。くぼみは炉部で、足場や煙道は跡形もなく外の炉穴に切られてしまっている。

8号土坑（29号土坑）

幅110cmの足場だけを28号土坑の西に確認した。焼土等は遺存していなかった。

9号炉穴（30号土坑）

30号土坑の足場と31号土坑の煙道部は切り合っている。30号土坑の足場は幅70cm、深さ49cmを測る。

10号炉穴（31号土坑）

ブリッジがよく残っており、ブリッジの下から煙道の下にかけて焼土が遺存していた。31号土坑の足場は幅83cm、長さ180cm、煙道部は短径60cm、幅68cmを測る。

11号炉穴（32号土坑）

ブリッジ部分は崩落していたがブリッジの痕跡が見られた。また、焚き口（足場の炉部側の末端）から煙道の真下まで焼土が残っていた。煙道の上部まで焼けた痕跡が見られる。足場の幅90cm、煙道の長径75cm、幅67cmを測る。足場は37号土坑の煙道端まで続くように見えるが、ここまでの長さは330cmを測るので37号の煙道との間にもう1基検出できなかった炉穴が隠れている可能性も否定できない。

12号炉穴（33号土坑）

ブリッジが遺存しており、31号土坑の足場を切っている。煙道部分の短径は87cm、幅は70cm、足場は32号土坑に切られている。

13号炉穴（34号土坑）

35号土坑の足場の途中に焼土が確認されるだけである。足場や炉部の痕跡は見られない。

14号炉穴（35号土坑）

足場の幅93cm、長さ120cm、深さ96cm、煙道部分の長径70cm、幅65cmを測る。ブリッジは遺存していなかったが痕跡が確認された。足場に直径40cm、深さ22cmの柱穴が1個確認された。35号土坑からほぼ垂直に枝分かれしているのは36号土坑である。

15号炉穴（36号土坑）

足場の長さ110cm、深さ84cm、煙道部分の短径52cm、幅70cmを測る。ブリッジは良く残っており、焚き口に底を抜いた土器が口縁部を下にして斜めに置かれていた。底部は焚き口が側に向いて傾斜していた。焚き口から煙道部分にかけて焼土が良く残っていた。炉穴から遺物が出土することは珍しいことではないが、完形に近い土器が焚き口に据えられて出土したのはこれが始めてである。用途は不明である。土器に関する記述は遺物の項で行いたい。

16号炉穴（37号土坑）

32号土坑の足場端に煙道を持ち、焼土とわずかなブリッジ痕が確認された。足場には長径55cm、短径18cmの柱穴状の遺構が確認された。足場の幅80cm、長さ130cm、炉部の長径65cm、短径46cmを測る。

17号炉穴（38号土坑）

足場の幅96cm、長さ230cm、深さ118cm、煙道の長径99cm、短径80cmを測る。ブリッジが良好な状

態で遺存していた。焚き口から煙道にかけて大小あわせて10個程度の石が配置されていた。焚き口側には高さ27cm、幅16cmの角の丸い方形の砂岩が立ててあった。この石は肉眼では赤変が認められなかった。この石の周りに赤変して拳大に割れた砂岩が5～6個置かれていた。煙道内にも直径20cm程度の石を中心に4個の赤変して割れた砂岩が配置されていた。この炉穴も煙道の壁が高さ20cm程度赤変していた。煙道部は焚き口部よりも5cm程度掘りくぼめられている。

19号炉穴（40号土坑）

時間の関係で煙道部分しか検出できなかった。煙道部分の長径65cm、短径56cmを測る。煙道部分に8個、焚き口部分に7個の扁平な石が配置されていた。石はいずれも床面からやや浮いた状態で確認された。この炉穴の足場は南側に向かって伸びていたのでこの他にも時間の都合で検出できなかった炉穴7が存在する可能性が考えられる。

18号炉穴（39号土坑）

40号土坑から41号土坑に通じる通路上に焼土とブリッジの痕跡が認められたものである。幅124cmを測る。ブリッジ痕よりも焼土が41号土坑側にあることから、まず39号土坑が作られ廃棄されて40号土坑の方へ拡張され、最後に41号土坑が作られたと考えられる。

20号炉穴（41号土坑）

足場の幅は122cm、長さ240cm、深さ125cm、煙道の長径89cm、短径74cmを測る。足場に9個の石が配してあり、中に炭化物混じりの焼土が確認された。配石付近の壁にはブリッジの痕跡は見られなかった。石はどれも良く焼けて赤変している。焚き口から煙道にかけて焼土が多く確認された。ブリッジの遺存状況は良好であった。

1号炉穴（13号土坑）

3号炉穴の北に2基切り合って分布する。足場の幅88cm、煙道の長径80cm、短径76cmを測る。ブリッジが遺存する。炉部の壁面が焼けている。

2号炉穴（14号土坑）

1号土坑に切られている。ブリッジは崩落しており痕跡が残されている。足場の幅76cm、煙道の長径88cm、短径83cmを測る。煙道内に焼土が残されていた。

21号炉穴（43号土坑）

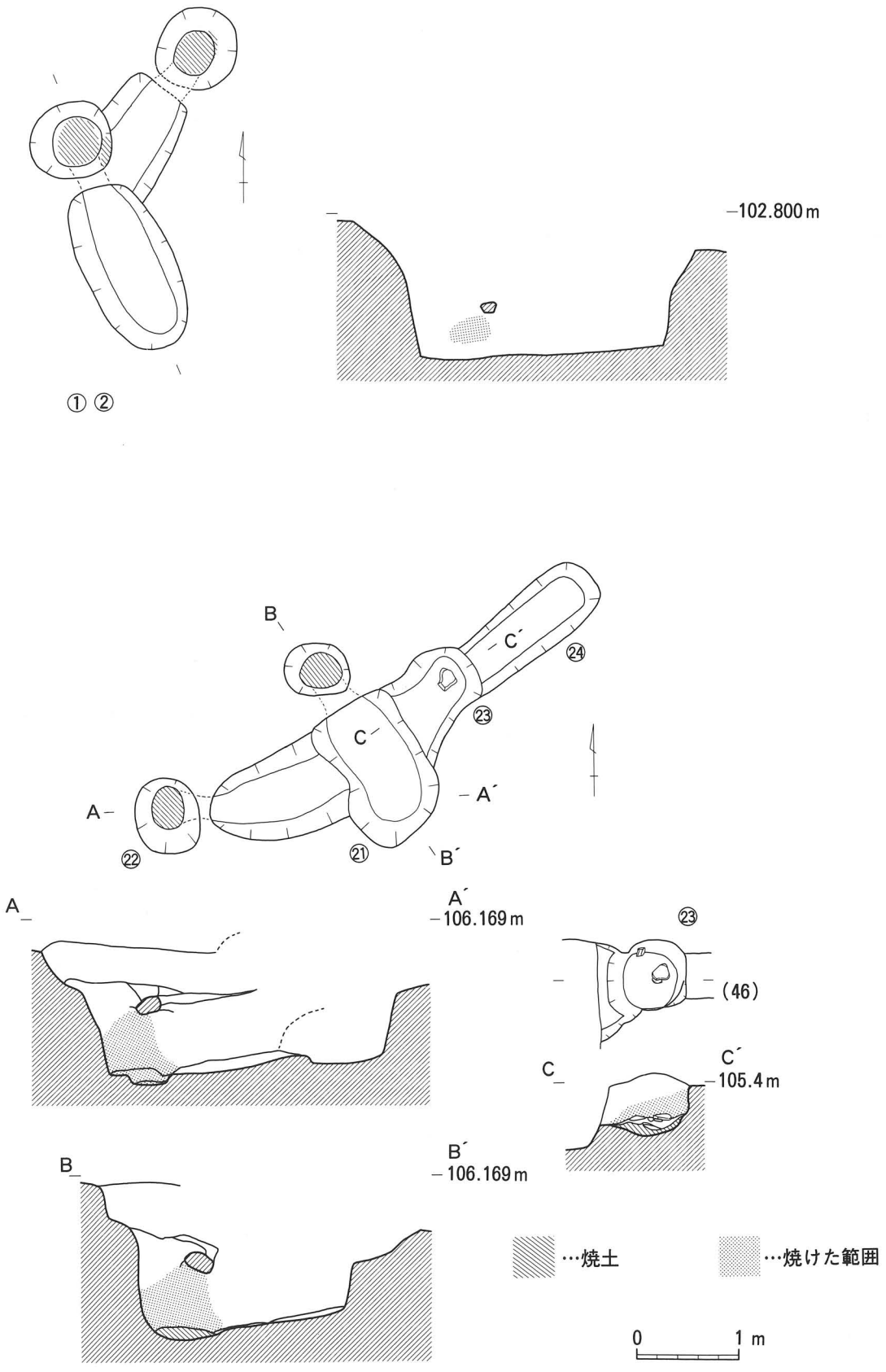
E－3グリッドに分布する炉穴群の中の1基である。その中でも最も西側に位置している。足場の幅86cm、長さ136cm、煙道部の長径74cm、短径62cmである。煙道内に焼土が確認された。煙道は直径40cm、深さ10cmにわたって掘り窪められている。煙道の壁面まで焼けている。

22号炉穴（44号土坑）

足場の幅80cm、長さ124cm、煙道の長径62cm、短径53cmを測る。43号土坑とほぼ直交する。ブリッジは良好に遺存しており、ブリッジの下面も焼けている。煙道の壁面は広い範囲で焼けている。炉部は直径73cm、深さ10cmにわたって掘られている。この中に焼土が入っている。

23号炉穴（45号土坑）

44号土坑と46号土坑の間に炉部と足場の一部だけが残された遺構である。検出時扁平な石が確認されたが、この石は肉眼観察の結果火を受けた可能性が考えられる。しかし、断面観察を行ったところこの



第46図　椎屋形第２遺跡　炉穴実測図（２）